
ー少女と、世界を駆ける魔法使い志望の格闘娘と、タイムトラベルツンデレ時空官と、近所のお

あかさはまな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙人で王女様で記憶喪失な幽霊と、魔法少女にされたヤンキー少女と、世界を駆ける魔法使い志望の格闘娘と、タイムトラベルツンデレ時空官と、近所のお姉さんは神様！な教師と、生徒会長兼恐怖の幼馴染みと、ボク

【Nコード】

N4832U

【作者名】

あかさたはまな

【あらすじ】

主人公は入学初日にスケ番ヤンキーな魔法少女と出会い、記憶喪失なのにおっとりとした幽霊に取り憑かれ、異世界から来た魔法使いを目指している戦士に出会って、ついでに、担当教師が昔近所にいたお姉ちゃんだった。その後にも、未来から来た子に巻き込まれたり生徒会長に迫られて

⋮

お嬢様と侍女

ホワンホワンホワン……………。

ピーピー、ガーガー。

ウイン、ウイン……………ピロピロ、ピロピロ。

ピロロ、ピロロ、ピロロ、ピロロ。

ピー、ピー、ピー！

……………ザザザ……………ザザ……………ザ……………

ピコーン！ 送信シマシタ。確認シテ下サイ。

ポポピポプペポ……………プルルル、プルルル……………

ジジジー、ザザー、ウインウイン。

……………ん？ なに？ 擬音ばかりじゃ駄目？

何が起きているかわからない？ 大体わかるでしょ？ イマジネ

ーションを働かせて……………

え？ 手抜きじゃないかって？ 失敬な！ ……………コホン。

ここは小さな部屋の1室。

6畳部屋よりも少し広いようだが1つも窓がなく、密閉閉鎖された空間なので体感的にはかなり狭く感じられる。

そのかわり、と言わんばかりに、天井までは3〜4m程の吹き抜けがあり、1つの部屋というよりも、現代的なアートのような構築

だった。

ただ、アートと称するには少しシンプルすぎる。

生活用品もインテリアも一切置いておらず、部屋のメタリックな様相も相まって、より一層、無機質な部屋に見えてしまう。

リノリウムのような金属で壁が構成されているのも、無機質感を更に引き立たせていた。

壁面に電気が通っているのか、とところどころ一筋の虹色の光が走っていてとてもオシャレなのだが、どうやらそれは通信をする際に必要なものらしい。

それらの情報をまとめて、しばし考慮する。

なるほど……どうやらここは、TVでよく見る司令室のようだな。なぜなら、部屋のプレートに『司令室』と書かれていたからだ。だから間違いないだろう。

決してプレートを見てはじめて気付いた、というわけではない。

その司令室には、1人の女性だけしか居らず、さっきから忙しそうに手を動かしている。

何をしているかというと、近未来の設定でよくある、空中に浮かぶディスプレイのような半透明のパネル、

『アレ』をいくつも浮かばせており、それを物凄い早さで操作していた。

次々と画面を点けたり消したりとせわしない。

うーん。いつも思うのだけれども、本当にちゃんと操作できているのか疑わしい。

というか絶対ムリだろあんなの。

画面が点いたり消えたりしてたら効率も悪いはずだし……おっと、そんな事はどうでもいいとして。

その華麗な手さばきを披露しているのは、25・26前後の妙齢で、紫の髪をなびかせている女性だった。

見た所、人間のようにも見えるけれど肌の色が若干青白く、人間

のそれとは違う。

パネルにいくつもの星が見えている所から推測するに……どうやら彼女は宇宙人のようだ。

という事は、ここは宇宙船の操作室か。

すると、この小説は壮大なSFファンタジーなのだろう。期待しているよ。

最近、宇宙物が少ないからね。……ああと、また話が脱線してしまったな……話を戻して。

その女性は、長時間ずっと画面を見ていたのだろうか目頭を押さえて、

しかし、また次々と雪崩のように来る連絡を迅速に1つ1つ対応している。

耳にはインカムのような物（多分、それ以上の性能だろう）をつけており、今もどこかの誰かと通信を取っていた。

「……わかりました。はい、はい……はい、ありがとうございます。その件に関しては、また追って連絡いたします」

ディスプレイに映っている何者かに、何度もお礼を言いながら通信を切る。

そして、また作業へと戻っていった。

いくつもの業務を1人でこなしており大変そうだ。他に添乗員はいないのだろうか？

だが、女性は文句の1つも言わず次々に資料を読み上げて、コエンマ大王みたいにハンコを押してる。

……そこだけ、ずいぶんとアナログだな。

そうして、全部の資料にハンコを押し終え、自分で自分の肩を叩いて、伸びをする。

「ふう……急な予定変更だと、様々な方面に頭を下げて、申請しなければいけないのが辛い所だな……しかし、お嬢様の為だ。頑張らねば」

彼女はそう自分に言い聞かせて、作業を再開するが、

ピーピーピー。

どうやら、またどこから通信が来たようだ。

「こちら、……ザザ……M8……ザザ……星雲……からです。先ほどの質問の回答についてです。今、大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫です」

少し電波の調子が悪いようだけれども、気にせずに通信を継続する。

「そちらの言っていた『星』の治安は、私どもも最近、飛来していないので確証は出来ませんが、それでも他の惑星に比べれば十分に安全かと思われます。」

滞在を目的としているのならば、断然こちらをおすすめします。

昔は宇宙から敵が毎週攻めてくる事もあったのですが、

最近は怪獣と戦うのも流行らなくなつて、スポンサーもつきにくく……ゴホンゴホン、いえ、めつきり怪獣が現れなくなつたので、それも大丈夫でしょう」

スプーンのような目をした星人が饒舌に……フリップに文字を書いて筆談してくる。

？ この人はしゃべれないのだろうか？ 彼女もご丁寧にメールで応じ始めた。

「この惑星の住民とあなた達とは体の比較が違つたので、この星の事を知っていたと聞いた時は驚きましたが……そうですか。ありがとうございます」

「いえいえ、お気になさらず（笑）……それにしても遠い所からこんな辺鄙な所まで来られて、さぞかし大変な旅だったのですね。お体に気をつけて下さい。こちらからは以上です。デユワ！ ……じゃなかった、では！」

「わかりました。質問に答えていただき、感謝致します。そちらも体に気をつけて」

胸にカラータイマーを着けた人物との通信を終える。

どうやら彼女は、今から向かう惑星と関わりのある人物たちと連絡を取っているようだ。

ピーピーピー。

またどこからか通信が来た。

「はい、もしもし。こちら、ウル星ヤトウーラ国の『サラ』です」

「こちら、この惑星の駐在監視員です。今回は急の予定で、こちらに不時着されるとの事ですね？ 何かあったのですか？」

今度は赤紫っぽい髪のメガネをかけた、うら若い女性が画面に出てきた。

「はい。我々の大切なお嬢様が、長旅のせいか体調を崩されてしまい、大事を取って、一旦休養を取る事にしたのです。

病原体や未知の病気といった類ではありませんので、心配なさらないで下さい。既にこの惑星の滞在許可も取りました」

理由を聞きながらも女性は、先ほど送った書類に、サツ、とメガネを光らせ、こちらの言っている事にウソはないか、目を通している。

「そう、ですか……確かにこの書類にも、そう書かれてありますねわかりました。こちらでも、ちゃんと情報を伝えておきます」

「了解です」

「あと、事前に少し調べてみましたが、あなたたちの惑星とこちらの惑星では、あまり体の差異がないようですね。

なので、擬態や変身をせずに滞在しても問題ないと思います」

「わかりました」

「この惑星の人々は、まだ宇宙人の存在を知らないので、大気圏に

突入する際には、くれぐれも気をつけて下さい。なるべく、秘密裏にお願いしますね」

「ご忠告ありがとうございます。そちらも教鞭を執られていて忙しいはずなのに、わざわざ時間を割いてまで調査して下さい、大変恐縮です」

「いえいえ、最優先事項ですから！ それに『おねがい、先生！』なんて言われたら断れないですし……って、あっ、あの人が来ちゃった！

ど、どうしよう！ あの、すみません、これで通信を終わらせてもらいますね！」

プツン。

向こうが慌てた様子で回線を切り、慌しいやり取りが終わった。

「ふう……ようやくこれで、やっと通信から解放されたか……」
どうやら、今から向かう星について、この女性が質問をした人達からの回答が出揃ったようだ。リストに最後のチェックを入れている。

「それでは、さっそく、まだ残っている資料を、と……どれどれ……」

先ほどの通信で、もらったであろう資料に目を通していく。

「……ふむ。惑星を知っている連中の話と照らし合わせてみても、お嬢様をこの星に滞在させても大丈夫……か。問題は滞在中の場所や施設等だが……」

プシューッ。

その女性のつぶやきは、後ろのドアがスライドして、開いた事によって途切れた。

「……サラ？ まだ起きていたの？」

そこには、深窓のご令嬢と言っても差し支えない、いや、まさにその言葉がふさわしい15・16才位の女の子が、少し顔色の悪い表情をしながらも立っていた。

「お嬢様？ どうしたのですか？ もう寝ている時間じゃ……」

「うん。少し目が覚めてしまつて……」

そんな寝ぼけ眼のお嬢様が、サラの目の下のクマに気づく。

「あつ、サラ、ごめんなさいね。わたくしが体調を崩してしまったせいで……」

という事は、この子が先ほど話に出ていた、体調を崩したお嬢様なのだろう。

女の子の申し訳なさそうな言葉を打ち消すかのように、サラが明るい顔を投げかける。

「なにを仰られますか。この旅はお嬢様の為のものですから、お嬢様の健康を一番に考えなければなりません。」

それに、今回の事はちょっとした小旅行だと思えばいいじゃないですか」

「でも、サラの仕事が増えてしまつたし……」

「いえいえ、私も長らく続く船舶内での退屈な業務に、少し気が滅入っておりますので、ちょうど良かったところです。」

別段、お嬢様が気に病むことなんてありませんよ。ささつ、気にせずに安心してベッドでお休みになつていて下さい」

サラは、本当にお嬢様の事を一番に考えてくれているようだ。

なので、お嬢様もサラの言葉を素直に受け取る。

「ありがとうサラ。言われた通り、もうちょっとしたら、わたくしも寝る事にしますから」

「はい。こちらもあと少しで、惑星に着きますので」

「そうなの……あ、でも、無理をしないでね。わたくしのせいであなただが倒れてしまつたら、

今度はわたくしが、あなたを看病しなければなりませんからね……

…ふふっ」

「そんな！ 私にはもったいなきお言葉です。お嬢様は、ご自身の事を考えていればいいのですよ。私を看病するなんて事はなさなくて結構です！」

お嬢様の軽口に大げさに反応してしまうサラ。その反応を見て少女は頬を膨らませた。

「もう！ 冗談で言ったのですよ！ そこは

『それは困ります。お嬢様の看病は危なっかしいので余計に体調が悪くなります』等、ウィットに富んだ返答をして欲しいものです！」

「そ、そうでしたか…… 申し訳ありません」

頭を下げるサラ。確かにこの女性は、見るからに堅物で少し融通がききそうにない。

「全く、サラには冗談というものが通じないので…… サラは無理をし過ぎなのですから、本当にお休みになりなさい。

これは命令ではなくて、サラの事を思っているの。わたくしのせいでサラも体調を崩してしまったら、わたくし、眠るに眠れませんわ！」

きつとそこまで強く言わないと休んでくれないのだろう。ようやくサラも首を縦に振った。

「わかりました。これが終わったら私も休みますので……」

サラの言葉に安心したお嬢様が、今度は別の事柄に興味を示した。「あつ、あれが、今回不時着する予定の星ね」

サラの操作しているパネルの中でも一際大きなディスプレイに、青々とした美しい星が映し出されていた。

「はい。見た目通りの安全な星だそうです。80年代はある国がバブルで、それを目当てに様々な宇宙人が頻繁に飛来しており、

少しばかり治安が悪かったようですが、最近はその国が不景気らしく、宇宙から偵察をする者も減ったみたいで、今は危険ではないようです」

「そうなの……」

サラの話も半分に、彼女の緑色をした宝石のような両目は、パネルに映し出された蒼い星に釘付けとなっていた。
それは私たちも見慣れた、馴染みのある星だった。

というか、ぶっちゃけ地球です。

少女はその青々としている星をうつとりと眺めながら、

「……………それにしても……………本当にきれい……………」

と小さく呟いた。

お嬢様と侍女（後書き）

ここまでお読みいただいております。

今回が初めての投稿ですので、

「ここをこうしたらいいよ」

等のアドバイスをいただけるととても助かります。

ぼくのかわいい妹

ゆさゆさ、ゆさゆさ。

「おはよー、お兄ちゃん。朝だよ。朝ご飯食べて学校行くんだよ。」

いつも通りの心地のいい揺れで、この物語の主人公のユウマは目覚めた……のだが、

「うっ、あと5分……むにやむにや……zzz」

いつも通りにぼくの意識は夢の中へと沈んでいった。

「……うーん、もう食べれないよ。」

そんな、いかにもな寝言を呟いている兄を見て妹のメイは頬をぷつくりと膨らませる。

「もう！ 今日から新しい学校に行くんでしょー？ 入学初日に遅刻はダメだよ。」

ゆっさゆっさ、ゆっさゆっさ。

「んんっ……」

意識はあるのだけれども、やはり朝の睡魔には勝てない。

妹にこうして毎朝起こしてもらわないと遅刻してしまうくらい、ぼくは朝が弱い。

「もー、ホント、お兄ちゃんってお寝坊さんなんだから。これじ

ゃあ、一生わたしが面倒みないといけないよー！」

「うーん……それはいい案だ……zzz」

「あ、そっか。そうだね。えへへ、わたしもそれでいいかも……
……じゃなくて、」

ぐらぐら！　ぐらぐら！

「起ーきーてー！ お兄ちゃん！　ちーこーくーだーよー！」

「……zzz……まだこんなにあるの？　これじゃ、食べきれな

いよ」

「ちよつと！？ お兄ちゃん！ いつまで夢の中で食べているのよ！ 早く起きないと、わたしにも考えがあるんだからねっ！」

そんな事を言っている妹だが、顔は全然怒っておらず、むしろ好都合、といった感じでベッドへと登り始めた。

「うふふ。全然起きないお兄ちゃんが悪いんだからね？ それじゃ……えーい！」

そして、ぼくの胸に馬乗りになってジャンプ！ 体重を乗せてのしかかってきた。

どっしー……ん！！

「ぐふう！？」

妹のちつさい体でも勢いをつけて乗っかられると息が出来ない。

「げほっ、げほっ……急におっきなパンが落ちてくるなんて……つて、あれ？ ああ、なんだ夢だったのか」

妹の過激な目覚ましによつて、ようやくぼくは完全に目が覚めた。「うーん、なんだかい夢を見ていたような気もするんだけど、今の衝撃ですっかり忘れちゃったな。

ま、目も覚めたし、そろそろぼくも起きようかな……って、んぐっ！？」

な、なんだ！？ 何が起きたんだ！？

急に息ができなくなつたぞ！？ どういう事だ！？

胡乱な意識を凝らしてみると、甘えるような声と共にほのかに香る妹の匂い。

そして口に広がるやわらかい感触。

それに……ペロ……この味は……もしかして、

「んちゅー……おにいちゃん……早く起きてよ……」
やはりというかなんというか……

そこには目を閉じて顔を赤らめる妹の顔が！

なんと妹は、ぼくが起きているのもお構いなしに、お目覚めのキスをしてきたのだった！

「うおおおい！ メ、メイ！？」

慌てて引き離そうとするけども、

「んっ……お兄ちゃん……もうちよつと」

とまた抱きついてきた。

妹よ……なんで今日に限ってこんなにしつこいんだ！？

『いつも』はそこまで激しくないのにさ！

まあ、別にお兄ちゃんとしても、可愛い妹のスキンシップが嬉しくないわけじゃないし、

というよりか今日が休日だったのなら、もっと『兄妹』として仲良くしていたいんだけど、残念ながらそうもいかない。

というか、このままじゃ窒息してしまう。

早く妹を止めなければ！

「ん……メイ……んっ……ぷはっ！ 起きてるから！ 結構前に起きてるから！

こら、メイ！ お兄ちゃんは起きたから、もうキスはしなくていいよ！」

タコのような口をしている、しかし、それでも十分に可愛い妹を引き剥がす。

が、それでも妹はまだ目をつむり、キスをしてこようとしていた。あまりにしつこいので、ぼくは心を鬼にして妹の頭を……こつんと軽く小突く。

いたゝい、と妹は叩かれた頭をさすりながらペロツと舌を出す。

そんな仕草も、お兄ちゃんにはたまらんです。

「えへへ。お兄ちゃん、おはよう！ 昨日、キスしそびれちゃったから、その分も込めたんだけど、どう？」

「どう？ って……びっくりして、すぐに目が覚めちゃったよ」

「うう、もうちょっと寝てても良かったのに！」

「眠ってる時にあんな感じでちゅーをするのは心臓に悪いからダメだぞ？ はい、今日のキスはもう終わり！」

「えへ！ それなら、あんなジャンプしなきゃ良かった」

「それはもつと禁止！ あんなのを毎日されると、いつか死んじやうよ。というよりか、あんなのどこで覚えたんだ？」

「それはね。お兄ちゃんのベッドの下に隠してあった……」

「ダメ！ あれは絶対に禁止だから！ というか、あれは子供の見るもんじゃないから！」

「えへ！？ お兄ちゃんも子供じゃない！」

「お兄ちゃんはいいの！ 今日から高校生だし、もう大人なんだから！」

「あれ？ でも、あの本の表紙には確か、じゅうは……」

「いいの！ 問題ないから！ 全国の高校生の男性諸君なら、みんな持つてるから！」

慌てて非難するぼくに対して、ごめんねっ、と可愛らしく首をかしげながら謝る妹。

……もう！ そんな顔をされたら、許すしかないじゃないか！！

顔がにやけそうになるが、ここは兄としての威厳を保つために厳しい顔をする。

「まったく……早く起きてとか、もう少し寝てて、とか、わがままな妹だな」

「妹はわがままでもいいんだよ！ えへへっ お兄ちゃん、だから

おはようのキス！」

そういつて、まだし足りないのか、んぐ、と目を閉じて手を伸ばして迫る妹。

「はいはい。もう中学2年生なんだからそんなに甘えないの」

そんな妹の攻撃を上手くかわして起き上がる。

これも毎日の日課なので手馴れたものだ。

「ぶー。お兄ちゃんだって今日から高校生なのに、毎朝わたしに起こされてるじゃない」

「それはそれ、これはこれ」

「もー！」

文句を言う妹を部屋に残して、さっさと下に降りるのだった。

残念ながら妹はヒロインではありません

「ふあゝあ……」

思わず大きなあくびをしてしまう。

昨晩は妹にせがまれてずっとゲームをしていたからなあ。寝不足だよ。

まだ少し寝ぼけ眼なので、洗面所に向かってしつかりと顔を洗う。そして鏡を見て寝癖やおかしい所がないかを入念にチェック。

……うん、大丈夫！ これなら問題なく学校に行けるな！

なにせ、今日からぼくは高校生なのだから！

「おはよう、ユウマ。ご飯出来ているわよ」

ウキウキしながらリビングに向かうと、ぼくに気付いた母さんがハキハキとした声をかけてくれた。

「おはよう！ お母さん！」

「あらあら、朝からずいぶんと元気ね？ なにかいい事でもあったの？」

「いい事？ んー、別にいつも通り妹が起こしに来てくれただけで……これといって何もないけど？」

「そう。ま、いいわ。早く朝ごはんを食べなさいな。今日くらいは余裕を持って学校に行きなさいよね」

ニツコリ♪

素敵に笑う母さんは、息子のぼくから見ても充分に魅力的だった。サバサバしているけれど物腰も涼やかで、見ているだけで笑顔に元気になるし、潑刺とした表情を見せてくれる。

すらりとしたスリムな体も健康的で、とてもぼくと妹を生んだ2児の母親とは思えない。

耳にかかるくらいの少し短い黒髪も、いつも整えられていてシャ

ンとしている。

そんな綺麗な自慢の母さんが、ぼくは大好きだ！

いや、妹も可愛くて大好きだけれども……まあ、どちらも大好きである事には変わりはない。

胸を張ってそう言える。

「ほらほら。どうしたの？ 早く食べないと遅刻するわよ」

「おっと、そうだね。それじゃ、いただきまーす！」

そう言って元気よく手を合わせた時、

「ああ〜ん！ お兄ちゃ〜ん。わたしを無視して先に食べないでよ」

バタバタと制服に着替えた妹が階段から降りてきた。

「メイ、そんなに音を立てて走らないの！ ……ほら、タイが曲がっているわよ。こっちに来なさい」

親子だけど、姉妹のようにタイを直す母さん。

昔、通っていたお嬢様御用達の女子高の癖だそうだ。

確かその学校では仲のいい義理の姉妹の事をなんとかって言うってたけど、なんだったわけ？

えーっと……口、口サ、いや、それは母さんの別称だったな……って、あれ？

よく見てみるとメイのつけているタイの色が違ってた。

前は水色じゃなかったわけ？

義姉妹の名称を思い出す事を忘れて、その事を妹に聞いてみると、「あ、わかる？ 学年ごとに色が変わるんだよ。どう似合ってる？」

そう言って、母さんに直された真っ赤なタイを胸を張って見せつけてきた。

「うん。前の水色のタイもメイの心の可憐さが表れていて似合っていたけど、

今度の情熱的な赤色のタイも少し大人になったメイを表してるみたいで、とても素敵だよ！

まあ、メイがつけていたらなんでも似合っただけだね！」

あまり褒めすぎないように、けれど思った事をそのまま妹に伝え
ると、

「えへへ、ありがと〜 お兄ちゃん！」

喜んだ妹がぼくに抱きついてきた。

んもう！ 本当メイは甘えん坊なんだから……

しょうがないのでぼくも可愛らしい妹のほっぺをすりすりする。

うーん、やっぱり一日の始まりは妹のほっぺの感触を確かめないと。
とな〜。

しかし、妹も好きなはずのすりすりをしているのにメイは浮かば
ない顔をしていたのだ。

どういう事だろう？ 天変地異の前触れだろうか？

「メイ、どうかしたの？ ポンポンが痛いとか？」

「ううん。大丈夫。ただ、『あー、お兄ちゃんと一緒に登校できな
いのはイヤだな〜』って」

そういえばそうだ。

去年までは仲良く一緒に登校していたのだけれども、ぼくが高校
生になったのでそれは出来ないのだ。

ぼくもほんの少しさびしいけれど、ここは兄として妹の自立を促
さなければ！

「メイ、そんな事を言っただけじゃしょうがないだろ？ 早くお兄ちゃ
ん離れしなきゃ」

「え〜！ さっきお兄ちゃんと、ずっと一緒だよ〜 って約束した
し、別にいいかな〜」

……あれ？ そんな約束したっけ？

まあ、妹がしたと言うならしたんだろうな。

「でも駄目だぞ。ちゃんと、ぼくみたいにしっかりと妹離れしないと」

「ふうんだ。別にお兄ちゃん離れなんてしなくてもいいんだから。それにわたしが離れちゃったらお兄ちゃんが寂しくて泣いちゃうそうだから、仕方なく甘えてるんだよ」

「いやいや、ぼくはもう高校生なんだから大丈夫だよ。別に無理して甘えなくても大丈夫だよ」

「えー？ それじゃ、明日からお兄ちゃんを起こさなくてもいいんだ？」

「ぐっ、なかなか痛い所を突いてくるな……っていうか、朝起こす事と妹離れは関係ないもんね！ だから明日以降もお願いします」
偉そうな事を言いつつも頭を下げる。妹に朝起こされないとか考えられないよ。

「もー！ ホントお兄ちゃんって都合がいいんだから！ 大体昨日のゲームだって、お兄ちゃんはアイテムを取らずに全部わたしにくれるし、

わたしがピンチになったら自爆してでも助けしてくれるしで、全然妹離れ出来てないじゃない！」

「そ、それはそうだけどさ！ えと、その……だから、」

「ほーら、言い返せないでしょ？ やっぱりお兄ちゃんの方がわたし離れ出来ていないじゃない」

「そ、それを言ったら、メイだってホラーゲームがやりたい！ って言ったくせに、怖くて途中からぼくにやらせて、

ずっと抱きついていたし、あげくに夜中にトイレに行けないからって、一緒にトイレに入らせて、」

「ふえええっ！？ ちょ、ちよっと、それ言わないでって約束したのにー！ ひどーーい！」

途端に妹の大きな瞳から宝石のような玉の滴が精製し始めてしまった。

「ああ、そういえばそうだった！　ご、ごめん！」

あわてて謝るけれど、妹はみるみるうちに保護欲をかきたてるような顔を作っていくばかり。

ああ、そんな悲しそうな顔をされたら白旗を上げざる負えないじゃないか。

顔を真っ赤にしている妹の頭をなでなでして機嫌を直そうとするけれども、

「ぐすっ……あれ、すっごく恥ずかしかったんだから……それに忘れるって言ったのに……」

ああ！　だめだ！　このままじゃ妹が泣いてしまう！

ど、どうしよう！　くそっ、こっとなったら！

「ほ、ほらっ、メイの好きな『おでこにちゅー』をしてあげるから、それで許してよ！」

自分から妹にちゅーをするのはとても恥ずかしいけど、これも妹の為だ。何回だってやってあげるさ！

「……………ほんと？」

「うん、本当、本当！　お兄ちゃんが悪かったから！　だから泣かないで、な？」

「……………うん、わかった……………」

うっ、でもデコチューって、やっぱり何度してもこれは慣れないなあ。

妙に胸がドキドキするし、呼吸もし辛くなるからあまりしたくないんだけど……

しかし、一度言っただ事は変えられない。

意を決して髪をたくしあげる。

妹の小さな可愛い額があらわになった。

うっ……………！　やっぱり多くの妹は可愛い！　妹の顔を見ていると胸が締め付けられるよ！

たぶんぼくの顔はラブコメ漫画の主人公みたいに真っ赤になっている事だろう。

妹の顔も仄かに朱色に染まり、心なしか期待に満ち溢れた顔をしている。

さっきまでの怒り顔はどこへやら。

……あれ？ これならもうしなくてもいいんじゃないの？

こういう状況になったのも妹が泣きそうになったからする事になったわけ。

でもこれでしなかったらもつと怒るに決まってるし……もうなんでもいいや。やるしかない。

——「ごくりっ」。

唾を飲み込み徐々に妹のおでこに唇を近付けていく。

微かにだけでも妹も緊張しているようだ。

きゅっと目を強く閉じながらも、ぼくのちゅーをまだかまだかと待っていた。

そんな表情をされたらお兄ちゃんは今もう辛抱たまりません……！

えーい、当たって砕けるだ！

そうして、ぼくの唇を近付けていったのだけれども、妹のおでこに重なるか重ならないかという時になって、

「はいはい、2人ともそこまでにしなさい。ご飯の準備が出来たわよ」

という母さんの声がぼく達2人の耳に届いた。

あつ、そういえば母さんいたんだ。忘れてた。

ぼく達のチューと止めるなんてひどい……じゃなかった、兄弟げんかを止めてくれるなんて、やっぱり母さんはやさしいな！

「ほら、いつまで見つめあってるのよ」

「ヘッ？ あっ！？」

目と鼻の先にいた妹から慌てて距離を取る。

そんな様子をやれやれいつもの事か、というような目で母さんは呆れて見ていた。

……まあ、いつもの事なだけけどね。

「本当あんた達は仲がいいわね。それとさっきの口げんかの結論を言っと、

ユウマもメイも全然妹離れもお兄ちゃん離れも出来てないからね……それより、さっ、朝ごはんを食べましょう」

鶴の一声によって、ぼくらはまだまだ子供だという事になってしまった。

うーん。ぼくは妹離れ出来ているつもりなんだけどもなあ……

ま、そんな事はどうでもいいか。

妹も機嫌が直ったようだし、ごはんが冷めないうちに早くごはんを食べよう。

「……いったただつきまゝす」

そうして、3人仲良くいつもながら楽しい家族の団欒が始まるのであった。

魔法少女と女幹部

「それじゃ、行つてきまーす！」

真新しい制服に身を包み、妹よりも一足早く学校へと向かう。前に行っていた中学校よりも、今日から通う高校の方が歩いて20分程遠いからだ。

「いってらっしゃい。気をつけてねー！」

母さんと妹の声を背に受け、勢い良く扉を開けて家を飛び出す。扉を開けた瞬間、朝日が輝く……うおっ、眩しっ！

くう！ 目がしみる程のいい天気だな。入学するにはもってこいの最高の陽気だよ。

さっそく、高校入学への登校第1歩目を踏みしめる。カツッ……うん、いい音だ。

いつもより早く起きたからなのか、周りの景色も心なしか少し違って見えた。

電線にとまっている小鳥たちも、ぼくを祝福しているかのようにさえずいている。

ああ、新鮮なみずみずしい空気、清々しい空。そんな爽やかな朝の匂いに囲まれると、なんとなく、これからの素敵な予感を感じさせてくれる。

ゆっくり歩いても、到着出来るくらい早めに家を出たし、幸先のいいスタートだ。

これからどんな高校生活が、ぼくに待ち受けているんだろう？

少し不安もあるけれど、友達がいっぱい出来るといいな……あとそれと、中学では恥ずかしくてあんまりしゃべれなかったけど、

女の子とも、ちょっとでもいいから話が出来たり、お近づきになれたらな……

そんな、わくわくどきどきとした甘酸っぱい、それでいて晴れやかな気持ちを抱にスキップしていく。

ふん、ふふん、ふん♪

ミュージカルのように、背中に羽が生えているかのような軽い足取りで、曲がり角を曲がったその瞬間、

チュドーーーーーン!!!!!!

「どっひゃあー!!?」

80年代のギャグアニメで聞いたような爆発音が鳴り、それと同時に、よく吹っ飛んでいた代表的存在の冴羽リョウが諸星あたるのように吹き飛ばされた。

どうやらすぐ後ろで爆発が起きたようだ。

ぼくは、めんどろな事になったなあ、とか、朝飯をもう少し食べておけばこの爆発に巻き込まれなかったのになあ、とか色々な思いを巡らせつつも空中を遊泳した。

電柱より遥か高く空を遊覧飛行しながら、ゆっくりと目を閉じる。

ああ、小さい頃の思い出が走馬灯のように駆け巡る……幼稚園のお遊戯会の時の事、小学生の運動会の時の事、

中学生の修学旅行の時の事、エスポワールで安藤から星を奪った時の事……いや、闇の遊戯ゲームの時だったっけ?

まあ、いいや。とにかくぼくの脳裏に走馬灯が走っているのは確実なのである。

だって3階の高さまで吹き飛んだんだよ?

誰がどう考えたって、「あ、これは死んだな……」って思うでしょ?

だから走馬灯が走るのも当然、諦めるのも当然の事なのだ。

決して、ぼくがヘタレだという訳ではない。

ぼくは両親と妹に謝りつつも、せめて1日でも良いから高校には行ってみたかったなあ、と現世での心残りを感じていた。

しかし、そんな夢は適うはずもない。なぜなら、ぼくの体は万有引力の法則に従って、今、まっさかさまに地面へと落ちているからだ。

助かる見込みは……ない。

（みんなごめんね……主人公なのに開始早々に、ぼくはドロップアウトするよ……）

そんな世俗とのお別れを済ませて、悟りを開いた時、フワッ……。

と、柔軟材を使っていないのに驚きのふわふわ感、みたいな感触が全身を包み込んだ。

これが天国に行く時の気分なのかな……これだったら、ネロも幸せだったのかもね……

（いえ、あなたは死んでいませんよ）

ああ、天使の声が聞こえる。可愛い、透き通るような清らかな声だ……

（いいえ、わたくしは天使ではありません。ほら、起きて下さい）
「……………えっ？」

誰かの声に促されて、目を開けてみると……ぼくは地面に立っていた。

ん、あれ？　もしかして生きてる？　あんな爆発に巻き込まれたのに？

天国に行ったのかと思ったけれど、ここは間違いなく近所の空き地だった。

……という事は、ぼくは死んでないって事？

た、助かった！　なんで助かったのかはわからないけれど、九死に一生を得た！

ひゃっほー！　ぼくは高校に行く事が出来るんだ！　やったー！
……て、あれ？

だがしかし、生きてると安心したら、次は現実的な思考が頭に張り巡らされていく。

自分の着ている服を見ると、爆発に巻き込まれた事で、全身煤^{すす}だらけ。

ぴっかぴかだった真新しい制服は、家を出て3分で廃品回収の品に成り下がっていた。

な、なんて事だ！ これじゃあ、違う意味で学校に行けないじゃないか！

入学初日からこんな姿で登校すれば、確実に3年間、いや、下手したら一生、変なアダ名をつけられるに決まっている！ ど、どうしよう！？

先ほどまでの生死に関わる問題に比べれば、どうって事ないのかもしれないけれど、しかし、この問題もぼくにとって重大な問題に違いはなかった。

そんな時、遠くの方から変な声が聞こえてきた。

……ん？ なんだろう？ ぼくは現状の対策を考えるのに忙しいつてのに。

けれど、目の先にいるモノを見た瞬間、そんな考えは頭のどこかへと吹っ飛んでしまった。

なぜなら、ありえない平和な日常では考えられない人達が闊歩していたからだ。

「おーほっほっほ！ やってしまいなさい！ この町を恐怖におとしめるのよ！」

「イーッ！」

ステレオタイプの悪の女幹部が怪人たちを従わせて練り歩いていた！

「おーほっほっほ！ ほら、あなた達！ ぐずぐずせずにきっちり破壊活動をなさい！」

「イーッ！」

なんてこった。まさか現実でこんなベタな集団に遭遇するなんてサインをもらいたい位だよ。

「おーほっほっほっほっほ……げほっ、げほっ！」

えっと、そんな別に無理して笑わなくてもいいんだけど……キヤラ作りなのかな？ 大変そうだ。

さっきから話す前に毎回律儀に高笑いをしているリーダー的存在

の女幹部さんは、なんというか……

怪しい仮面と鞭とボンテージみたいな露出の多い黒い服を身にまとっていて怪しい雰囲気醸し出していた。

ザ・悪の幹部とっていい格好だ。

よい子のみんなへ披露するには少々過激過ぎるので、お見せ出来ないのが残念です。

「だ、大丈夫ですか！？ 悪の女幹部さま！ しっかりして下さい！ お水です！」

「あ、ありがとう。……ごくごく……ふう。これでまた笑う事が出来るわ」

なんだか本末転倒な気もするけども。

というよりか、悪の女幹部って身内で言うのは恥ずかしいような気が。

しかしそんな事は構わないのか、また高笑いを始めた女幹部さんが行進を始める。

高飛車な悪の女幹部の周りには、これまた今時いないような、全身黒タイツの戦闘員がうようよと群がっていた。

いまだき全身黒タイツって……ていうか、「イーッ！」って何？ ちゃんと意思疎通できるの？ さっき普通に喋ってたけど？

こいつら、見るからに怪し過ぎるよ。

けれど、妙に威圧感のある集団は無慈悲にもぼくのいる空き地に向かってきていた。

「ええっ！？ ど、どうしよう！ あんなのに絡まれるなんて罰ゲームにも程があるよ！」

突然の変質者たちの出現に、慌てふためくぼくは混乱し過ぎて、もうなにがなにやら、はぁーさっぱり！

といった状態で、まったく理性的な行動を取る事が出来なかった。そんなぼくに対して、

（早く隠れて下さい。さっき見たのですが、あの人たちが町を破壊していました。見つかるとまた爆発に巻き込まれちゃいますよ）

と、的確な指示をしてくれる声が。

……はっ！ 確かにそうだ。早く逃げなきゃ！

我に返って辺りを見回したのだけれども……

ああ！？ ここの空き地、行き止まりだ！

うっ、どこかに隠れないと！ でも、どこに隠ればいいのか……

（それなら、あの土管の中に隠れば見つからないと思います）

（あ、本当だ！ あそこなら！）

スポン！

言われた通りに今どき何に使うのかわからない、3本に積み重ねられている土管の中に潜り込んだ。

「おーほっほっほ！ 市民の悲鳴を聞くのは楽しいわね！ もっと泣き叫びなさい！」

その直後に、奇特な方々が到着なされた。ぼくに気づいている様子はない。

ふう……どうやら見つからずに済んだようだ。

あんな奇抜な服装の人に見つかったら何をされるかわからないよ。その怪しい女幹部さんは、ピシイ！ と鞭を鳴らしながら、高い所が好きなのか、ぼくの隠れている土管の上を陣取った。

（しかし……あんな怪しい人、見た事ないなあ……一体誰なんだろう？）

（さあ、わかりませんが……見た目から判断するに、悪者でしょうね）

（いや、それ位、ぼくもわかるんだけど……）

それにしても、このままずっと土管の上に居座られると、ぼくも抜け出せなくなってしまう。

そうになると、入学式に出席できなくなって……いや、ホントにそうだ！

すっかり忘れてた！ このままだと遅刻してしまうよ！

はわわわ、一難去ってまた一難だ！

でも、今、土管から出たら100%あの集団に見つかってしまうよね。

絶対にタダじゃすまないよなあ。あの女の人から、新しい道に目覚めるような事をされそうだし。

うーん、捕まってもいいから外に出ようか、いや怖いし、いなくなるまで待とうか……

と、自分の命と、遅刻するかしないかを天秤にかけて悩んでいた時、

「待ちなさーいーい！」

電柱のてっぺんで、ひらひらと短いスカートをなびかせながら立っている中学生くらいの小柄で可愛い少女が、

ぼくの上でたむろしている女幹部達に向けて声を上げた。

……どうやって、あんな所まで登ったんだ？ 忍者じゃあるまいし。

そんな事を考えているぼくをよそに、彼女はポシエットから、子供のおもちやみたいなステッキを取り出し、決めポーズと共にステッキを天にかざした。

「不思議の国からやってきた、乙女でかわいい女の子！」

ピロリロリン♪

「夢と希望と愛と勇気と情熱と、あと可愛さと知性と……えっと、凛々しさと！」

ふわりん♪

「そしてなにより、みんなの笑顔と応援（と視聴率）が私に力を与えてくれる！」

シャキーン♪

「ふわふわトロトロ、マーブルプリンキャラメル、ここに参上♪」
きやるるーん♪

かわいい決めポーズを決めて、小柄な女の子は、マーブルプリン

キヤラメルという、多分、魔法少女だろう、に変身した。

その間に流れていた1分近くの音楽と、彼女の後ろに存在していた不思議空間も消えた。

……えーっと、色々ツツコみたいけど……誰だろう？ あの子も見た事ないや。

（わたくしも見た事がありません。でも正義の味方のような気がします）

（いや、それもわかるんだけどさ、そう言った意味じゃなくて……）
しかし、女幹部と怪人達にはおなじみの、見知った顔のようだった。

「げえ！ プリキャラが、もうこんなに早くに登場！？」

「まだ、爆破シーンを全然撮ってないぞ！ 今週の尺、足りるか！？」

「ど、どうします！？ 幹部様！？」

タイトの上からでもわかる位に汗をかいて焦っている黒タイトたちが、鞭を持った女王様に指示を仰ぐ。

「ね、ねえ、どうしましょうか、早苗さん……じゃなくて女幹部様！」

「うつうつろたえるんじゃないわよ！ まままだ、慌てるには早い時間よ！」

「幹部様の方が焦ってるような気が、」
「ピシイ！」

「す、すいません！ 女幹部様！ まだ慌てるには早い時間でした！」

「よろしい」
「でも、プリキャラなんてどうすればいいのやら」

「それは、私も困ってるんだけど……ていうかあんだ達、『イー』以外、言ったらダメでしょ！」

「ピシイ！！」
「イーッ！！」

……魔法少女の登場で、悪者達は早くも内部分裂が起きているようだった。

なんだか既にアホらしさが随所に漂っている。

そんな場を引き締めるべく、魔法少女プリキアラが再び決めポーズを決めた。

「女幹部！ 今日という今日は、絶対に許さないんだからっ！ 覚悟しなさいよね！」

シュタツ！ 電柱のてっぺんから、一息でこの空き地まで飛んできた魔法少女。

……短いスカートから見える真っ白いアレは、きつと見せても構わないものなのだろう。

「イ、イー！？」（どうしますか！？ 幹部様？）

「イーーツ！！」（今週はあんまり予算がないから、秘密兵器もありませんよ！）

「あ、あんた達で何とかしなさいよね！ わ、私は、ほら！ 用事があるのよ！」

「イ、イー！？」（そ、そんなー！？ 幹部様、見捨てるなんて非道い！）

「知らないわよ！」

そういつて、ピンヒールのかかとで戦闘員たちを足蹴にする女幹部。

踏まれている怪人は、痛そうだったけれども、気持ち良さそうな声を上げていた。

……どうやら、あの時、外に出なくて正解だったようだ。

「ほらほら、ここがいいの？ それなら、ちゃんとおねだりしなさいよ！ この犬！」

「イ、イーーツ！」（ああ！ この卑しい畜生めに、もっとご褒美をお与え下さいっ！）

「ホント、ありえない位、あんたって卑しいダメ犬ね！ ほら、ほらっ、ほらっ！」

「イイーッ……！」（あつ、あつ、あつ、らめーーーーッ……！）
「こんなに汚しちゃって、はしたないわね……ふふっ、さいっこうにいい気分」

えー、一応、念のために言っておくと汚したのはよだれです。

「イ、イイーッ……」（あの、女幹部さま……プリキャラがそこにいるんですが……）

ビクンビクン、と横たわっているのとは違う、戦闘員が女幹部に報告をする。

「あ、そうだったわ……コホン」

女幹部は、今の咳払いで、先ほどのやり取りを全てなかった事にした。

というか、魔法少女の子、さっきの間に攻撃すればよかったんじゃないの？

しかし、正義と悪の間でも約束事というのは存在しているのか、魔法少女は電柱を飛び降りてから相手の準備が整うまで微動だにしていなかった。

魔法少女の変身シーンも、みんな黙って見てたから、これでおあいこなのだろうか？

そんな事はさておき、女幹部が仕切りなおしをして、また対決が開始された。

ジリ………両者、睨みあったまま動かない。

2人の間に砂埃の混じった風が吹く。西部劇に出てくる藁みたいなのが転がる。

なんだか、先に動いた方が負けそうな雰囲気だ。

お互いの人差し指が時折り、ピクリと動くが、どちらもまだ目立った動きをしていない。

それにしても、ハードボイルド志向な渋い戦い方だな。とても魔法少女ものとは思えないよ。

魔法少女の見た目からすれば、ハデな爆発シーンが多そうなのに

……

土管の中で観戦しているほうが、2人の決闘にケチをつけた、ちょうどその瞬間、

バツ！ 一方が横っ飛びに飛んだ！ 飛びながらも鞭をしならせて、相手を威嚇した！

最初に動き出したのは女幹部だった！

空高く飛んで、身軽に猫みたいな動作で塀をつたって、路地まで行って、

そのまま見えなくなるまで走って……って、ええっ！？ 戦わずにいきなり逃げ出したよ！

バトルっぽい展開だったのに、ありえない！？

そんな、敵前逃亡の女幹部が、安全な場所まで避難したのを確認して高笑いし始めた。

「おーほっほ、魔法少女プリキアラ！ 私、ちょうど、この後の予定が詰まっていたね。

今回もあなたを倒せなくて残念だわ！ 日曜日の朝にまた会いましょう！」

タツタツタツ……声だけは威勢が良かったけれど……どっちだけでもいい所だ。

「女幹部めっ！ また逃してしまったわっ！」

魔法少女は少しだけ追いかけて、でも、すぐに追うのを諦めてに悔しがっていた。

いや、あの様子じゃあんまり悔しがっていないな。

……なんだこれ？ どんな茶番劇だ。

水戸黄門とか、ルパン3世と銭形警部でも、こんな非道いのはなかったぞ。八百長か？

しかし、魔法少女はしてやったりと満足げな表情だった……あんな何もしてないよね。

どうやら、これが魔法少女と女幹部のいつもの展開というか、黄金パターンらしい。

これは1クールじゃなさそうだな。長寿番組っぽい『なあなあ』の雰囲気を漂わせていた。

だが、端役にとつては、長寿番組だとしても生き残れるかどうかは、全く関係がない。

卑怯者の女幹部に見捨てられて、ポツネンと取り残された怪人たちはというところ、

「イ、イーーー?」(ど、どうする?)

「イ、イーーー!」(ここは逃げるっきゃないよね)

「イーーーッ!」(そうだな! そうしよう! 全員退散だ!)

「イーーーッ!?」(ひえーっ!? 逃げろーっ!)

と、『イー』という言葉だけで会話をしていた。

……なんというか、器用だな。

そうして、蜘蛛の子を散らすかのように逃げ出した怪人たちだけれども、正義の使者が悪者(の下っ端)を見逃すはずもなく、

「いっけー!」ハイパー・ミラクル・オラクル・ベリー・シユガー・レモネード・パイン・サワー・スカッシュ・アタッーッ!」

魔法少女が、可愛い決め顔でステッキから魔法を放つ。そして、いくつもの虹色の光が怪人の方へと飛んでいった。

きゅるるるーん

「イーーーッ!?」(ぎゃー!)

どっかー!」

とてつもない爆発が……って、あれ? 怪人のいる場所が空き地から、どこか山奥の更地みたいなロケーションに変わっていた。

その場所に変わってから、派手な爆発が怪人たちの断末魔と共に起こり、そして、また舞台が空き地へと戻った。

……というか、この演出は、昔の仮面ライダーとかの手法じゃなかったわけ?

演出家か作り手は、なにやら魔法少女というものを勘違いしてそうなのかな……

だがしかし、どうやら今の攻撃で怪人たちは全滅したみたいだった。

魔法少女のおかげで今週も町の平和が保たれたようです……
めでたしめでたし

ぼくの背後のおっとり幽霊

シュタツ！

ひと仕事終えた魔法少女が、ぼくの隠れているドカンのすぐ近くに降り立った。

「ふう……」

シュウウン……。

ため息と共に、マールブルプリンキャラメルの変身が解かれる。

その格好は……なんと、今日からぼくが通う高校の制服だった！ええっ！ どう見ても中学生、いや小学生だと言っても通用するくらいの、ちっさな女の子なのに！

魔法少女は、まさかの同級生！？

驚いて固まっているぼくに気付かないまま、女の子が学校へと向かいます。

けれど、もっと驚いたのは、次にその少女の口から出た言葉だった。

「ちっ！ 入学初日から怪人のやつらがウロチョロしやがってよ。

……ったく、だりーぜ。呼び出されるあたしの立場も考えろっつの！」

と、首をコキコキとならしつつ、かったるそうに声を出す。

「……………えっ？」

さっきの可愛らしい、天使のようだった魔法少女と同一人物とは思えないくらい、あまりの人相の悪さと口の悪さに、思わず声を出してしまった。

「っ！？ おい、そこに誰がいるのかっ！！？」

ぼくの声聞いた女の子が殺人現場を見られた犯人のような顔で振り向いてきた。

ああ、しまった！ 声を出してた！

マズい！ このままじゃぼくも亡き者にされちゃうよ！ ど、ど

うしよう!?

(ここは一目散に逃げましょう! 正直に話してもいい結果が生まれるとは思いません)

うん、そうした方がいい。

なぜならあの子の背中から、魔法少女だとは信じられないくらいに殺意の波動が出ているからだ。

安易に近づけば暗闇の中、38Hitくらいはコンボをくらいそうなので逃げる事にするした。

三十六計、逃げるに如かずーっ!

「ぼ、ぼくは、何も見てませーん!ーん!ー!」

顔を見られないように彼女とは別の道へと逃げる。

「あつ! 待てっ! おいつ!」

ぴゅーっ! 少女の制止を無視して、足を渦巻き状にしながら走る。

というか、なんで正義の味方から善良な市民であるぼくが逃げないといけないんだろうか? 普通、逆じゃないの?

そんな事を思いつつもスターを取ったひげ面のおっさんばりの速さで逃げたのだった。

(あの……もう大丈夫ですよ?)

世界新記録も真っ青な走りを堪能していると、そんな声がぼくの頭の中に響いた。

(そ、そうかな?)

言われた通りに振り返って来た道を見える。

あの子は……よし、いない。

ふう〜どうやら逃げ切れたようだ。助かった。

逃げると経験値はもらえないけど命あつてのものだねだからね。

（流石にあんなに走れば、あの人も追つてこないでしょう）

「確かにそうだね。ここまでこれば安心だよな」

（向こうも呆気に取りられて、追いかけてなかったようですけど……）

「一応、念のためさ。なんかあの子の目が怖かったしね……って、ん？」

あれ？

誰にも追いつかれないくらいのスピードで走っていたのに、ぼくの後ろの方から未だに声がするぞ。

……というよりか、今気づいたんだけれど、飛ばされた時からずっとこの声と話してたこの声の人物をぼくは知らない。

えっ？　じゃあ、背後にいるのは一体……？

途端に背筋が凍り、全身に震えが走る。

それじゃあ、声の持ち主はずっとぼくの後ろにいた……？

ひえー！！　いきなりジャンルがホラーになっちゃったよ！

（あの？　滝のように汗を流されて、どうなされたんですか？）

「ナ、ナンデモナイヨ」

（まあ、声も変になっていきますよ！　診てさしあげますから、こちらを向いて下さい）

「見ちゃダメだ！　見ちゃダメだ！　見ちゃダメだ！　見ちゃダメだ！」

（そんな事を言わずに、さあ！）

「ひえー！？　悪魔のささやきだ！　ぜ、絶対に、ぼくは見ないぞ！」

だが、『見てはいけない』と強く思えば思うほど、人は見なくなるものなのだろうか。

意識に反して、ゴクリと唾を飲み込み、恐る恐る、ぼくは振り向く事にしたのであった。

……………くるりっ。

（あつ、ようやくこちらを見てくれましたね♪ 初めまして♪）
ぼくに向かって、声の主が元氣よく挨拶をしてくれたのだけれども、

ふよんふよん……………う、浮いてる——っ!?

そこには、宙を漂っている半透明の幽霊が！ しかもご丁寧に火の玉まで付けて！

「ぎゃ——っ!?! 出た——っ!?! 悪霊退散っ！ 悪霊退散っ！」

突然の心霊的な出会いに、思わずアメコミ風に口から心臓が飛び出して驚いてしまった。

というよりかさつきからなんなんだ!?

魔法少女に、悪の組織に、それに幽霊まで出てくるなんて！

いや、そんな事はどうでもいい！ ひとまず、除霊をしなければ！

「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前——！」

必死の除霊を試みたけれど、素人だからだろうか、幽霊は一向に消える気配はなく、ぼくの奇行を物珍しそうに見ているだけだった。
（あの、それは一体、どういった効果があるのですか？ 面白い踊りですね）

「これは幽霊を退散する方法だって、いつも黒い手袋をしている小学校の先生が主役のエッチな漫画で読んだんだよ！

てか、なんで朝から幽霊が出てくるんだよー！ 幽霊は夜に出てきて、なんぼの商売でしょ!?! 昼間は墓場でぐーぐーじゃないの!?!」

（はあ……………そうなのですか）

（そうなのです！ だから、早くこの世の心残りを解消して成仏しちゃってよ！ お願いしま〜す。成仏して下さい〜い）

除霊が効かないとわかると、今度は泣き落としの作戦に移行した。

……のだけれども、幽霊はお気楽そうに、うーん、そうですね
……と考えるようなポーズを取って、

（あのー、落ち着いて下さい。わたくし、幽霊ではありません）

「……カイククシテ下サイ……って、えっ？」

その幽霊の、幽霊じゃない発言に、キョトンとしてしまう。

「えっ？　だって今の、君のその姿を見たら、100人中100人の人が幽霊だって、」

（いえ、ちゃんと見て頂ければわかると思いますが、足があるので幽霊ではないのです）

「そ、そうなの？」

言われた通り見てみると、宙に浮いてて半透明だけれども、確かにちゃんと足はあった。

「うーん……いやでも、おキ又ちゃんにも足はあったし、これだけじゃ説得力がないよ」

（でもわたくしの世界では、足がないのと、白い三角布をしていないと、幽霊の風上にも置けない、そう言い伝えられていましたが、）

「そんな事ないよ。最近は、幽霊業界も多種多様になってきているから、色んな幽霊がいてもおかしくないんじゃないかな？」

自分は普通の人間だと思ってても、物語の最後に、実は幽霊でした。っていうオチの映画だってあるし」

まあ、そんなひねた設定の映画は大体、酷評されるけどね。

しかし、彼女は他に自分が幽霊じゃない証明が出来ないのか、途端に落ち込み始めた。

（そうなのですか……うう、それでも確かに、わたくしは幽霊ではないのです……一体、どうすれば納得して頂けるのですか？）

確証はないけれども、でも信じて欲しい、という困り果てた顔をぼくに見せてくる。

ぬう！　困った顔がなんとも可愛らしい！

こんな子をイジめるのはよくないよね。

という訳で、

「わ、わかったよ。信じるからさ……だから、そんな顔をしないでよ」

顔を従来の2割増し位、キリツとした表情をしてダンディな声でなぐさめる。

（ホントですか！ ありがとうございます！）

キラキラ♪ と幽霊……じゃない女の子が顔をほころばせた。

（わたくしが言うのもなんですが、よく信じてくださいましたね？）

「うん。困っている人がいるなら、まずはその人を信じてあげる事から始めないとね！」

（わぁ！ 素敵な考え方です！ そんな素晴らしいお方と巡り合えるなんて光栄です！）

「いえいえ、当然の事をしたまでさ……」

そんな歯の浮いたカッコいい事を言っているのだけれども、本当の理由は、その子が稀にみる美少女で、とても可愛い女の子だったからだ。

水色の髪を肩まで伸ばしていてまつげも長くて、お嬢様みたいなオーラを醸し出していた。

言葉遣いもどこことなく上品だし、本当にどこぞの国のお嬢様なのかもしれない。

これなら仮に幽霊だとしても一向に構わない。

かわいいは正義です。

「ええと、それで、一体どういう事なの？ さっきの争いの中で何があったのかな？」

さっきから非日常的な事が立て続けに起きていて、頭の整理が追いついていない。

（すいません。わたくし、あなたに憑依してしまったのです）

「ひよ、憑依？ それって、幽霊が誰かに取り憑くやつだよな？」

（はい。そうです）

そういえば、ずっとぼくの周りをウロウロと漂っているけれど、離れようとしていないな。

なるほど。これが憑依というやつなのか。

「憑依をしているけれども、幽霊じゃない、と？」

（その通りです）

うなずく幽霊じゃない女の子。

そういえば、確かに幽霊の格好には程遠い服を着ているな。

銀色で光の反射するテカテカした、ずっと見ていたら目に悪そう
な、ナイロンのような生地服だ。

「なんというか……宇宙人みたいな服だね……でも、宇宙人なわけ、

」

（ああ！ そうです！ それです！ わたくし、宇宙からやって来
ました！）

幽霊の子、改め、宇宙人の子が思い出したかのように大声を出す。
（そうです……そうでした……あつ、わたくしは……えーっと、エ
リュエ……でしたっけ？ ……と申します。初めまして）

ペコリと頭を下げて、厳かに優雅な仕草で自己紹介してくれた。
「あ、ああ。わざわざご丁寧にありがとうございます（なんで疑問
文なんだろう？）あつ、ぼくはユウマって言います」

（まあ、素敵なお名前ですね。響きも綺麗でとても似合っています
よ）

「いやいや、そんな」

（ふふふ……ご謙遜なされて。思った事を言っているだけですから）
「いや、そんなに褒められると恥ずかしいな……」

……つて、なんだ？

なんで幽霊みたいな宇宙人の女の子と、社交辞令的な挨拶をかわ
しているんだ？

目の前に地球外生命体がいるという、人類の歴史に残るかもしれ
ない瞬間なのに、その記念すべき初の対話がこんな世話話って、そ
れでいいのかな？

なんかこの子の空気がとても穏やかなので、ぼくもそれにつられ
て、ゆったりとしてしまう。

……って、いかん、いかん！ ん？ あれ？ 別に和んでもいいのかな？

（という事で、ユーマさん。わたくしが、宇宙人だとわかっていただけましたか？）

「う、うん？ ……まあ、信じる事にするよ。とても信じられそうにないけども」

（そのお気持ちはわかりますが……あつ、わたくしの事は、気軽にエリユアって呼んで下さい）

「わかった……えと、それじゃ、エリユアちゃん、でいいかな？」

（はい！ ありがとうございます♪ ユーマさん！）

こうして、エリユアちゃんとぼく、宇宙人と人類の初コンタクトが成功した。

なんだかあっけなかったな……未知との遭遇を題材とした、壮大な映画や小説や研究とかがいっぱいあるんだけど、その人達に申し訳が立たない。

一生懸命考えてくれた先人方、本当にすみません。

すんなりと簡単に、平和的接触をする事が出来ました。

そんな、未だに到底信じられないような出来事だけでも、実際に目の前に幽霊……じゃなかった、宇宙人のエリユアちゃんがいるんだから信じるしかない。

まあ、不幸中の幸いというか、取り憑かれたのが、こんなに可愛い女の子でよかった。

これが暑っ苦しい汗っかきでメタボのおっさんでした、とかだったら目も当てられない。

なにせずと取り憑かれているわけだし、これはこれで良かったのかもしれない。

地獄に仏ならぬ、幽霊が美少女って感じかな？

「って、ちよっと待って。憑依って事は……もしかして、ずつとぼくのそばにいるわけ？」

（はい、そうですが……なにか困った事が？）

「い、いや、その……ト、トイレの時とかは？」

（ああ。それでしたら、目をつむっておきますので、お気になさらずに）

いや、微笑んでくれるのは嬉しいんだけど、ぼくの方が気になるんですけど……

それに他にも色々……ゴニョゴニョとか……困ることが……

（？ なんですか？ その、ゴニョゴニョとは？）

「ああっ！？ 地の文を読んでも！？ って事は、ぼくの考えている事もわかるの！？」

（はい。ユーマさんに取り憑いているわけですから、思考もバツチリです）

ニコツと、安心して下さいと言わんばかりの満面の笑みを浮かべてくれるが、これはやつかいだ。

やましい事をしている訳じゃないけれど、なぜか緊張してしまう。悪い事をしてないのに横断歩道の向こうから警察官の人が歩いてくると、訳もなく妙にドキドキする感覚と似ている。

出来るだけ何も考えないようにしよう。

……ああ！ そう思うと、逆にいけない事を考えてしまいそうだし！

その時は、出来るだけテンションの下がる事を考えるようにしておこう。うん。

って、そんなバカな事を考えているだけじゃ何も始まらない。

過ぎた事は仕方がないだし、取り憑かれたままでもいいから、早く学校に……って。

「ああっ！？ かんっぜんに、学校の事忘れてたっ！！ い、今、何時！？」

（ええと……電波を受信するに、JPN標準時間08:26:14秒です）

「あああ！ 完璧に遅刻だーっ！ 入学初日から遅刻なんて最

悪だ！ ガッテム！」

さっきまでの騒動で、すっかりさっぱり、学校の事を頭から消していたよ！

今から走っても、絶対に間に合わない！

うっ、これをきつかけに、目を付けられて、教科書や靴を隠されて、トイレでイジめられて、登校拒否になって、ひきこもりになって、一家離散で最終的に自殺なんて事に……

い、嫌だ！ 死にたくない！ 死にたくないよう！

新しい環境という緊張からか、必要以上にナーバスになってしまっているばく。

その様子を、じっと見つめていたエリュアちゃんがひと言、

（あの、ユーマさんの行きたい目的地ってどこですか？）

と聞いてきた。

「ん？ 都万月高校だよ。そこに行きたいんだけど、この時間じゃもう手遅れなんだ。

ばくの家から急いでも20分はかかるし、さっき、でたらめに走っちゃったから、ここがどこかわからないし、今から向かっても間に合わないよ……」

どうしようもない現状を再確認して、情けない声を出すばく。だけど、エリュアちゃんが、

（わかりました。今すぐにその都万月高校へへ行けば、ユーマさんは助かるんですね？）

「まあ、助かるっちゃあ、助かるけど……でもそんな事、」

出来るわけがないんだ、と言おうとする前に、エリュアちゃんがばくの頭の中で、ぶつぶつ、とものすごい速さで何かをつぶやきはじめた。

（衛生からのGPS通信を解析………解析終了。座標確認。目的地にワープします）

彼女が、頭の中でそんな言葉をつぶやいた瞬間、ばくは光に包まれて……シュン！

まるで地面がなくなっただかのような錯覚に陥った。

それにあわせて、ジェットコースターのとっぺんから、一気に下へと落ちた時みたいに、腰が抜けた状態になった。

あたりは一面真っ白な景色となり、でも、ものすごい速さで移動している感覚は、肌を通してビンビンと伝わってくる。

何がなんだか、状況がわかっていないばかりをよそに、まだエリユアちゃんは、うわ言のように喋り続けていた。

（ポンツ。実際の交通規制に従って安全運転を行って下さい。ポンツ。次、200m先、右折で、ポンツ。

このまま2km以上道なりです。ポンツ。この先、渋滞で、ポンツ。突き当たりを左折してください）

なにやら、カーナビの音声案内のお姉さんみたいな喋り方をしているエリユアちゃん。

ポンポン言ってるけど、あれは口で言ってるじゃないしょ？ モノマネでもしているの？

ショートしている頭でそんな事を考えていると、（ポンツ。目的地周辺です。運転お疲れ様でした）

気がつけば、ぼくは入学する高校の校門前にいた。

「……………へっ？」

一体なにが起きたのかわからない。

けれど、ぼくの目の前には校舎がある。校舎に掛かっている時計は……………30分前。

「ええっ！？ ここ、学校！？ も、もしかして、今の一瞬で学校に着いた…………？」

落ち着いて考えられないけれど、今の現状を鑑みると、「エリユアちゃんが、ここに、ここまで運んでくれたの？」

これが正解なのだろう。

（はい、そうです！ ……あの、助かりましたか？ それとも、迷惑でしたか？）

後ろで青い火の玉と体を浮かばせながら、申し訳なさそうに聞い

てきたエリユアちゃん。

この子、こんな事が出来るなんて……！ エリユアちゃん、恐ろしい子！

「う、うん！ 驚いたけど、本当に助かったよ！ ホントにありがとう！」

嬉しさのあまり、エリユアちゃんに抱きつくとしたけれど……すかつ。

「ありゃ？」

「ごちん！ 体をすり抜けてしまった。いてて……あ、当然か、幽霊なんだし。」

近所のお姉ちゃんは担当教師

キンコンカンコン。

はっ！ 予鈴が鳴ってしまった！

せっかくエリュエちゃんが間に合わせてくれたのに！

急いで走り出すけれど、今度は別の問題に気付いてしまった。

「ああっ！ 服がボロボロだった！」

そう、登校途中、爆発に巻き込まれていたのを思い出した。

さっき説明した通り、真新しい制服は傷だらけになったままで、膝も穴が開いたままだ。

現実にはギャグ漫画みたいに、アフロになった髪やボロボロの服が、次のシーンで元通りになったりはしない。

ま、現実はそもそも、爆発で髪がアフロみたいにはならないけど、「ど、どうしよう……」今から家にも戻れないし、替えの制服なんてどこにも……って

気がつけば、周りの登校している生徒たちがぼくの事を指さして、プー、クスクス……あれ、何ー？ 新しいファッション？ クスクス……と笑っていた。否、笑われていた。

やばい！ これは恥ずかしい！ 次は違う理由で教室に行けなくなってしまった！

ぼくは急いで校舎裏の誰もいない所に行き、後ろにいるエリュエちゃんに、

この件に関してもどうにかならないかと頼み込む事にする。

「ごめん！ エリュエちゃん！ ぼくの、このボロボロの服を新しいのと、いや、元通りにしてくれないかな！」

パンッ！ 手を突いて頭を下げる。

エリュエちゃんは他の人からは見えていないようなので、はたから見たらまんま神頼みしているのと変わらない。

まあ、内容もほとんど神頼みと同じだけ。

（ええ、いいですけど）

「ホント！ 本当に出来るの！？」

（はい……あ、前以上に豪華な服になりますけど5時間かかるのと、3秒で出来ますが、ただ単に元通りになるだけなのでは、どっちが）

「3秒で！ 3秒の方でお願いしまっつ！」

エリュエちゃんの2択を最後まで聞かずに答える。

急ぎすぎて噛んじゃったが、時間がないのでしょうがない。

（わかりました……テクヤクマヤコン、テクヤクマヤコン……チンカラホイッ！）

ぱっ！ おお！？ 元通りになった！ 理論はわからないけれども、今は助かるよ！

あ、でもこれなら、3秒の方だけでいいじゃないかな？

（いえ、5時間の方は、着ているだけで寝てしまう位に素材がいいんですよ）

（そうなんだ……って、ん？ いや、それは逆にダメなんじゃないのかな？）

（そういえば、そうですね）

（……あつ、というか、わざわざ口に出してしゃべらなくても、エリュエちゃんと話せるんだ）

（はい。お互い、口に出してしゃべるのも大事ですが、簡易的な連絡はこうしてテレパシーを使うのが、わたくしの星では普通なのです）

（さっきからの超能力みたいなのといい、テレパシーといい、確かに宇宙人っぽいなあ）

（何をもって宇宙人ぽいというのかはわかりませんが……うふふ……これedyouやくホントに信じてくれましたね）

（うん。流石に、こうして連続で見せ付けられると、信じざるおえないというか……）

キンコンカーンコン。

あっ！ エリュエちゃんのゆったりとしたふわふわ時間に飲み込まれて、楽しい世話をしている内に本礼が鳴ってしまった！

せっかく学校に着いたのに、結局、遅刻してしまうとは、おお、ユウマよ、情けない！

だけど、まだ先生が来るまでのタイムラグがあるのかも！ それに賭けよう！

ぼくは、その一縷の望みに希望を宿して教室まで走る。

あれ？ そういえば、どの組なのかまだ知らなかったのでもまずは掲示板まで向かう事にした。

ええと、ぼくの名前は…… あつ、あつたあつた…… ろ組か…… っ

で、この高校、い・ろ・は、で分けられているのか。
忍者の卵を育てる学校と同じ方式なんて珍しいな。

そんな事を思いつつも、掲示板に書かれている『ろ組』まで急ぐ。

……ザワザワ……ザワザワ……

みんなざわついていて、生徒も廊下にいるようだから大丈夫な感じっぽい。

学校初日だから、準備に追われて先生方も少し遅れているのだろう。

そんな幸運にも助けられて、先生が来る前にぼくがこれから1年間お世話になる1年ろ組の前になんとか立つ事が出来た。

紆余曲折があつたけれど、ようやく到着か……登校するだけでドラマがあり過ぎたな。

ふー！ 緊張してきた。でも、最初が肝心！ 元気よく教室に入

ろっ！ …… よし！

ガラガラ……

しずしずと扉を開ける。

やはり、恥ずかしくて縮こまってしまった。

そんな、ダンゴ虫みたいに小さくなっていたばくに、席に着き始めていたみんなが一斉に目を向けてきた。

……うつつ、怖いよう……

ここそと黒板に書かれている席に着こうとする。

えーっと、名前の順だから……って、空いている席は1つしかないや。

いそいそと指定の席に座る。

ふう。なんとかゴールインする事が出来たよ……って、な、なんだ、この威圧感！？

ゴゴゴゴ……！！

横からジョジョばりのものすごい視線を感じた！

思わずぼくの顔も劇画タッチになってしまう！

又マア。メメタア……。

擬音もなんと形容していいのかわからないくらいの独特の表現に
なりはじめた。

マ、マズい！？ 早く元に戻さないと！

ぼくは、あんまりジョジョの事を知らないんだ！ ボロが出る！

（あの、変な顔になっている所すいませんが……強烈に見られてますよ）

（わかってるよ……こんな、心臓を鷲掴みにするような視線に気づかないわけがないからね）

じりじりと、油の切れたブリキ人形みたいにエリュエちゃんの指差す方に目をやる。

ニヤリ……

「よう……10分ぶり、だな？」

げえ！？ 関羽！？ ……じゃなかった。

そこには、さっき空き地に登場していたヤンキー口調の魔法少女の子が！

ええ！ おんなじクラスだったの！？ しかも席が隣だし！！
そういえば、同じ学校の制服だったな……伏線がこんなにも早く回収されるとは。

そんな、ぼくの驚いた顔を見て、確信を得たのか、

「やっぱり、おめーが今朝のやつだよな？」

と眉間にシワを寄せながら近づいてきた。

……はっ、そうか！ あっちは、はっきりとぼくの顔を見たわけじゃないんだ！

それなら、どうにかウソをついてでも誤魔化して難を逃れるべきだ！

見よ！ ぼくの演技力！

「ナ、ナンノコトデスカ？」

「しらばつくれるな！ 後ろ姿が、おめーそっくりだったんだよ！」

「ソレ、人違い。ボクニ似テル人、イツパイイル。ヨク間違ワレル」
「じゃあ、さつきから、なんで片言になってるんだよ!？」

「ボク、昔カラ、コノ喋リ方。ボク、イイ人。何モ見テナイ」

「怪しさ全開じゃねーかーっ!!」

ぼくの迫真の演技はすぐさま見破られてしまい、いきなり詰め寄られた! ひえー?

こ、これは逃げるしかない!

教室の扉を開けて、今ここにある危機から逃れようと……うわ! ? ぽよんっ!

「あんっ」

ぼくの顔に、車に搭載されているエアバッグみたいな衝撃が広がる。

痛みは全然ない。むしろ心地よい感触だ。

この感触は、母なる大地の恵みのような……

「あら」。入学早々ドタバタしちゃって。みんな、席に着きなさい!」

懐かしい声をする。そういえば、この感触も懐かしいな……ぽよぽよ……ぷによぷによ。

「ほら、いつまで昔みたいに私の胸に溺れているのよ。ユウマちゃん。今はメツ、よ」

コッソ!

いてっ……その間延びした独特の声と、ユウマちゃんのあだ名で呼ぶ人物は……まさか! ?

「もしかして、冬音姉! ?」

「うふふ! せいかい! ユウちゃん」

豊満な胸をたゆんだゆんと揺らしながらにこやかに答えてくれるなつかしい顔。

「ええっ！？ ホントに冬音姉だ！！」

なんと、4年前に遠くの町へ引越ししちゃって離れ離れになった、ぼくの家近所に住んでいた冬音姉だった！

ていうか、どうしてこんな所につ！？

ここに来たって事は、まさか担任なの！？

そんな昔の思い出の感傷と先程のやらかい感触に浸っていたら、今度は冬音姉から抱きついてきた。

「お久しぶり〜！ ユウマちゃん。会いたかったわ〜！」

「うわっぶ！ …… 冬音姉、苦しいよ！ 抱きつくのは、メツ、じやなかったの！？」

「でもでも、私も抑えようとしたけど、ユウマちゃんの方から、いきなり抱きついてくるんだもん〜！」

そんなの反則よ〜！ ああ、この抱き心地、昔と変わってないわ〜」

「で、でも…… そんな事を言っても、今は先生じゃないの！？ そんな事をしていたら問題になるんじゃない〜」

「今は先生だけれど、その前に私はユウちゃんのお姉ちゃんなんだから、素直に言う事を聞くものよ〜」

ほら〜、大人しくすりすりされなさい〜い」

世の弟はお姉ちゃんに敵わないものなのだ。

諦めよう。ここは昔のようにお姉ちゃんのぬいぐるみになりきるしかない。

ああ…… やっぱり、冬音姉に甘えるのは至福のひと時だよ…… つて、はっ！？

じーっ……

さっき、ぼくを追いかけていた魔法少女の女の子を含め、教室の

みんながぼくと冬音姉を三白眼で見つめていた。

明らかにみんな呆れている。

（だ、ダメだよ、冬音姉！ 昔みたいにしてちゃ、教師の威厳がなくなっちゃうよ！）

ぼくの小声のつぶやきに、冬音姉もようやく、はっ！ として抱きつくのを止めた。

「こ、こほん…… 高校生にもなって、教室を走り回るのはいけない事よ、ユウちゃ…… ユウマ君」

「はい、すいません。冬音ね…… 冬音先生」
「よろしい」

そう言って、メガネをくいつ、とあげて…… あれ？ 冬音姉、昔はメガネなんかしてなかったのに…… どうしたんだろう？

それと昔はこの高校の制服を着ていたのに、今は白と黒のスーツをパリッと着こなしている。

なんだか冬音姉の違う一面が見れて新鮮な感じがする。

とと、そんな事より早く冬音姉から離れないと。

2人のたどたどしい演技もそこそこに、クラスのみんなが席に着いた。

うつ、まだ魔法少女の女の子、睨んできてるよ…… 早く席替えをしてくれないかな。

そんなぼくの思いは届かずに、このクラスの始まりを意味するH Rが始まった。

「おほん。みんな、席に着いたわね？ 本当は、みんなの自己紹介をしたかったんだけど、時間の都合で先に入学式をする事になったの。」

だから、早く講堂に…… あっ、でも、先生の自己紹介はしておくわね。」

そう言ってから、冬音姉は黒板にチョークで大きく自分の名前を書く。

春峰冬音……ていうのか。ああ、ずっと冬音姉って呼んでたから、苗字を始めて知ったな。

「これから１年間、あなた達を受け持つ事になる春峰冬音です。はるみねふゆね

さつき、ユウマちゃ……ユウマ君が下の名前を呼びましたが、教師と生徒の関係をしっかりと保ちたいので、苗字で春峰先生と呼んで下さいね！

えーっと……私は今日、みなさんと出会えた事が出来て、とても嬉しいです。みんな知らない子ばかりだけど、

これから仲良く、でも厳しく、勉強や学生生活を、１人の人生の先輩として教えあっていきたいと思っています。

私も今年から先生になりました。だから、私もみんなと同じ１年生です。あなたたちと同じようにわからない事だらけだと思うけれど、

それでもしっかりとステップアップして行って、立派な、みんなから尊敬される、頼られる教師になろうと思っています」

お、思ったよりしっかりしているな。やっぱり、教師になったかな？

昔の印象だと、もっとぼやんとしていたたような……さつきみたいな感じの。

「だから……あっ！」

ヒラリ、パサパサ……ヒュー！

あつ、冬音姉が教壇の下に隠していた、おそらく、そこにさつきの挨拶が書いてあった紙、

それが風に飛ばされて教室の外へと飛んでいってしまった。

「ああん！ その紙がないと、ちゃんと挨拶が出来ないわ」

そう、こんな風におつちよこちよいだった。

「先生。別に紙がなくてもいいから、早くわたし達に自己紹介をして下さい」

「うう……そうね、ありがとう。あなた優しいのね」

そうそう、何があってもへこたれず、いつも笑顔で明るくて、こんな風にみんなに優しくったなあ。

……って、それじゃ、昔と全然変わってないじゃないか。

ああ、あのカンニングペーパーを読んでいたから、昔と違うな、って感じたんだな。

この調子じゃ、何も変わってなさそうだ。

あ、でも、それだと逆に心配になってきた。自己紹介も、紙なしで出来るのかな？

「ええと、その、だから……ううっ……頑張っていきたいから」

思った通り、ぐだぐだで案の定ダメだった。こういう所も昔と変わっていない。

昔も率先して前に出る方じゃなかったから、緊張しているんだろ
うな。

（冬音姉！ 緊張しないで！ ファイト！）

緊張している冬音姉に、小さな声で声援する。

（……うう……あ、ユウマちゃん？ うん、ありがとう！）

多くの言葉が届いたのか、ニパ、と冬音姉は笑顔を取りもどして、うなずいてくれた。

どうやら100%勇気が出たようだ。

冬音姉との思い出と窮地のぼく

「じゃ、じゃあ、紙もなくなった事だし、質問形式にしてみましようか！」

はい、みんな？ 私に質問のある子は、手を上げてー！」

冬音姉がそう言うのだけれども、やはり入学初日で緊張しているのか、

それとも恥ずかしいからなのか、最初に手を上げるような子はいなかった。

……仕方がない。ぼくが手をあげるか。

「あっ！ ユウマちゃん」 はい、お姉ちゃんに何でも質問してね。」

もう既に口調が昔に戻っているが……まあいいか。

「ええと、冬音姉……春峰先生は、なんで学校の教師になったんですか？」

そう。保母さんとかだったらわかるのだが、正直、冬音姉は全然高校の教師っぽくない。

どうして、この職業を選んだんだろうか？ 純粹に聞いてみたかったのでまずそれを聞く事にした。

引越した先で何かきっかけがあったのかな？

「えーっと、それも、紙にもっともらしい事を書いたんだけど……うーんと」

「春峰先生。別に紙に書いてあった事を思い出せなくても、素直に教師になりたかった理由を言えればいいんですよ」

「でも……うーん。そんな事言ったら、みんなにバカにされるかもしれないし」

「そんな事ないよ。例えば、みんながバカにしてもぼくだけはバカにしないからさ、ね？」

「ユウマちゃん……」

じゅん……！

ぼくの言葉に感動して、突き動かされたのか、ようやく話す決心がついたようだ。

「うん、わかった。ユウマちゃんがそこまで言ってくれたんだもん。いいよね？」

別にいいけど……なんで、ぼくに聞くのさ？ その理由は、3秒後にはわかった。

「私が……私が高校の先生になったのは、ユウちゃんと会いたかったからです！」

キャツ、言っちゃった、と嬉しそうに告白する冬音姉。

………はっ？

「先生になろうとした本当の理由は。先生は、4年前までユウちゃんの近所に住んでいて、

本当の姉弟みたいに仲が良かったの。けれど、突然引越す事になっちゃって。」

ああ、運命ってホント、時に残酷なのよね。

それで、寂しい思いをしていたけれど、私が大学を卒業する頃にちょうどユウちゃんが高校生になるから

『あ！ それじゃ、ユウちゃんの学校の先生になろう！』って思ったのがきっかけなの。」

………えっ？

ぼくは、冬音姉の爆弾発言に頭が追いつかなかったけれども、その言葉にクラスの女の子で噂が好きそうな3人組が、キヤーキヤーと騒ぎ始める。

そして、その中の1人が、手も上げずに質問に参戦してきた。

「じゃあ、先生は今、彼氏とかいないんですか？」

「うん。今までいなかったよ。だって、私にはユウちゃんがいるもの。」

「まさか、愛の告白とかされたんですか？」

「うふふ……それは、ひ・み・つです。」

キヤーキヤー！

「じゃあ、じゃあ、ユウ君が卒業しちゃったら、どうするつもりですか？」

「寿退社もいいかもしれないかなって、思ってるの」

キヤー、キヤー、キヤー！！

「それじゃ、わたし達と一緒に卒業する事になるんですか？」

「そうかもしれないわね。でも、もしかしたら、」

「もしかしたら？」

「私の方が先に、卒業しちゃうかもしれないかも」

「それって……」「もしや……」「まさかの……」「いわゆる……」

キヤーキヤー！ キヤーキヤー！！

事態は収拾がつかない位に盛り上がってしまったている。噂好きの3人組どころか、女の子の大半が黄色い歓声を上げていた。

一方の男性陣はというと、

（教室に天使みたいな先生が入ってきたと思ったら、既に先を越されていたでござる）

（近所のおさななじみのお姉さんが担任の教師で、ベタ惚れだ！？ それなんて……）

（あいつ、許さねー！！ バッキバキにしてやんよ！）

（おい、屋上に行こうぜ……久々にキレちまったよ……）

ひ、ひい！！ 殺意のこもった目でめちゃくちゃ睨まれている！一言も喋らないうちから、クラスの男子を全員、敵に回してしまっ
った！！

守ってくれそうな人は……肝心の教師の冬音姉は、うふふっ
て笑っているだけで全然あてにならないし……

いきなり孤立無援？ なにこれ？ 初っ端から積んじやった？

ていうか、なんでこんな事になったんだーっ！？

オロローン、と泣き叫んでも、上上下下右左右左B Aを押しても、全く状況は変わらなかった。

くそ、あの紙が飛ばされてからおかしくなったよ。なんでいきな

り、教室の中で突風が吹くんだよ！

常識的に考えておかしいだろ！？それに、まだ寒いし花粉の季節なのに、なんで窓が開いているだよ！

あああもう！なんて間が悪いんだーっ！！

そんな事を考えている内に、さっきの女の子たちと冬音姉のコイバナが、更にエスカレーターしていた。

「ええ〜？ そうね〜、子供は……ん〜、やっぱり上は女の子で、下はユウちゃんみたいに格好いい男の子がいいかな〜

……あつ、でもユウちゃんが『冬音姉。ぼく、もっと子供欲しいよ！』って、迫ってきたら〜、私は拒めないかも〜」

キヤーキヤー！！ キヤーキヤー！！

な、なんて話をしているんだ……冬音姉は、もう、ただの恋する乙女になっていた。

「それじゃ、2人の初キスはどこで？」

「ユウちゃんとチューはいつぱいしているけど、初めてのチューは、やっぱり覚えているわ〜。

あの日は、夏の暑い日の夕方だったのよね〜。ちょうど買い物帰りで、急に土砂降りの雨が降ってきたのよ。

途中で偶然一緒になったユウちゃんと、雨宿りをする為に私の家に入ったんだっけ。

家の人はちょうど誰もいなくて仕方がないから、びしょびしょに濡れた服をお互い脱ぎあいつこして一緒にお風呂に入ったの〜。

……それで、上がった瞬間に停電になってしまって、怖がるユウちゃんを連れて、私の部屋の中に向かって……」

ゴクリ……

いきなりエロティックな話に移行したので、場にいる全員が固唾を飲んで、冬音姉の話を聞き入り始めた。

って、おいおい！これは教育上問題がないかい！？これは止めないと……！

「冬音姉、そんな話は、もうやめ……もがっ！？」

（うるさい！ 今、いい所なんだから、あんたは黙ってて！）

噂好きの女の子の1人に口を封じられた。

むぐぐぐ、手をどかせない程に力が半端ない！ 噂好きのパワー恐るべし！

なので、話を止める人が誰もおらず、依然、冬音姉の、めくるめく猥談がクラスのみんなの耳へと届けられていく。

「それで、電気の点かない薄暗い部屋の中で、お互いの髪をふきふきしていたの。」

1枚のタオルしか使ってなかったから、ユウちゃんの顔がすごく近かったのを覚えているわ。

濡れた髪が肌に貼り付いていて、怖がっている顔も、とってもキュートで扇情的で、もうキュンキュンがキュンキュンしちゃって、心がかき乱されちゃって。『もう、しちゃっていいかな？ ああ！

でも、ダメ！ 私は、ユウちゃんのお姉ちゃんなんだから！』って葛藤を繰り返していたの。心の中では天使ちゃんと悪魔くんがいつも戦っていて、毎回、僅差で天使ちゃんの方が勝っていたんだけど、

その時、運悪く、大きな雷が鳴っちゃったの。それで、ユウちゃんが、『怖い！』って私の胸に飛び込んできて、

潤んだ瞳で見上げてきて。そのかわいさといったら、もう！私の理性を吹き飛ばすのに充分だったわ。

そこまでお膳立てされたら、私も覚悟を決めなくちゃ！ と思って、『恥ずかしいけど、ユウちゃんになら、いいよ……』

って答えて、お互いに下着のままだったけど、ベッドに入り込んだの。私がお姉さんだから、上になって、お互い初めてだったけれど、

ユウちゃんが上手く出来るように、優しくリードしてあげて、それで……」

ピンポンパンポン

『1年生のみなさん、入学式をするので早く講堂に来て下さい。特

にろ組のみなさん、早く来て下さい。繰り返します。1年生のみなさん……………」

ピンポンパンポン

「あ、ちょうど放送も鳴った事だし、それじゃあ、みんな講堂に行きましょうか」

ポン、と手を叩き、脱線した自己紹介を止めて、廊下に出る冬音姉だが……

（それって、ぼくが幼稚園の頃の話でしょ！？ しかも、キスの話だから！）

（ユウさんは、あの教師の方と大変に仲がよろしいのですね？）

（そうだけど、あんな言い方じゃ、絶対にクラスのみんなに誤解されたよー！）

案の定、ぼくの口を未だに押さえていた女の子が、

「いい話^{コシツナ}が聞けたわ…… あんた、中々やるじゃない！ …… 色んな意味で」

と、おばさんみたく意味深な発言をぼくに向けて言ってきた。

（やっぱり、誤解されてるーっ！ 色んな意味って何ーっ！？ 違うんだからー！）

「むがが！ がう！ がう！ むがむがーっ！」

「…… あ！ 口を押さえていたの忘れてた。ごめんごめん…… ほら、もうみんな廊下に並んでいるから、早くわたし達も行くわよ！」

「ぶはっ…… はあはあ…… 今のは違うんだ。みんな聞いて欲しいんだけど……」

ようやく口封じが解かれ、ついでに誤解も解こうとしたのだけでも、既にもうみんなから色眼鏡で見られていて弁解する余地がなかった。

これは、参った…… とうにかならんかねえ…… いや、ムリだな…… しかたがない。今後の行動で汚名を返上するしかない。大人しく廊下に並ぶか。

ホント、冬音姉は言葉が足りないんだから…… それじゃ、教師は

やってけないよ……

というか、さっきのアナウンス、明らかに冬音姉のためだったよね？

これは教師生活早々、先生方にマークされているな。教師1年目で仕方ないかもしれないけど、

やっぱり、おっちょこちょいだし、おっとりした性格だからだよな。

もしかして、朝の予定が遅れていたのも冬音姉のせいだったりして……

まあ、冬音姉のおっとり空間は決して悪くないし、逆に癒されるし、生徒からは絶大な人気を誇る事は間違いないけどね。

そうして、冬音姉の先導で教室のみんなが移動するのだけれども、ギロギロ……

(うつう、忘れていた)

(そうですね。彼女、あの教師の話の間中、ずっとユウさんを睨んでいましたよ)

(そうなんだ……ああ、刺すような視線、ってこういう事を言うんだね……すごく痛い)

そう。今もずっとあの朝の、口の悪い魔法少女の子に睨まれてるのだ。

ぼくは、その子から出来るだけ離れるように歩き出す。

いつかは追求されるんだと思うけれど、出来るだけ遅めたい。あわよくば、何事もなかった事にしたい。

とにかく、入学式の際は男女別れるから、追求されなさそうだけど……

はあ……どうしようかな……

あの生徒会長はモブキャラに違いない

「……なのです。えー、みなさんは人という字を知っていますか？
人という字は……」

先ほどから学校長の話が延々と、冗漫に続いていた。

入学式は、非常に退屈なものだったけれど、何事も起こらず滞りなく進んでいる。

ほんとエリュエちゃんは束の間の平穏をゆったりと過ごしていたのだけれども、

「……ボールを渡し、私は少年に対してこのように言ったのです。
諦めたらそこで……」

学校長の話は一向に終わる気配が来ない。

「そこで言いましたとも。『それは“ホコリ”まみれだったでしょ？』と。そして……」

えー、まだ喋るの？　いくらなんでも長すぎるよ。

それにどこかで聞いたような話ばかりな気がするんだけど！

（もうっ。何も起こらないのはいいけど、早く終わってくれないかな？）

長すぎるし、面白くないし、話してるのはおっさんだし、の3重苦だよ。

（あの……ユートさん。先ほどから行われている、これは一体何の儀式なのですか？）

エリュエちゃんが、校長の実のない話の意味を突っ込んできた。

儀式か……言いえて妙だな。

（えーっとね、これはお偉いさんがたの自己満足に、ぼくらがつき合わされているのさ）

（ふーん。そうなのですか……確かに皆さん、非常に退屈そうにしていますね……はあ、この星の人たちは変わった事をするんですね）
（うん。ぼくも本当にそう思うよ……ふあゝあ……）

（……あつ、ユートさん。あれは一体なんなのですか？）

（ん？ あれ？ あれは……開店祝いとかお祝いとか、おめでたい時に飾る、花？ 造花かな？ まあ、そういった物だよ）

（おめでたい時には大きな花を飾るのですか……でも、あの1輪だけですか？）

（うーん。ばくも、そこまで深くわからないけども、そうだと思うよ）

（ほう……やはり、星ごとによって、様々な風習があるようですね。興味深いです）

（いや、この国の人はそんな事、あんまり考えていないんじゃないかな？）

（そうなのですか？ 自分達の星の事なのに、ですか？）

（うーん。そう言われると苦しいけど……）

そんな風に、エリユエちゃんとカルチャーショック話（？）のような会話で退屈を紛らわしていると、

ようやく学園長の長い長い、ありがたい話が終わってくれた。

「続きまして……生徒を代表して、現生徒会長から訓辞を致します」その言葉と共に、キリツ、とした女性が壇上に上がっていく。

「1年生の皆様、ご入学おめでとうございます。上級生の私が代表して、入学の言葉を送りたいと思います」

へえ……凜とした声だし、眉目麗しい、美しい女性だなあ。

でも、どこかで見た事のあるような気もするんだけど、どこだったかな……

えっと、幼稚園の時かな……小学校の時……何かがあったはずなんだけど……めそ……

あれ？ 今、何か思い出したような気がしたけれど、何かが引っかかって思い出せない。

……もしかして、本能がそれを拒否している？

綺麗な人だけれども、あの人を見ていると、なぜだか震えが止まらなくなってきた。

……あわわわわ、なんだ！ この迫り来る恐怖は！？ ブルブル……うう、怖いよう。

ト、トラウマが……頭も痛くなってきた。呼吸も苦しくなる。あれ、息が出来ない！？

いけない！ 落ち着いて……深呼吸……フラッシュバックしそうなのを理性で遮る。

どうやら、世の中には思い出しはいけない事があるようだ。パンドラの箱をわざわざ開ける必要はない。

ぼくは処世術として、あの女性について考えるのを止める事にした。

そんなぼくをよそに、生徒会長さんは入学してきたぼく達の歓迎の言葉を、紙を時折り見ながらもスラスラと流れるかのように喋っていた。

さっきの学園長の話が冗長だったので、余計に格好良く見えてしまう。

「これで、第71回。○高校在校生からの、入学の挨拶を終わりたいと思います」

ほっ……入学式は、何も起こらずに終わってくれた。

そんな安堵の表情を浮かべた時、生徒会長さんがこちらをチラリと見た気がした。

「○○高校2年い組、在校生だいひょ……っ!？」

その途端、生徒会長さんはピシリ、と石にでもなったかのように動きと声が止まった。

………？ 何が起こったんだ？

相変わらず、こちらの方を見たまま、全く微動だにもしなくなつた生徒会長さん。

さっきまでは、少しもつかえる事もなく喋っていたのに、どうしたのだろうか？

周りの人たちも、これはおかしいと思ったのか、ザワザワと始めた。

（あの人、ユートさんをずっと見ていますよ？）

エリュエちゃんが、ぼくの耳に手を当ててそう言ってきた。

（いやいや、まさかあ！ こっちの方を見てるだけで、別にぼくを見ているわけじゃ、）

（いえ、ユートさんとわたくしを見ています。こちらをじっと）

（……………マジ？）

（マジというのが、本当という意味でしたら、マジです）

えええええ、な、な、なんで！？ これ以上、イベントを増やしたくないよ！！

こっちは朝の事とか、エリュエちゃんの事とか、魔法少女の事とか、冬音姉の事で頭がいっぱいなんだから！

いや、本当に多すぎるよ！ もうカルテットだよ！ クインテットなんて無理だから！ そもそも供給過多で需要はもう間に合ってるから！

キャパシティーオーバーでヒートアップして、ハングアップだよ！
オラトリオ モラトリウム ヘクトバスカル
讚美歌で執行猶予人の大泣きだから！

ああ、何を言っているのかわからなくなってきた！ 結局、何が言いたいかというと、頼むから悩みの種を持ってこないでくれって事！

そんなぼくの祈りが通じたのか、それとも教頭の言葉で我に返ったのか、生徒会長さんは自分の名前も言わず足早に壇上を降りていった。

ざわざわ……一体何が起こったの？ ……ざわざわ……

「え、えええ。以上を持ちまして、入学式を閉会したいと思います」
教頭の慌てた声で、ぼくらの入学式が、多少、強引に終わった。
なんだか、ぼくの今後の人生を暗示している気がしてならないのは、気のせいだろうか。

「はい。ろ組のみんな、教室に戻ろうね！」

教師が、次々に自分達の受け持っている生徒に発破をかける。
その中でも冬音姉はやっぱり初々しい。でも、それが冬音姉のい

い所なんだよな。

（何事なく、つつがなく閉幕しましたね）

そうだね……途中で、というか最後、生徒会長さんにじっと見つめられていたけれど、それ以外は何も起こらなくて良かったよ。

ぼくの方を見ていたというのも偶然だろうし、話かけられなかった、という所を考慮すれば、

たぶん、生徒会長に対してフラグがちゃんと立ってなかったんだろう。

だって、全校生徒の前で生徒会長が1人の生徒に向かってしゃべる、という美味しいイベントを小説や漫画だったら見逃すはずがないからだ。

だから、フラグも立ってないし生徒会長もこの物語に関係してこない。

生徒会長さんはモブ的なキャラなはずだ。そういう事にしておう。いや、そうであって欲しい。

魔法少女はヤンキーでした

「はい。それじゃ、今度はみんなの自己紹介を始めましょうか」
クラスみんなが教室に戻った頃、冬音姉の担当教師の鶴の一声で、恥ずかしがり屋にとって鬼門である自己紹介が名前順で開始された。

うつ、ぼくも恥ずかしがり屋なので、この方法は、なんとなく死刑執行のカウントダウンに思えるよ。

「あゝ、下ヶ原中学出身の……んん、貴洋です。趣味は読書と音楽鑑賞です。これから1年間、よろしくお願いします」

パチパチ……無難な自己紹介が、滞りなく執り行われている。

ああ、もうそろそろ、ぼくの出番だ！ 自己紹介なんて考えてなかったし、緊張しすぎて周りの様子なんて全く耳に入らないよ。

「……は、あたしの所に来なさい！ 以上！」

ガタンッ！ ザワザワ……ザワザワ……何、あれ？ ……さあ？

……ザワザワ……

ん？ 周りがざわついているけど、どうしたんだろう？ 誰かが

ウケでも狙って変な事でも言ったのかな？

いやいや、そんな事はどうでもいい。どんな自己紹介をすればいいだろう？

面白いのを……いや、スベったら怖いし、無難なのを……いや、

印象が薄いのもイヤだな……じゃあ、真面目に……いや、それも……

……うーん、難しいな。

ぼくは、シャイなくせして、かなり高度な自己紹介をしようとしていた。男の子なら、理想は高くあるべき、って母さんも言っていたしね。

……あ、もうちょっとしたら、さっきから睨んでくる、怖い魔法少女さんの紹介だ。

それくらいは聞いておこう。そういえば、まだ名前も知らないし

ね。

（魔法少女の子は今どんな感じなのかな……もうそろそろ、ぼくの方を見ていないよね？）

チラリ、と気付かれないように、横にいる恐怖の魔法少女さんの様子を見る。

どうやら、みんなの自己紹介を全然聞いていないようだった。

ちょうど順番がやって来たようで、魔法少女さんは自己紹介を始めた。

「あー、あたし、真田真由さなだまゆっつー名前だ。あたしをなんて呼ぶのかは勝手だけどよ、別におめーらと仲良くするつもりはねー。

だからあんま、気安くあたしに話しかけてくんない。それと、いじめるつもりはねーけど、

あたしをバカにしたり、邪魔するやつはギタギタにするから。そこんとこ、夜露死苦」

ふむふむ、なるほど、真由さんというのか。

真由さんは、なんともオリジナリティ溢れる、唯我独尊的な、かなり気合の入った、野性味のある、バリバリ全開な自己紹介をぼくたちに披露してくれた。

……というよりか、『よろしく』が『夜露死苦』に自動変換されているよ。これはただ事じゃない。

どうやらこの方は、ヤンキー族スケ番科、という国の絶滅危惧種に指定されている人の方だった。珍しすぎる。

自己紹介も終わりかと思った誰かが、拍手をしようとしたのを真由さんが手で制した。そして、バツ、とぼくの方をすごい形相で向いてきたと思ったら、

「あと……そこのお前！　これが終わったら、こ、校舎裏に来いよ！」

もじもじしながらそんな事を宣言してきた真由さん。心なしか、仄かに顔が赤くなっている。

そして、赤くなった顔を見られないよう、うずくまるような格好

で椅子に座った。

みんな拍手をする暇もなく、ぽかーんとしている。

ぼくはというと、もう頭の中では、校舎裏で胸倉を掴まれている所まで容易に想像出来てしまっただけ、

どうしたらデッドエンドを回避できるのかと頭を悩ませていた。

やっぱり、今朝の変身を見られて怒っているのかな……というか、直接指名！？ しかもクラスのみんながいる目の前で……！

ぼくはもう、自分の自己紹介で、何言おうかなんて全く吹っ飛んでしまっただけ、あわわわ、と真っ青になる事しか出来ていなかった。

教室は、入学式をする前のように、また女の子がキャーキャーと騒ぎ出し、

「真由ちゃんって子、あの子が教室に来た時からずっと見てたわよ！」

「さっきの入学式の時だって、あの子を探して、きよるきよるしてたし」

「それ、ほんとー！？」

「ほんと、ほんと！ 今思えば、恋焦がれているような目をしていたかも」

「まさか、ひとめぼれ！？ しかも入学初日に、校舎裏でいきなり告白！？」

「みんないる前で予告なんて、だいたーん！」

「早くも先生と三角関係っぽっ！？ これは、要チェックだわ！ とやたらと姦しい。」

一方、男子はというと、お気の毒に、という表情を、全員ぼくに向けてくれている。

……あれ？ お気の毒という割には、みんなこめかみに血管が浮き出ているけれど、どうしてなのかな？

まさか、『かわいいは正義』という理由だけで、全ての事柄を正当化させるとかいう事をしているのなら、それは間違っているとぼくは思うよ。

（でも、わたくしと出会った時に、ユートさんも同じ事を言っていましたか……）

（うう、確かに……けど、前言撤回。やっぱり、かわいくても、怖いものは怖いよう）

そうして、真由さんを取り巻く騒ぎが収まった頃に、ぼくの出番がやってきた。

さっきの騒動で、逆に緊張が吹き飛んでしまっていたのか、スムーズに自己紹介をこなせた。

というか、周りのニヤニヤとした好奇心な視線で、何を話したのか覚えていない。

まあ、この後に起こる惨劇を考えたら、もうこんな事はどうでもいいというか……。

そんな感じで、今日の授業は終わる事となった。今週は、1週間短縮授業なのだ。

「それじゃあ、今日はここまでね。みんな、車に気をつけて帰るのよ。」

冬音姉は、小学生に言うみたいに、ぼくらに向けてお別れの挨拶を済ませる。

クラスみんなはというと、これからの学校生活がどうなっていくか、希望と不安がまざった表情を浮かべながら教室を後にしていく。

ぼくもそれに倣って、早くお家に帰りたいのだけれども……

ゴゴゴゴゴッ！！

真由さんからの熱烈な視線を無視して帰れる程、ぼくの神経は図太くなかった。

「や、やあ。真由さん。ぼ、ぼくに一体なんの用が……」

「ほらっ！ 早くこっちに来いっ……」

和やかに挨拶をしようとした、ぼくの首根っこを掴んだまま、引

きずっていく。

は、恥ずかしいから、せめて、自分の足でええええあああ……
……ズルズルズル……

そうして、引きずられるままに校舎裏に連れ込まれた。ヤンキーの定番スポットだ。

いい意味で使われるケースははつきり言ってほとんどない。今回もそのケースっぽい。

ドン！！ ひいつ！？

真由さんの右手は、ぼくの頭の横にある壁を殴っており、恐怖心を煽りつつも退路を断つ、という2つの役割を果たしていた。

これは完全に無事では済まないパターンだ。

うん、パターン入ったな、これ。……良くて、病院行きだろう。

不機嫌な真由さんは顔を赤くしながらも、すごみのある顔をしてガンをつけてくる。

「おまえ……見たよな？」

「見てません！！ 真由さんが、プリキヤラなんて、ぼく、知らないですから！！」

真由さんの顔が、ハニワのようにポカーンとなる。

「バラすの早すぎだろ……おい、じゃあ、なんでお前がその事を知

ってんだ？」

「えっ……？」

「気づいてないのかよ！？ それはあの場にいたやつしか知らねー事だろ！」

「あっ！？ そうだった！ 墓穴を掘ってしまった！！？ はわわ！ どうしよう！」

「やっぱ、お前か………ていうか、口、滑りすぎだろ……」

「いえ、なんとなくそう思っただけで、ただの偶然なんです……ぼくは無関係です」

「こんだけ証拠を喋りすぎてんのに、まだシラ切るつもりかよ！？ 逆にすごいぞ！？」

怒った背の低い真由さんに胸倉を掴まれてしまい、身動きが取れなくなった。

ガンをつけられ、お互いの鼻がくつつく位までの距離になる。

可愛い顔立ちだけでも、今は悪い予感しかないので、出来れば近づいて欲しくない。

「おい……」

「ひゃ、ひゃい！？」

「あたしが魔法少女だって秘密、誰にも言わねーか？」

「い、言いません！ ええ！ 神に誓って言いませんとも！」

「さっきの口の軽さで、おめーのどこを信用しろってんだ！？」

「わざとです！ わざと！ それに真由さん、吐け、って感じだったじゃないですか！」

「それはそうだけどさ！ ……うーん、しかし、イマイチ信用できんなあ……」

「じゃ、じゃあ、どうしたらいいんですか？」

他にどんな方法が……と、首をかしげて考えていた真由さんが、何か思いついたようだ。

「そっだ……いい事を思いついた。あたしの手伝いをしたら、許してやる」

「て、手伝い……?」

「そつ。これから、おめーはあたしの舎弟となつて、あたしの命令を聞いてくれる、って言うんなら許す。それ以外なら、ぜったいに許さない」

「で、でも……」

ドン!

「あ? おめーに拒否権なんてもんはねーから。返事は、はいかイエス。わかつたか?」

「イ、イエスウ……」

すごみのある声に、ついには腰が砕けて、へなへなと地面にしゃがみ込んでしまう。

「なんだよ。なっさけねーなー。そんなんじゃ、あたしの舎弟はつとまんねーぞ?」

カカカ、と豪快に笑う真由さん。あの、別につとまりたくないのですが……

「そ、それで、一体、どんな事をすればいいんですか?」

ぼくがそう質問すると、真由さんはニヤリ、と悪い笑みを浮かべて、

「なあに、ちよつとした潜入さ」

とほそく笑んだ。

路地裏にて

ヒタヒタヒタ……。

バサッ！

「ひいひい！……な、なんだ、ただのゴミ袋か。あの真由さん。ここどこですか？」

真由さんに無理やり連れて行かれてたどり着いた場所は、ジメジメとした薄暗い雰囲気醸し出している気味の悪い路地裏だった。間違っても可憐な魔法少女が来る所ではない。

「あ、あの、真由さん？ 聞いて、」

「うるせー！ おめーは黙ってあたしについてくればいいんだよ！」
なおも、おどおどしているぼくを足蹴にして、さっさと先に行ってしまう。

「あつ！ 待つて下さいよ！ 真由さーん！」

こんな所に1人でいたら、たまったものじゃないよ……って、エリユエちゃんもいるか……いやいや、エリユエちゃんがいたらなおさら怖いよ。

（そんな事ありません。大丈夫です。わたくしが、しっかりとツイテいてあげますから♪）

怖がっているぼくを和ませようと、肩に手を置いてくれる仕草をしてくれるんだけど、それは全くの逆効果な気がしてならない。

あの後、ぼくは魔法少女に変身した真由さんに、文字通りの空中散歩を堪能させられ、ここまで強制送還させられた。

別に高所恐怖症ではなかったのだけど、先ほどの貴重な体験のおかげで、もう一生、観覧車とかの乗り物に乗れない体になってしまった。

このまま薄暗い路地裏にエリユエちゃんと2人きりは流石に怖いので、急いで角を曲がると、真由さんが待つてくれていた。
いや、どうやら扉に設置されたパネルを操作していた。

「これをこうして……よつと。それで、研究員から盗んだパスワードで……」

真由さんは不穏な言葉を口にしながら、紙に目を通しつつ、数字を打ち込んでいる。

………ピー。赤いランプが青いランプに変わった。

扉から、カチリ、と音がして………どうやら鍵が開いたようだ。
「よし、ビンゴ！ んじゃ、さっそく行くぞ！」

真由さんが勇んで中に入ろう……とする前に、その興奮したナデ肩を掴む。

「あ？ なんだよ？」

「あの、その前にちゃんとした説明をしてもらわないと、ぼくもいざという時に、その……説明が出来ません」

いざという時、というのは警察に不法侵入で捕まった時の事である。

せめて、洒落で乗り切れるか、乗り切れないか、ぐらいは教えて欲しい。

だが、真由さんは、けんもほろろに取り合ってくれなかった。

「そういうのは、上で仕切るのやつが知ってればいいんだよ。舎弟は黙って、あたしについてくればいいだけだから。……ほら、心配すんなって！」

「いやいや、さっきから犯罪の匂いがプンプンするんですよ！ 今から入る所って、ぼくら、絶対に招かれざる客っぽい感じですよね！？」

真由さんはこなれていそうな、ベテランな雰囲気醸し出してますけど、こっちはペーペーだから………って、別に泥棒になりたいわけじゃなくて……

そういう訳ですから、ちゃんと納得行くような説明をしてもらえないと、いくら真由さんの舎弟になったからって、この建物の中に入る事は出来ません！」

そう、きっぱりと意見を述べる。

その男らしい態度に免じてなのかわからないけれど、やれやれ、と気だるそうにしながらも、ようやくぼくに説明をし始めてくれた

「ここは、あたしを魔法少女にしゃがった、元凶の研究施設だ」

「ああ、ここが……って、えっ!? 魔法少女って会社があるんですか!？」

真由さんは、ぼくの驚きに、「おまえは何を言っているんだ?」といった顔をした。

「そりやそつだ。野球選手も芸人もプロレスラーだって会社があるんだから当然だろ?」

「い、いや、もつとなんか、魔法少女界は夢のある世界で、そんな物は存在してなくて、例え、あったとしても、

お花畑の中にあるようなイメージがあっただんですけども……」

「はあ? なにバカな事、言ってるんだ? アニメの見すぎじゃねーのか? 小学生向けのアニメだって、描いてんのは普通のおっさんだろ」

「そ、そう言われれば、そうですね……」

「そりや、魔法少女はちっさい女限定だけだよ、それを管理してんのも可愛い女、って訳がねーだろ。常識的に考えればわかるだろ?」

うつ……至極まっとうな意見を真由さんに言われた。

でも、なんというか、純粋な心を持った少年たちの夢が崩れたような気がする。

「そついえば、真由さんって、どういった経緯で魔法少女になったんですか?」

思いついた事を何気なく聞いてみたのだけれども、

「うつ……それは……」

真由さんには、その質問はウィークポイントだったらしく、詰まった声を出した。

「あー……なんて、いつか……うつー……」

「そんな言いづらい事なんですか? それだったら別に……」

真由さんも女の子だし、言いにくい事もあるだろう。花も恥らう

乙女なお年頃だしね。

「……おい、なんか勘違いしてねーか？ おめーの思っているような事は、一切なかったからな。想像すんなよ」

「いや、そんな事なんて思ってたませんよ。別に、嫌がる真由さんに魔の手が迫ったとか、

抵抗も及ばず、服を切り裂さかれて、その柔肌を晒したとか思ってたなんか……」

「だから、違うって言ってんだろーっ！」

ゴチン！ 頭に特大のげんこつを頂く。しまった。思ってた事を口に出してた。

「うう、すいません……でも、その様子を見ていたら、どうしても邪推してしまってた」

やっぱり、ちゃんと言ってもらわないと、考えがそっち方面に……ねえ。

ぼくの、そんな考えが真由さんにも伝わったのか、

「ああ！ もう、わかったよ！ 言っよ！ 言えばいいんだろ！ 言えば！」

と、口角泡を飛ばしながら、顔を真っ赤にして、白状する決心をつけてくれた。

そうして、清水から飛び降りるような意気込みで、真由さんが話し始める。

「そ、その……半年くらい前に夜の公園を通り過ぎてたらさ……ステッキが落ちてて……あの、くにおくんの運動会で光るやつみたいなステッキがよ……」

「はあ……」

くにおくんの運動会……ってなんだ？ 障害物競走にでも使うステッキの事かな？

けれど、運動会についての補足もなしに、真由さんは説明を続けていく。

「それで……それが、何となく気になっちゃって、それで、何の気

なしに拾っちまって、それで、

それを見ていたらなぜか振り回したくなっちゃってさ……そして、何気なく振っちゃったんだよ」

「は、はぁ……」

斬新な説明だ。わかりやすそうで、わかりにくい。……いや、単純にわかりにくいな。

そんな、真由さんの主観的な感情のみの、擬音と指示語ばかりの説明が続いていく。

「そしたらよ！ いきなり、ぱぁぁ、って周りが光り輝いてさ！

……気がついたら、なんか服が、

小学生とかが好きそうなのにな変わって、ステッキから『契約が完了しました。今からあなたは魔法少女です』とか、わけわかんねー事言われたんだよ！」

「は、はぁ……」

つまり、一言で言うと、公園に落ちていたステッキを振ったら魔法少女になっていたと。

……何のドラマもない、あっけらかんとした、面白みのない設定だった。

これが漫画やアニメだったら、もつと深い、ちゃんとした理由付けがないと採用されないのに……現実ってこんなもんなんだろうか？

「それで、真由さんはステッキを振って……魔法少女になったというわけですか」

恥ずかしながらも、おずおずと首肯する真由さん。

「その……ほら！ お前もあるだろ！？ なんか1人の時にバカな事を思いついて、つい、理由もなしにしちゃう事とかさ！

そんで、それを人に見られて、すっげー恥ずかしくなった経験とか、おめーも1回位はあるだろ？ そう、その延長線上だよ！」

目が点になっている、ばくの視線に耐えれなくなった魔やさんが、言い訳をし始めた。

「は、はぁ……」

なんとなくわかるような……まあでも、そんなバカみたいな理由で、こんな事態になるとは夢にも思ってたなかったらうに。

てことは、真由さんは犠牲者だったってわけか。

「あ、でも、なりたくてなった訳じゃないんだったら、辞めればいいじゃないですか？」

手違いで魔法少女になったんなら、普通に辞めれると思うんだけどな。

「それが……どんな事をしても辞めれなかったんだよ」

沈痛な表情で、顔を沈めて、そう答える真由さん。

えっ？　魔法少女って辞めれないものなの？

「でも、ぼくの想像では、変身しなきゃいいだけな気がするんですけど……」

「だからそれが無理なんだってば。このステッキがある限り敵が近づくと反応しちゃうし」

そう言って、今朝ぼくも見たステッキを取り出す。先端に星が付いている、おもちゃと変わらない代物だ。

「だったら、それごと捨てれば……」

「はあ、そんなの言われなくたって、何回も試したつての！」

真由さんのイラついた声が、ぼくの言葉を遮った。

「最初、ムカついて普通にステッキを川に投げ捨てただけだよ。」

次の日、朝起きたらあたしの枕元にそのステッキがあったんだ。

思わず悲鳴を上げちゃったよ。それで次にゴミ袋に入れてゴミ収集車に連れてかれても、やっぱり戻ってきた。

だから、今度は再起不能になるまでバラバラに折って燃やしても、これも結局ダメだった。

次の朝には、ぜってー元の状態で枕元に置かれてんだぜ！　次第に怖くなってきて、寝ずに1晩中見張ってた時もあったけど、

2日目の明け方、ほんの少しだけうとうとして油断した時に、また枕元に置かれていたしよ！

あん時は流石のあたしも発狂しそうだったつーの！」

「は、はあ……」

なんか途中から、若干、ホラー要素が入ってたような……魔法少女ものなのに。

「という訳で、どうしたって、このクソステッキはあたしの元から離れてくれねーんだ。」

だから、他の方法を探し始めて、先日ようやく、このアジトを見つける事が出来たんだよ」

そんな、念願だった悲願を達成出来そうな顔をしてみせる真由さん。

「じゃあ、ここの魔法少女の研究施設でお願いすれば、真由さんは魔法少女から解放されるって事ですか？」

「ま、そう言った所だ」

真由さんが、大きくうなずいて答えてくれる。

「じゃあ、こんな風に闇ルートから入手したような紙を見ながら、裏口から入ろうとしなくても、堂々と普通にお願ひすればいいんじゃないですか？」

手違いで魔法少女になった、ってちゃんと説明すれば、向こうもわかってくれそうなものだと思うんですけど……」

そんなぼくの質問を、

「それは、出来ねー」

と短く、華麗に切り捨てた。

「なんでですか？」

「ここの秘密資料を盗んで、あたしを魔法少女にした組織をぶっ潰そうと思ってるから」

「ええっ！？ なぜ！？」

魔法少女にあるまじき物騒な言葉を使う真由さん。

それは過激すぎるだろう！ B級アクション映画みたいなノリじゃないか！？

なにかあつたら潜入、突撃、爆発とバカの一つ覚えに……いや、面白いけどさ。

いざ、自分がそれに付き合わされる身になったら、絶対にイヤだよ、そんな特攻野郎。

だが当の本人は、州知事か、イタリアの種馬か、格好いいハゲた人か、沈黙のおっさんになったつもりなのか、かなりノリ気だった。「こんな辱めをしたやつらをぜってー許さねー。これが理由だ……充分だろ？」

真由さんは洋画のように格好つけて喋りだした。これはもう、手遅れかもしれない。

「そ、そんなあ。元に戻れば、いいじゃないですか。犬に噛まれたものだと思って」

「ぜってーイヤだ！！！」

一言一言、はっきりと強調するように気持ちを告げてくる。

うつ……魔法少女になってた時、ノリノリだったくせに……

だが、真由さんの信念は揺るぎそうになかった。……よほど、恥ずかしい事があったに違いない……

やっぱり、ぼくの想像していた事とかが、実際にあったんじゃない……

「おい！ にへらにへらしないで早く潜入するぞ！ 理由もちやんと言ったしな！」

そうして、ぼくの返事も聞かずに腕を引っ張って研究施設へと入っていった。

潜入開始！

キィ……ガチャ……

外も暗かったけれど室内も同じくらい薄暗かった。

不規則に点滅している蛍光灯が不気味さを演出していた。

人のいる気配は……ない。

どうやらここは、やはりというか裏口の1つなようだ。

『裏口1、D』と書かれていた。

辺りは雑多な研究資材が積まれていて狭い道が余計に狭くなっているので歩きにくい。

ぼくと真由さんの大人2人が横に並んで歩くのはしんどそうだ。

て事は、ここは通路というよりも物置として機能しているのだろう。

なので人が来る可能性も低いと思う。

てか、そう思わないとやってられないからね！

これは普通に犯罪だから！ よい子はマネしないでね！ スタッフが後でおいしく食べてるからね！

という事で、早速、潜入開始！

ハリウッドっぽいBGMを背に、コソ泥っぽく侵入していく。

ここは研究所というよりか、工場施設のように無機質な構造でところどころむき出しのパイプ管が出ている。

金属で出来た壁もゴツゴツしていて、自分から「ここは普通の施設ではありませんよ」といういかにもな感じだった。

そんな施設を真由さんと2人見つからないように慎重にそろそろと歩いていく。

キョロキョロ……ソロソロ……ふう。異常なしだな。
トコトコ。ピョコピョコ。

ソロソロ……ドキドキ……はあ、誰もいないよね？

ピコピコ。ペムペム。ポムポム。

（なんで真由さんの足音だけ、ようじ……じゃなくて小さな女の子
が出すような可愛い音なんだろう？）

そんな疑問符が頭に浮かんでいたのだけれども、突っ込まずに真
由さんの後ろをついていく。

今のぼくにはそんな余裕は全くないのです。別にぼくは伝説のス
パイでもなんでもないのだから。

抜き足、差し足、忍び……んっ？

天井からホコリが舞っていた。

そこまで人が通っていないのか……って、ふえ……ふえ。

「……………ぶえつくしょんっ！！」

ホコリが鼻に入って盛大なくしゃみをしてしまった。

「！」

ピコーン！

前にいた真由さんが、頭に！マークを出して飛び上がる位に驚く。

（お、おめー、なにのん気にくしゃみなんかしてんだよ！ 潜入し
てんのにくしゃみをするバカがいるか！

2流のスパイだって、雨に打たれても、くしゃみなんかしねーぞ
！）

（す、すいません……なにせ、今回が初潜入なんで……）

（ふん！ 次からは気合でくしゃみを止めるよ！ 絶対だぞ！）

（は、はい……）

そんな一騒動があつたのだけれども、他はこれといったイベントもなく無事に狭い裏口を抜ける事が出来た。

第一関門はクリア出来たかな？

やっと、普通の通路にたどり着いた。

ここは電気もちゃんと通っているし煩雑な資材もない。

埃もかぶってないし清潔感もある。いたって普通のフロアだった。ここらへんだと人通りもありそうだ。

うんうん。順調に難易度が難しくなってるな！

なんで徐々に難しくなるのかはわからないけど、とにかく気をつけないと！

しかし……なんというか、研究員に見つからないような隠れるにはもってこいな構造になっていた。

道も何通りもあるし、潜めそうな物陰が等間隔的にいくつもある。なんだ？　ここは潜入初級者用の施設なの？　と思うくらいだ。

しかし、真由さんは警戒を怠らず壁に背をつけ、カニ歩きをしてカメのように通路へ首だけ出す。

熟練の動きで洗練されていた。

これで麻酔銃があれば完璧だな。

「……よし、通路に誰もいない……ま、誰も侵入してくると思つてねーだろーしな」

確かにそうだ。これで見張りがいたらどこぞのかくれんぼゲームに早代わりするよ。

「ほら、それだったら、早く行くぞ！」

真由さんの「オーバーヒアー！」の掛け声で、真由さんのいる地点までばくも駆け寄る。

……ん？

呼び出されてその地点まで移動するって事は、もしかして、ぼくはサブキャラあつかい？

いやいや、そんな事はないぞ！

人生、誰だって自分が主人公だ。

それに、こういう時の男のサブキャラは主人公を助けるために、途中で死ぬ可能性が非常に高いからなあ……いかん。そんな事を考えるな。

こういった場合、不本意な行動で死亡フラグが立つのをぼくは知っている。

ブルブル！ 気を付けよう！

（？ どうしたんですか？ ユーマさん？ 首なんか振って？）

（ああ、エリユエちゃん。い、いや、別になんでもないよ。雑念を払っていただけさ）

（そうですか……あつ、もしこの潜入が終わったら、この世界の事やユーマさんを聞きたいですし、それにわたくしの話も聞いて欲しいのですが、いいですか？）

（うん、それ位、お安い御用だよ。もしこれが終わったら、ぼくは……って、ちょ、ちよつと、ちよつと……っ！？ 今のタイミンでそんな話を振らないでよー！！）

『もし、これが終わったらする』なんて死亡フラグの代表例じゃないか！

危うく、もう少しで死亡フラグを立ててしまう所だった……！

（？ その、さっきから仰っている、『死亡フラグ』とは一体なんなのでしょうか？）

（それは……なんて、言えはいいんだろ……迷信みたいなものかな？）

（迷信……ですか？ 非科学的な根拠の事ですネ。この星の人は信じているのですか？）

（うん。そうなんだ。だから、出来れば今だけは、安易に未来の事

を話して欲しくないんだ……あと、過去の『こいつ、実はいいやつだった』みたいな思い出話とかも止めてね)

(はぁ……よくわかりませんが、わかりました)

おっとりとしたエリュエちゃんに釘を刺して、潜入を再開する。

ぼくの内なる葛藤に気づいていない真由さんは、結構、先の方まで行っていた。

パイプにぶら下がったり、ほふく前進をしたりして潜入を堪能している。

あつ、拾ったカロリーメイトを食べている。大丈夫かな？

それよりも、えっと、1つ言っておきたい事があります。

あの、スカートの状態ではふく前進をしてしまうと今朝も見た、まっ白くて穢れのない、真由さんの純白のアレが見えるんですが……い、いや、黙っておこう。

言っても言わなくても殴られるなら、言わない方がいい。ぼくは命令に従う事に徹する。

そうして、道の途中で真由さんの「待て」の合図を受けた。

ぼくは従順にその命令を聞いてその地点から全く動かない事にする。

5分後。

ピー！ という音がして、目の前のドアから真由さんが出てきた。

どうやら向こうから直接、扉の鍵を開けたようだ。

「すまねーな。あたししか通れないような通気口があつてよ、別行動になっちまった」

さすが、魔法少女を生み出している会社だけはある。

ちゃんと2人用のイベントも完備されている……って、おかしくない？

なんでそんな都合のいいような構造になってるのが疑問なんだけど……ま、まあ偶然にしておこう。

気にせずに早く次のステージに早く行くか。

そして、ぼくと真由さんは右下に出ているNow Loadingという文字を無視して扉をくぐったのだった。

ただいま潜伏中。。。

入った施設の内装は、工場のような外壁から木作りの洋館風に変わっており、通路の左右に等間隔で扉が続いていた。

扉には小さなガラスがあり、そこから部屋の中を見渡せたので、中に人がいるかどうかの確認が出来たので、そーっと覗いてみる。幸いどの部屋にも人がいるような気配はなかった。

あれ？ というか、この施設に潜入してから誰も見ていないな。今日は誰もいないのかな？ それとも、気づかない内にイージーモードを選択したとか？ エンカウント0の親切設定？

そんな疑問はどうでもいいとして……

真由さんが辺りを注意深く見つ、一番手前のドアを開けようとしていた。

『……ガチャガチャ、開かない』

『どうやら鍵がかかっているようだ。鍵穴には太陽のマークが描かれている』

ん？ なんだ？

真由さんは、さらに隣のドアも開けようとするが、

『……ガチャガチャ、開かない』

『どうやら鍵がかかっているようだ。鍵穴には獅子のマークが描かれている』

ぼくも目の前のドアを開けようとしたけれど、

『……ガチャガチャ、開きそうにない』

『どうやらこの扉は壊れているようだ。鍵穴がめちゃくちやになっ

ている』

と、ドアを開けようとする度にこんな注意書きが出てきた。

？ なに、これ？　なんで扉を調べる毎に鍵穴の特徴なんか出てくるんだ？

意味がわからないよ。

でも、なんだかわからないけれどゾンビが出てきそうな気がする。き、気のせいだよ？　雰囲気がそれっぽいだけであって……いかにいかん。考えるな。

結局、全てのドアを調べてみたのだけれど、どの部屋も開いていなかった。

まあ、研究結果の資料とかを置いているんなら、鍵を閉めているのも当然だしね。

しかし、これで前のフロアに引き返さないといけなくなった。

……はあー。こういうのメンドクさいんだよね。手がかりを見つけてなくて、

しらみつぶしに探さないといけないのって。でも、現実はいくらう事の方が多いんだし……

しょうがない、戻るか。

「しっ！　隠れる！」

その時、何かに気づいた真由さんが、小さな声で、しかし鋭い声で声をかけてきた。

ドン！

真由さんがぼくを強引に押し込んで物陰に潜む。

（ええっ！？　まさか、ゾンビが押し寄せてきたとかっ！？）

銃の弾もナイフも持ってないし落ちてなかったよ！？

（バカッ！ 何言っただよ！ 研究員に決まってるだろ！）

真由さんの言う通り、向こうから研究員らしき人物が歩いてきていた。

（ほっ、良かった……ゾンビじゃなくて……）

（だから、なんでゾンビなんだよ？ 意味わかんねーよ）

（いや、さっきの雰囲気とか、この館っぽい舞台からして……）

（はあ？ よくわかんねーな……って、こっちに向かってくる。静かにしてろっ！）

そういつて、小さくなっている体をさらに縮めた。

白衣でメガネの、「理系の研究者を体現してみました」といった人がぼくらの横を足早に通り過ぎていく。

ふう……こちらに気づいてないな。

ん？ 何やらぶつぶつ言っているぞ。

「えーっと、2F東の会議室の棚の、引き出しに入っている星型のバッチとB2Fの研究室Eにある月型のバッチを組み合わせで、

大会議場の仕掛けを動かして、それで大会議場にあるトロフィーを動かして、1F北の鍵を取って……ああ、早くしないと漏れる！」

どうやら、あの男性はトイレに行きたいようだ。

内股で股間をモジモジとさせて何とか崩壊しないようにと我慢していた。

そんな研究者の人は大量の冷や汗をかきながらも、メモを頼りにぼくらの事も気づかずに去っていった。

「どうやら、トイレに行くにも一苦労みたいですね」

「ああ。かなり厳重な施設だろ？ この研究所の、恐ろしさの片鱗を見ちまったぜ」

「いや、そうですけど、なんか違うというか……」

（トイレに行くのに、いちいちあんな事をしていたら、効率が悪い

ですよね)

エリュエちゃんのするどい突っ込みが入る。
というか、ぼくもそう思う。

男性が部屋に入り目的のブツを手に入れたのか、
少し和らいだ表情をして、部屋の鍵を閉めずにこのエリアを出て
行った。

「……しめた！ あそこに入ろーぜ！」

意気揚々と真由さんが入っていくのだけでも……

(うーん。なんだか、うまく行き過ぎている気がする……)

(？ はて？ ユーマさんの言っている意味がわかりません。

どうして、うまくいってはいけないのでしょうか？ 見つかった
方がいいのですか？)

(いや、そういう訳じゃないんだけど……進めるのが詰まったら、
こうしてタイミング良く部屋が開いたりしてさ。

なんか、ちょっと都合がいいんじゃないかな……って)

(都合がいいなら、それに越した事はないですよ。ふふっ、心配性
ですね。ユーマさんは)

そういう問題なのかな？ エリュエちゃんの言う通り、ぼくの考
えの方がおかしいのかな？

そう思い直して、開いている部屋の中に入る。ちゃんと扉は閉め
ておく。

一応、鍵は閉めておかなかった。

急に天井が降りてきてもすぐ逃げれるように……あれ怖いよね。

先に入った真由さんは、引き出しに入っていたであろう資料をひ
っちやかめっちゃんにかき乱しており、

この部屋の利用者にとっては阿鼻叫喚の絵図になっていた。

「ちっ、なんか弱みを握れるもんはねーかな……」

そんな物騒な事を呟きながら、乱雑に資料を調べている。

「おめーも、ぼさっとしてねーで調べろよ。重要な見つけたらす

ぐに教えるんだぞ！」

「は、はい。わかりました」

「ホント、返事だけはしっかりしてるんだから……ん？ なになに……パラパラ……D課長とA子が不倫している？ いらねーよ、そんな情報！」

OLの落書き帳みたいな資料を、クシャクシャにしてゴミ箱に放り投げる。

どうやら、いらぬ資料もいっぱいあるようだ。

そりゃそうか。部屋中に資料があるわけだし、そう簡単に重要書類が見つかる訳がない。

ゲームみたいにさ、重要なキーアイテムだとわかるように、なんの変哲もないただの紙が光ってる事なんて……あ、あった………！

机の上に、時折り、キラリと光り輝くファイルが！

なんて親切設計なんだ！

………というか、真由さん。これ位、気づきなさいよ。

真由さんは依然として気づいていないようだったので、ぼくはそのキーアイテムを拾うことにした。

「ペラ……こ、これは！？」

『魔法少女プリキュアのパンチラショット集Vol・B3』を発見した。

な、なんという、どストライクな本が！ しかも、ボリュームB3つて！ 何冊目！？

これは、見てはいけないものだけでも、男として気になる……

「ぐくり……」

さっそく使いますか？ はい いいえ

「……………」

ピッ。 はい

パラ、パラ……あっは〜ん、うつふ〜ん、いや〜ん、

「おお……こ、これは、すごい！ さ、流石、研究所っ！ 叡智の
集合体だ……うわっ！

こんなきわどいシーンも！？ ええっ！？ これはどうやって撮
ったの！？ こんな事したら捕まるんじゃないの！？」

たらーっ。

（ユーマさん、どうしたのですか？ 鼻血なんて出して）

ああ！？ そうだった！ ぼくの後ろにエリュエちゃんがいたん
だった！ 忘れてた！

（い、いや、なんでもないよ！ 時々、意味もなく垂れちゃうんだ。
ハハハハ……）

（はあ……それならいいですけど）

（うん。こっちは大丈夫だから、手分けして探そうか）

（了解です。それじゃあ、触れる事は出来ませんが、あちらの方
を探しておきますね）

ふよんふよん。

（……よし！ これで邪魔者はいなくなっただし、ゆっくりこの本を
ば……）

そうして、またお宝を堪能しようとした時、

「ん？ おい、ユーマ。何見てんだ？」

あちらをあらかた探し終えた感じの真由さんが、こちらに近づいてきた。

「ひっ！？ い、いえ……何にも見てませんよ。この部屋に入ってから何も見てません」

「そんな事ないだろ……何持ってた？ ……って、ああっ！ それは！？」

慌てて背中に隠したけれども、やっぱり見つかってしまった。もちろん取り上げられる。

「没収！ この本は没収だから！ ……つか、先に報告しろって言うただろ！」

ゴチン！

「す、すいません！ ……どんなものが写っているのか、中身を調べようと思って……」

「それは、あたしがするから！ ……てか、この写真どこから撮ってたやがるんだ。」

くそっ！ 変態ヤローどもめ！ 死ねっ！ 死ねっ！！ キモいんだよっ！！

ビリビリ！！

ああああー！？ なんて事を！？

「……おい。なんで、そんなムンクみたいな顔になってんだ。もしかして、おめーも、この変態研究所のやつらと同じなのか？」

ギロツ！

「い、いえっ！ 滅相もないです！ はい！ ……どうぞ、存分にお破り下さい！」

へへへ、と頭を下げて、ごまをすって真由さんの太鼓を持つ。生き残るための手段だ。

「……………ふん！」

不機嫌な真由さんに抵抗出来る訳もなく、執拗なまでに研究所の人たちのお宝を再生不能の紙くずに変えていった。

そして、他の写真集も見つけ出し全て破棄していった。

……ああ、もったいない。

けれど、確かにここは魔法少女にとって害をなす存在だと言う事がわかった。

真由さんの為に、ぼくも一肌脱ごう。……決して変な意味じゃないからね！

魔法少女の好感度が少し上がった！

今度はぼくもきちんと部屋を真面目に調べていく。

半分は真由さんのちらかした資料を整える作業だったけど気にしない。

上司の横暴を耐えるのも部下の仕事の一つだしね……って、まだ部下だと認めてないけどね！

そんなこんなで2分、3分と時間が過ぎた。

基本的にはノートを1冊1冊をめくって調べるといいう地味な労働の継続だ。

あんな画像を見てなければ放り出したくなるくらいだよ。

「おい、もうそろそろ他の部屋にも行かねーか？」

真由さんは全ての選択肢を選択し終えたのか場所移動の提案をしてきた。

「いえ、真由さん、もう少しここを調べていきましょう。他にもあるかもしれません」

ぼくの推理通りなら、この部屋にはゲームの進行的に次の部屋にイけるキーがあるはずなんだけれどな。

移動して変化する場合もあるけれど、まだ探す余地は残っている。「そうか、おめーがそう言うならそうするか。確かにあんな物があったって事は、この部屋はかなり怪しいしな……ん？」

ふと、机の上にあった物体に目をつけた真由さん。

「おめー、これ使えるか？」

「これって……なんですか？」

「これだよ、これ」

「これ……って、ああ、パソコンの事ですか」

これ、という指示語を使っているという事は、真由さんはPCに

疎いっばいな。

「で、おめーは、これ、使えんのか？」

「ええ、まあ一応」

「じゃ、ちよつと、点けてみる」

「はあ……」

ただ単に人をこき使いたいのか、それとも、電源を入れる所からわからないレベルなのかはともかくとして、言われた通りにPCを立ち上げる。

スイッチ、オン。ぽちつとな。

ウィーン……カリカリ……

お、さすが研究所御用達のデスクトップだ。ハイエンド完備で立ち上がりも早い。

もうそろそろ、画面の方も

パツ！

点いた点いた……って、

あつは……ん？ いや……ん？

「ぬおおおつ！？ なんじゃこりゃあ！？」

思わずジーパンの履いた刑事の殉職シーンを再現してしまった。

デスクトップには、真由さんのあられもない、むふふでうふふな画像が！

「ふ、ふええっ！？ こ、これ、あたしっ！？」

にやにやにやにやんで!? と大慌てで大わらわな真由さん。
手を大きく振って、このにやんにやんな画像は自分じゃないと否定しているのだけれども、

「どうみても真由さんですよ! って、まさか……ええ!? こんな事をされて!？」

ああ、だから、必死に研究所に潜入しようとしていたのか!

おそらく、これをネタに研究所から脅されてイヤイヤながらもこんな写真の行為を強要されて、

でも命令に従っていく内に、知らぬ間に体が覚えてしまつて……

おおと、想像してしまうといけない! ……し、しかし真由さん、思つたよりも……あるなあ。

服の下はこんな風になつてしているのか。うつむ、眼福眼福、ごちそうさまです。

「いや、ちげーから! あたしは、こんな事してねー! これはウソだ! デタラメだ! おい! そんな疑いの目をするな! あたしを信用しろっ!」

真っ赤になつて否定する真由さん。

ここにいないこのPCの所有者に代わつて、ぼくが胸倉を掴まれた。

「ぜってー信じるんじゃねーぞ! あいつらの陰謀だからな! っていうか、画面を見るな! わかつたか! ほら、返事は!」

「わ、わかりました!」

画像を見たのは一瞬の事だったけれども、既に網膜に焼きついてしまつて頭から離れない。

まぶたの裏に写真を貼り付けているかみたいに映像が鮮明に記録されている。

そして、今度はぼくのすぐ目の前にいる真由さんと、あの真由さんの姿を重ね合わせて投影してしまう。

ああ……あの姿の真由さんとこの真由さんは違うのに、

この真由さんもどこことなく誘っている様な風に見えてしまうのは、果たして目の錯覚なのだろうか？

（いえ、あの画像は顔と体が微妙に違っています。どうやらあれは合成された物ですね）

後ろで画像を見ていたエリュエちゃんが、さっき見た画像が偽物だと冷静に教えてくれた。

（かなり精密に設計されていて、一目見ただけでは別なものをくっつけているようには見えませんが、確かに画像を加工しています）
エリュエちゃんは、一見して判断がつかないものを一見して判断してしまった。

（そうなんだ……まあ、真由さんの性格からして、こんな事はない気がしてたけど）

なんだ、やっぱりコラージュだったんだ。

かなり魅力的な映像だけれども、あれが偽物だとわかると、途端に脳内で再生されている映像の魅力が半減してしまった。

（しかし、一体なぜこんな事をなさるのでしょうか？）

（はあ……多分、この人たちは、頭のネジのどこかが壊れてるからだよ）

そうはいうものの、一旦、導火線に火がついた真由さんの怒りは、中々収まらない。

画面を叩き割ろうとして、でもそれじゃ根本的な解決にならない事ぐらいは知っていたのか、

その拳をどこに振るえばいいのか、ストレスのはけ口を見つけようとしていた。

……これは、黙っていたら確実にぼくがサンドバッグになるよね？
そ、それだけは阻止しないと。

真由さん、力を溜めすぎていて、ガード不能技っぽいパンチを放ちそうだし。

「ま、真由さん。ぼくがその画像を消しますから、どうか怒りをお鎮め下さい」

大昔の自然災害に遭った人達みたいに、弥生時代式の祈祷で真由さんにひれ伏す。

「……くそっ、あたしじゃ、出来ねーし……ったく、わかったよ。早く消してくれ」

ふう。どうやら、大自然のおしおきは免れたようだ。

「あ、けど真由さん。後ろを向いたままじゃ、PCのデータを消せないと思うんですけど」

PCの電源の点け方もぼくに聞く程だ。それ以上の事が出来るわけがないだろう。

「うっ、そうだけど……」

やはり、ウソだとわかっていても、自分のあつはくん、な画像を見られたくないのだろう。

もじもじしながら、どうしようか迷っている。

「あ、あの真由さん」

「……いっそ、これ自体ぶっ壊そうか……ん？　なんだ？　ユウマ？」

「画面の右か左にあるアイコン、小さな絵をクリックしてもらえますか？」

「う……あたし、実は……その……パソコンが出来ねーんだよ」

「それはわかってますから。じゃあ、ちよつとの間だけでもいいんで……」

「い、いやだ！　ぜってー見せたくねー！　おい、目をつぶって出来ねーのか！？」

「無茶言わないで下さいよ！　そんな事、出来るわけが……」

（あの、それでしたら、わたくしが代わりに指示を出せると思うのですが）

（そうか。エリュエちゃんがいたか！ あ、でもパソコンの操作は出来る？）

（任せて下さい。今は触れる事が出来ませんが、指示する位なら出来そうです）

（わかったよ。それじゃあ、任せるからね）

「……あゝ、その、真由さん。わかりました。なんとか出来そうです」

「ホントか！ 助かる！ やっぱ、おめーを連れて来て正解だったな！ よし、それじゃ、さっそく座ってくれ！ ……おっと、目を塞ぐからな」

そして、真由さんの手で視界を塞がれながらも、デスクトップの画像を変えろという普通の人が見たら驚くような所業をこなしてく

「ふう……よかった。ユウマ、目を開けてもいいぜ」

「はい。あ、でも、こんな画像があるって事は、他にも色んな物があるって事ですよね」

「げっ！？ マジかよ……おいおい、全部消せねーのかよ？」

「ちよつと、やってみようと思いますけども……ああ、メインコンピュータからアクセス制限がかかってる。

サブに権限なし、ていうか、そもそもパスワードもわからないな……」

ぼくも少しはパソコンの知識があるけれど、流石にハッカーみたいな事は出来やしない。

「？？ さぶ？ アクセ？ ……わけわかんねーけど、その、とにかく無理なのか？」

ちんぷんかんぷんの真由さんが上目づかいでお願い光線をぼくにぶつけてくるのだけれど、不可能な事は不可能なのである。

「端的に言つと、そうですね」

「なんだよ、役立たずだな！」

さっきまでの可愛い態度はどこへやら。

元の任侠な人格へとシフトアップしてしまった。

「なんだよ！ おめーパソコン使えるんだろ？」

「いや、そうですけど、こんなハッカーみたいな事までは……」

「じゃあ、いつもパソコンで何してんだよ？」

「……………」

「おい、何で黙るんだよ？ …… ああ、もう、くそ！ どうすればいいんだ！」

ぼくの沈黙を無視して、PCの机をゲシゲシと蹴る真由さん。

（うーん。乱暴はいけない、って言いたいけれど、あんな事されたら、怒るのも無理はないよね……

でも、流石にハッキングまでの知識もないし、どうすればいいかな？）

（あの、それもわたくしなら出来そう……かもです）

（えっ！？ エリュエちゃん、ホントに？）

（はい。わたくしの星のコンピュータと勝手が違いますが、根幹部分は同じなので……）

（ああ、そういえば、朝の時もGPSとか、衛星とかの電波を受信していたもんね。

わかった。それじゃ、エリュエちゃんに任せる。お願い、真由さんを助けてあげて）

（わかりました。任せて下さい）

よし、そうとなればさっそく実行してあげきや！

「真由さん、真由さん！」

「……ちつ、やっぱ、ぶっ壊すのが手っ取り早いんじゃない？

ユウマ、なんだ？」

「ぼく、もう少し頑張ってみます。もしかしたら、出来るかもしれないです」

「でも、さつきは出来ねーって、」

「いえ、ちよつと思ひ出した事があつて、試してみようかと、」

「ほんとか！？ それならお願いだ。ぜひ、やってみてくれ！」

「はい！ 任せて下さい！」

ニツコリ、

安心してもらえるように、満面の笑顔を真由さんに向ける。

「えう！？ ……は、早くしろよ！ もたもたしていると、見つからなうだろ！」

後ろでPCを見ていた真由さんが、ぷい、と怒つたように顔を背ける。

なんかすこしほつぺたが上氣していたけど、今はそんな事に氣にしている場合じゃない。

真由さんの言う通り早めに終わらせた方がいいな。

（それじゃ、ユーマさん。まずメインコンピュータにアクセスして下さい）

（了解。これでいいのかな？）

カチカチツ。

（はい。それで、ここをクリックして……次はここを……）

エリユエちゃんの半透明な指で、示されたアイコンを次々にクリックしていく。

（あ、ここを開いてください。そう、それです……）

すると、ズラララ……と膨大な量のデータ、文字の羅列が出てきた。

（それを一気にスクロールして下さい……ふむ……ふむふむ……わかりました）

……えっ？ 今の一瞬でわかったの？ 無機質な文字が大量にあ

ったのに？

（はい。大体、わかりました。……それでは、このパソコンをハッキングして……）

そういうと、エリュエちゃんは今朝の時と同じような言葉をまた呟き始め、

（データ作成完了。そちらのパソコンに移転します）

と言った瞬間、いくつもの文字の羅列が甲殻機動隊のOPみたいなものすごいスピードで浮かび上がってきた！

す、すごい！？　こんな事、今のPCでも出来たんだ！？

「うおおう！　なんかわけわかんねーが、マトリックスみてーだな！」

あまりPCに詳しくない真由やさんでも感動するくらいにパソコンの画面内が動く動く。

そして、30秒ほど経った頃、ピーー！　という音と共に、

『この研究所にある全てのデータを消去しました』

という文字が画面中央に映し出された。

正直、めちゃくちゃ格好いい。映画みたいだ。

（これで、一応、ユーマさんの要望に応えましたが……どうですか？）

エリュエちゃんが、朗らかな笑顔をぼくに向けて聞いてきた。

（す、すごいよ……エリュエちゃん。エクセレントだよ……ホントにありがとう）

（いえいえ、どういたしまして）

エリュエちゃんの体があれば、抱きしめたい位にぼくは感動していた。

（ふふふ……そこまで喜んでいただけると、わたくしも頑張ったかいがあります）

(あつ！ ご、ごめん！ 決して、よこしまな気持ちじゃなくてね)
(わかっています。真由ヤさんを助けたい一心だったのは、ちゃんとわたくしの心にも届いておりますからね…… ホント優しいお方です。ユーマさんは)

(い、いや、そんな事ないよ)

(いえ、そんな事ありますよ)

(そんな……)

(いえ……)

(そんなそんな、)

(いえいえ、)

略。

そんな謙遜し合っているぼくらの横にいた真由ヤさんが、ようやく何が起こったのかわかったようだ。

PCを知らなくても画面に出ている文字くらいはわかるもんね。

「やったー！ すげーよ！ なんか映画のクライマックスを見てるみたいだったぜ！」

ぎゅっ！！

ぼくがエリユエちゃんに抱きつく代わりに興奮した真由ヤさんがぼくに抱きついてきた。

「おい、すげーな！ おめー、こんな特技持ってたのかよ!？」

ゲシゲシゲシ！ と手荒く祝福される。痛いけれど、嬉しさも心に伝わってきた。

「いててて…… いえ、そんな訳では」

「いやいや、あたし、パソコン全然わかんねーけどよ、これがすげー事位はわかるって！」

ユウマ！ 正直、見直したぜ！ さっきはバカバカ、って言うてすまなかったな！」

「いや、ホントにぼくはすごくないんで、ただ指示に従ったという
か……」

「そんな卑下するなって！ 恥ずかしい写真を消してくれたのは、
本当に感謝してるし……ふふふっ、ありがとなっ♪」

手放しでかなり喜んでくれているけれども、ぼくは何もしていな
いから心苦しいな……

だが、確かにあんなハレンチな代物を本人の真由やさんの許可な
く製作していたのは悪い事なので、ぼくの力じゃないけれど、結果
的に消去出来て良かった。

「ふう……しかし、やっぱ、ろくでもない会社だったな。信じられ
ねーくらい変態だぜ」

「そうですね。ホントにろくでもない所ですよ。この研究所はおか
しいです」

「おめーもあの写真を見た時、だらしく鼻の下伸ばしてたけどな
……ま、データを消してくれたし別に咎めねーけどよ。」

ほら、他の部屋にもないか、どんどん調べてこーぜ！」

ていうか、この研究所、おかしいよね？

そうして、真由さんが意気揚々と部屋から出ようとしたのだけれども、

（ユーマさん、向こうの通路から人が来てます。このままじゃ鉢合わせしてしまいます！）

エリユエちゃんの慌てた声がぼくの耳に伝わってきた。

言われてみれば……ホントだ。向こうから数人の足音が響いている。

真由さんは……あつ、気づいていない！
早くよけないとっ！ 否、ムリ、死っ！？

「危ない真由さんっ！ 隠れてっ！」

扉を開けようとしていた真由さんの腕を強引に引っ張り、ちょうど2人が入れそうな物置へと連れ込む。

「きゃっ！？ ……なにすん……もふっ！」

大声で叫ぼうとした真由さんの口を押さえる。

噛み付かれそうだけど、ここは我慢だ。

目を白黒とさせて怒ってくるが今動くと危ない。

必死に体を拘束しておく。

（ふもーっ！？ ふもっ！ ふもふも！ ふもっふー！）

（しーっ！ 黙ってて下さい！ ほらっ！ 誰かが来ています！）

（ふもっ！？）

「ここかっ！！？」

5・6人の白衣の研究員たちが、この部屋になだれ込んできた。

「本当にここからなのか!? 田中!？」
スティーブ

「ええ、^{ジャック}斉藤。アクセスを探知した所、ここからデータを消した模様です」

「あんな短時間でいくつものプロテクトを破るなんて、プロの我々でも不可能だぞ」

「ハッカーを越えたハッカーか……どんな恐ろしいやつなんだ……化け物めがっ!」

「そんな事はどうでもいい! 大事なのは、真由さんの写真が消えたという事実だ!」

「ああ、畜生の仕業だ! 血も涙もない悪魔めっ! くそつたれ! クレイジーだぜ!」

「ジーザス! こんな事になるってんなら、マムの家に保存しておけばよかったよ!」

「くそっ! 誰がやったんだ! 俺達の血の結晶(H画像)をなんだと思つてやがる!」

「半年間、寝る間も惜しんで作り上げてきた芸術品(萌え萌え写真集)が……くう!」

「泣くな同士! 気持ちはわかるが、今は泣く時じゃない! 心を1つにするんだ!」

「そつだ! 今は一刻も早く、につくき犯人を見つけて血祭りにあげるべきだ!」

「その通り! 俺達の宝を奪ったやつを生かしておけない! サノバビツチッ!」

「俺のご自慢のジョンソンでぶっ殺してやる! ハハッ! パーティーの開始だっ!」

「ファック! 女神(真由りん)の仇は絶対取るからな! 最高にシットな気分だぜ!」

「行くぞ! 手分けして探すんだ! 見つけ出して、やつを蜂の巣にしてやるぞっ!」

そうして統率のとれた足音が小さくなっていった。

……もう、みんな行つたかな？

物音が完全にしなくなつてから、ようやく脱力する。

会話の内容はアホ丸出しだったけれども、みんな目が血走つてたよ。

見つかつてたら……多分、いい死に方はしなかったと思う。

そう思うと、この侵入がいかに危険なのか、いやがおうにも再確認してしまう。

こ、これは寿命が縮むな。ぼくには潜入捜査は向いていないよ……
「……ふう、危なかった……あ、真由さん大丈夫ですか？」

途中から大人しくなり、今はぼくの胸の中で、全く動かなくなっている真由さんに様子を聞く。

必死だったので抱きしめる感じになっていたけれど、それはしょうがない。

「う、うん……まあ……ていうか、この状態を早く……ああ、もう、離せつてば！」

「あ、すいません。わかりまし……っ！？　また足音が近づいてきます！」

更に強く抱いて、見つからないように小さくなる。自然と頬や体が密着する。

「ひう！？　……ううう……」

真由さんは顔を赤くして湯気が出そうな程だが、残念ながら、ぼくは気付かなかった。

バンツ！　先ほどの、「真由たん」と連呼していた職員が音を立てて入ってきた。

そして、顔色の悪い顔に笑みを浮かばせて、

「見〜つ〜け〜た〜ぞ〜。早く出て来い〜」

とホラー映画に出てくる怪物なみの声を出してきた！

ひ、ひいゝ！！？　なんでバレたの！？

……ヒタ、ヒタ、ヒタ、ヒタ……

ああ！　ぼくたちの隠れている物置に、気持ちの悪い音を立てて近づいてくる！

も、もうダメだ！！　せめて、なんでバレただけコンテニューした時の為に教えて！　とかなんとか思っていると、

「……やっぱ、いないか。こうすれば、どこから出てくるかと思っただけだなあ」

そういつて頭をポリポリと搔いて、研究員は、すごすごと部屋を出て行った。

……は？

もしかして、さっきのは、ハツタリ？

ま、まさかウソだったとは……でも、もう少しで諦める所だった。心臓もバクバクいつているし、今のはすごい寿命が縮んだよ。

というか、恐怖で足がすくんでしまってる。

もしあれで、大きなハサミとか持って迫られたら逃げるところか失神してるな。

（ふう……怖かった。エリュエちゃん、どう？　研究員の人はずっと行っちゃった？）

（はい。角を曲がっていきました）

そうか。良かった……死ぬかと思った。

「もう大丈夫ですよ。真由さん」

ようやく密着させていた体を離れたのだけど、糸の切れたマリオネットみたいに体を弛緩させていて動かない。

「？　どうしたんですか？　真由さん？」

「こ、こわいよ……こわいのやだなの……ううう……お父さん……」

「お父さん……？ どうしたんですか？ 大丈夫ですか？」

目をつぶって、小さな声で、まだ何かを呟いている真由さん。

「ほら、目を開けて……もう大丈夫だから」

「……お父さん……？ ……え、あつ！？ お、おう！？ な、なんでもねーよ！」

ぱつ、と必要以上にぼくから離れる真由さん。そんな、そこまでイヤがらなくてもいいのに……

ていうか、さっきぼく、真由さんのお父さんと間違われてた？

そんな真由さんは、さっきまでのしおらしさなんてウソのように元氣を取り戻し、

「あいつらの驚きようを見てたら、やっぱ全部消えたって事だろーな！ あのピー野郎め！ ピーがピーでピーしちまえばいいんだ！」

と放送禁止用語を連発していた。

過激な表現はともかく……確かにそうだ。

この部屋に来た研究員の人はみな目を真っ赤にさせて憔悴していたし、真由さんの恥ずかしい画像を含めて全てのデータが消えたんだろう。

あ、でも他の大切なデータも消してよかったんだろうか？ ちよつと、ヤバいかも……

現実派であるぼくは自分の罪状に危機感を覚えていたけれども、冷徹な主犯格さんはそんな事を全く気にせずに、次はどんな凶行をしようかと意欲満々なようだった。

「とにかく他の部屋も探そうぜ！ まだまだぶっ壊したりねーしな！ 見つかりそうになってもおめーがいるから最悪、罔にしてみいいし派手に出来そーだぜ！」

「ちょ、ちょ、ちよつと待ってくださいよ！ いくらなんでも罔つて！？」

真由さんは時々、過激で物騒な発想をしてくるな。

こんなマッドな施設に捕まったらバツとかと配合されて、見た事もない怪人にされちゃうよ！

「うそうそ。冗談だよ！ いや、でもおめー、やたら勘がいいから1人でも逃げれるかなー、と思ってるさ。」

後ろから来た物音とか気配に敏感だろ？」

（それは、わたくしがいるからですね）

「そ、そうですね……」

確かに敏感ではあるんだけど、幽霊がいるからわかるんです、とは言いつらい。

電波扱いされてしまう。

しかし、真由さんはぼくが念能力者で円の達人だと思っているのか、人の気配がわかるという不可思議な力に疑問を持つ事はなかった。

ま、宇宙人とか魔法少女を研究する会社があるんだし、この世界には不思議な事があるんだろう。気にしないでおこう。

「んじゃ、さっきみたいに、あたしの行く道に危険がないかわかったら教えてくれよな」

「わかりました」

そうして、真由さんが先頭を切って部屋の外に出てみると、今まで閉まっていた全ての部屋が開けっ放しになっていた。

多分、データを消した犯人、つまり、ぼく達を探すためだろう。

でもさ、あんな嚴重な仕掛けをしても、ドアを開けちゃっていたら元も子もないような気がするけれど……

って、なんだあれ？ 一つだけ仰々しいオーラを放っている扉がある。

（あそこだけ扉の色が違いますね。他のより赤っぱいというか……
装飾も派手ですし）

（うん。なんというかボスの部屋とか、大切な物が保管されている

ような部屋だよね)

でも、まさかそんなベタな事があるわけないよね？

普通に考えて罠に決まってるよ。

こんなの引つかかる人なんているわけが、

「おっ！ あそこだけ良さそうな部屋だな。ユウマ、あたしはこの赤い部屋を選ぶぜ！」

……いた。

真由さんが見た目通りの豪華な扉の部屋へと入っていつてしまった。

うそっ！？ まんまと虎穴に入らずんばしたよ！？

絶対に爆発するに決まって……あれ？ しない。

おかしいな。じゃあなんであんな外部からわかるように禍々しい気を放ってるんだろう？

そんな事を考えていると、

「おい！ いつまでそんな所でばやついているんだよ！ 早く来いよ！ カムヒアー！」

と真由さんがプンプンしながらぼくに指示を出してきた。

……うん、ひとまず大丈夫のようだ。

なので、ここにいるても仕方がない。ついていく事にしよう。

ガチャ、キィ……

部屋の中は……思ったより普通だった。

いきなり鉄格子が降りてくる罠も、不自然な影で顔が見えなくなっている黒塗りのボスも、

ライフの最大値が増えるハートのかけらみたいな重要なアイテムもなかった。

なーんだ、拍子抜けしたよ。入ったらイベントが始まるかと息巻いてたのに。

ぼくは安堵し、ほっと溜息をしつつ電気の点いていない部屋の中を見回してみる。

何かの作業中だったのか、PCの電源だけは灯っていたけれども、全体的に暗い。

ええと、スイッチはないかな。部屋を明るくするスイッチは……そうして、2・3歩ほど、歩を進めた時、

コツツ。

と、何かがぼくの足に当たった。

……なんとなくイヤな予感がする。

しかし、冷や汗を流して固まっているだけでは話が進まない。ぼくはそれを拾い上げた。

なにかのスイッチのようだ。

ん？ 何か書かれているな？

えーっと、『危険、押すな！ 爆破スイッチ！』

………は？

「真由さん……こ、これって……」

震えながら、手の中にある危険物を真由さんに見せる。

と真由さんはそれをサツと取り上げて、

「ああ、当初の目的とは違ったけれど、いいもん見つけちゃったな……」

ふふふ……と怪しい、悪巧みを考えているような笑みを浮かべた。

ま、まさか……！？

「真由さん！ は、早まっちゃダメだよ！ ここにいる人たちにも生活が、」

「ポチつとな」

「ああー！ 部屋に入って1ページも経たない内に押したーー！
！？」

しゅじんこうたち は にげだした！

ジリリリリリ！！

『Caution, Caution!』

ラスボスを倒していないのに、アクションゲームの最後みたいに自爆装置が発動してしまった！

なんてこつたい！

「へへ！ なーにが、『まゆた〜ん』だよ！ おめーら、気持ち悪いっつーの！」

正義の味方であるはずの人間が自分の組織をぶっ壊すなんてそんなバカな事があるはずない。

「いや、そんな事を言っている場合じゃないですよ！ 早く逃げましょうよ！」

『Caution! あと、3分位でこの施設は爆破します。全員ただちに避難してください』

「ええ！？ さ、3分！？ いくらなんでも早すぎない！？ 始めの頃に出会ったトイレに行っている人は大丈夫なの！？ もし大なら、間に合わないんじゃない？」

「ほら！ バカな事言っでないで、あたしたちも早くズラかるぞ！」

「ズラかるって言葉って、悪者のセリフじゃないですかー！？ もうイヤだー！ お家に帰りたいー！」

「幼児退行するんじゃないー！」

バキッ！

「いたあ！？ ……はっ！ 何があつたんですか！？」

「とにかく逃げるんだよ！」

真由さんは、うろたえているばくの手を引っ張って、大急ぎで来た道を引き返す。

しかし、廊下にはさっきの研究員の人も含めて、山のような人だ

かりが出来ていて、退路までの道を隙間なく埋めていた。

混ざってしまうと一発でバレてしまう。

せめて、研究員の服でもあれば……いや、ダメだ。

皆さん、いかにもな科学者の人ばかりだから、真由さんみたいな小さな女の子では変装の意味がない。隠れられるようなダンボールもないし。

捕まったら、爆破に巻き込まれはしなくなるけど、違う形でゲムオーバーになりそうだ。しかも、ぼくだけが。

万事休すか！？ だけれども、他に方法なんて……

「おい！ ここにある研究所の地図を見たら、奥の方からも逃げられるみたいだぞ！」

ホントだ！ バツ印があるけれども、もう1つの脱出ルートが書かれていた。

……ん？ よく見ると……ドクロマーク？

「いやいや！ 完全に危ない橋じゃないですか！ 罠に決まってますよ！ しかも行った事のない道ですし、どんな所かもわからないから、二重の意味で危険じゃないですか！」

「大丈夫だから……こういった時は、あたしたちの日頃の行いを信じればいーだろ？」

「えええっ！？ 格好つけて言ってますけど、真由さん、自分の行いがいいと思ってるんですか！？ さっきの行動だけで、充分、天罰が下りそうなんですけども！？」

「知らん！ あたしは過去を省みないタイプだから！」

「もう、言っている事がめちゃくちゃですよー！」

なんとも行き当たりばったりの作戦だったのだけれども、それにすぎるしかない。

2人して、こっそりと部屋を飛び出る。

既に全員避難し終えたのか、見知らぬ初めて通る廊下には人っ子一人、誰もいなかった。

ふう。こんな調子で脱出出来ればいいんだけど……。

心配していたけれど、案外すんなりとスムーズに目的の場所まで向かう事が出来た。

ここまでは日頃の行いのお陰なのかな？

それともぼくがテンションを無理やりあげているからなのかな？

そんな感じで真由さんとぼくとエリユエちゃんの逃走劇は続いていたのだっただけでも……

やはりとっていいのか、最後の最後でまたひと悶着が起こってしまった。

ぼくと真由さんとエリユエちゃんの3人がようやくドクロマークがあつた脱出口まで辿りついた時、

ウィーン、カリカリという音がし、それと共に下のほうに字幕が出てきた。

心なしか、体や表情が滑らかに動くようになったような気がするけど………どういう事だろう？

しかし、ぼく達はそんな事よりも重大な生命に関わる危機に直面してしまった。

ユウマ 「ああ！ 出口が封鎖されている！ これじゃ、逃げられない！？」

エリユエ （ドクロマークはこういった意味だったんですね）

ユウマ 「やっぱり止めておけばよかったんだ！ 今からでも引き返せば、」

『あと1分位で、爆発します。奥の方に行った人、ご愁傷様です』

ユウマ 「ご愁傷様って言われた！？ もう間に合わないんだ！ 臨終しちゃう！」

真由 「焦るな！ まだどこかに助かる方法はあるはずだ！」

ユウマ 「でも、どうすればいいんですか？ ああ、絶対絶命のピンチだ！」

エリユエ （ユウマさん！ この奥に秘密の道がありそうです！）

ユウマ （あ！ ホントだ！ ここだけ、なぜか壁の色が違うぞ！ えーい！）

ドコン！ ガラガラ……

ユウマ 「ぬおっ！ いかにもな、秘密の階段が出てきたぞー！」

真由 「どこに行けるかわからねーけど、とにかく行ってみるしかねーな！」

たつたつたつ……

ユウマ 「……うわー！ とても町の地下にあるとは思えない、大きな空洞が！」

真由 「ほら！ もたもたしてると、爆発に巻き込まれるぞ！ 早く走れ！」

グラグラグラ……

ユウマ 「ある地点を越えたら、爆発する前なのか、地震みたいに揺れ始めたぞー！」

エリユエ （ちょうど、脱出出来そうなポイントを通過したからですかね）

ユウマ （スーパーマリオの中間地点みたいなものかな？ 再スタートはここからとか）

エリユエ （それは、よくわかりませんが……）

真由 「おい！ こんな所に脱出用のボートがあるぞ！ しかも、まだ使えそうだ！」

ユウマ 「わあ、ガソリンも入ってるし、この様子じゃ、すぐに出発出来そうだな！」

エリユエ （なんだか、えらく都合がいいですね。ここは封鎖されていたはずなのに）

ユウマ （確かにありえないよね……なんで1つだけあるかとか、ここの管理は、とか）

真由 「ユウマ！ ぶつぶつと一人言を言ってるで、早く脱出するぞ！」

ユウマ 「このボートで、レースゲームみたいに地下の下水道を走ればいいんですね？」

真由 「ああ！ そうだ！ 突っ切って行くぞ！」

ブルルン！！

真由 「しっかり掴まっておけよ！」

ユウマ 「はい！」

ブオオオオオオンツ！！！！

真由 「ひゃっほーっ！ ヒイアウイ、ゴーッーッ！」

ユウマ 「ロケットダッシュ！？ それに、とうふ屋も驚きのハンドル手さばきだ！」

真由 「限界まで、突っ走るぜっ！！！」

ユウマ 「お願いですから、限界は超えないで下さいねー！」

ゴゴゴゴゴ……！！

エリユエ （あっ！ ユウマさん！ 右の大きな岩壁が崩れそうです！）

ユウマ （ホントだ！？ 今まで走ってた時は崩れる気配もなかったのに！？ 急に！）

ユウマ 「真由さん！ 岩が落ちてきます！ 左に切って下さい！」

真由 「合点！」

しボタン！ ぐいんっ！

エリユエ （次は左……そして右、わわわっ、両側から落ちてきます！）

ユウマ 「ひええ！ そんなの説明出来ないよ！ 真由さん、とにかく避けて！！」

真由 「わかった！ いっけー！ マグナーームッ！！」

LR同時押し！ ジャンプ！

ガラガラッ！ ドッシャーーンッ！

真由 「ふう……あぶねえ。007も真つ青な危機一発だったぜ！」

ユウマ 「す、すごいです！ さすが、真由さん！ よつ、日本一！」

真由 「いつも峠をチャリで攻めているからな……へへっ、燃えたる？」

ユウマ 「はい！ ……あ！ 今度は左右に道が分かれてる！？ どうしよう！」

エリユエ （あそこの看板に何か書かれていますよ）

ユウマ 「ん？ 何々？ うそなら左、ほんとなら右？」

『1問目 ピーマンは とうがらしのなかまである』

真由 「みぎだ！」

ぐいん！

『にほんにくる たいふうのうずは ひだりまきである』

真由 「みぎ！」

『カンガルーはおよげない』

真由 「ひだり！」

『ほつきよく より なん……』

真由 「みぎ！ 楽勝！」

ユウマ 「おお！ すごい！ 全問正解です！ 真由さん物知りですネ！？ ……ん？」

『きりこは なつとうが たべられない』

ユウマ 「なんなのこの問題！？ ていうか、きりこって誰ーっ！？」

真由 「ファミコンのゲームでやった事がある！ 覚えてる！ だから、ひだりだ！」

しボタン！ ぐいんっ！

『ぜんもんせいかいだ！ おめでとう よくやった』

真由 「やったぜ！」

エリユエ （見事、脱出出来ましたね！）

ユウマ （なんか、爆破から逃げてる前提で話が進んでいるのが、疑問なんだけど……）

エリュエ（とにかく助かったからいいじゃないですか！）
ユウマ（まあ、そうだけども……）

そして、なおも落ちてくる岩々を一行を乗せたボートは華麗に避け続け、ようやく洞窟を抜けた。

やった！ 1コインクリア達成だ！ ボーナス画像は……ないよね。現実だし。

そんな落胆をしながらも、安全な地点まで辿りついた瞬間、

どつかーん！ ゴゴゴゴゴ……！！

派手な4ビット音の爆発音と共に、悪魔城のように、遠くにある施設が崩れ始めた。

かずおおくの ぎせいをはらい、

かくして、まほうしょうじょのそうぜつな

たたかいは、まくをとじた

……なんだか、このままスタッフロールが流れて終わりそうな雰囲気だ。

ま、仮にこれでエンディングを迎えたとしても、現実という物語は、その後も話が進んでいくんだけれどもね。

こきつかわれる舎弟の図

「ふふん。あたしを舐めんじゃねーっての！　ざまーみやがれ、へへーんだ！」

真由さんは上機嫌のようだけれど、逆にぼくの顔には縦線が入りだしていた。

ああ……冷静に考えると、ぼくは大悪人の手助けをしてしまったんだよね。

正義の使者が破壊活動を行うなんて……設定が新しすぎて、ついてけないよ……。

「ほら！　そんなに落ち込むなよ！」

真由さんが背中をバンバンと叩いて励ましてくれるが流石に現実的に考えると後味が悪い。

「そうですけど……やっぱり経済的にも、環境的にもあんな事をしたらと思うと……それにこのボートも盗んだわけだし」

「気にしない、気にしない！　漫画の主人公もゲームの主人公もおんなじ事をしてんだからさ！」

それよりも、ほらっ！　丘も見えてきたし、早く降りるぞー！」

その後、ちょうどガソリンの切れたボートを川に捨てて、ぼくたちのいた町に戻った。

というか、まさか、地下水道が学校の裏に続いていたとは……
なんか陰謀を感じるけれど、ぼくは善良な、弱い一市民なので
どうする事も出来ない。

そつえば、理事長は傘の製造会社の会長も兼任してるとか言っ

ていたな。

ええと、傘って英語でなんて言ったっけ？

……ブルブル！ 考えるのはよしとおこう！

「？ 何、首振ってるんだ？ 今さら怖くなったのか？」

「い、いえ、そんな事はないですけど……」

「ま、どんな形であれ、おめーも共犯って事に変わりはないからねーからさ」
「そんな怖い事を言わないで下さいよ……あつ、でも、これで真由さんは魔法少女じゃなくなって普通の女の子になったわけですね！」
「ぼくがそう聞いたのだけれども、真由さんは苦虫を噛んだような渋い顔をした。」

「いや、侵入した時にちよつくら資料を拝借したんだけどよ……その、こういった施設はいっぱいあるらしくて、全部壊さねーといけねーんだ。」

しかも『あの施設はここの四大施設の中でも最弱で、ここを破壊した所で全く問題はなく我々の敵ではない』って書いてあるんだよ。ほらっ、ここに」

どれどれ……ホントだ。確かにそう書いてある。

けれど、なんか侵入されて破壊される事、前提で書かれているよな。

今考えると、なんであの爆破スイッチがあつたのか不思議だし……
……そもそも用意するメリットがないし……うーん、謎だ。

そんな事を考えているぼくとは違い、真由さんは非常にあっけらかんとしていて、

「だからさー、そういう訳で、まだまだ施設を壊さねーといけねーんだよ」

チラチラッ、とぼくに何かを期待する目で見てくる真由さん。

……これはマズい。

目は口ほどに物を言うというのが良くわかる例だ。

「ソウデスカ。デハ、ボクハ、コノ辺デ……」
ガシッ！

「まあまあ、そう言わずに」

「い、いやだ！ これ以上、罪を重ねたくないんだ！ 良心の呵責があるんです！」

「いやいや、こつちも参ってるんだからよ。あたしの為に慈善事業をしてくれたら、

おめーの寛大な良心も納得してくれるはずだって」

「うつつ……それはそうですけど……」

「まあまあ、これからもあたしと舎弟のおめーで、仲良く破壊活動して行こーな」

ギリギリ……！

にこやかな笑顔なのだが、真由さんの手は万力のようにぼくの肩にめり込んでいく。

「い、いたたた……！ わ、わかりました！ これからも真由さんについていきますから！ だから、もう放してください！」

そう、無条件降伏を宣言をすると、やっと偽物の笑顔が本物へと変わってくれた。

「へへっ！ 約束だからな！ これからも一緒に行くんだぞ！」

「わ、わかりましたよ……とほほ」

ああ、実際に『とほほ』なんてセリフを使う日が来るとは……。

「よし、そうと決まったら祝勝祝いにどっか寄ってこーぜ！ おっ！ あそこのアイスクリーム屋がいいな！」

そう言って、元気にトコトコと先に走っていく真由さん。

（真由さん。見ている分には可愛くて素敵な子なんだけどね）

（そうですね。なんだか、ぬいぐるみみたいな女の子で見ていて楽しいです）

（そうだけど……関わっちゃうと大ヤケドしちゃうのが、玉に致命傷だよ……）

そんな火の玉ガールは、キャツキヤと、どのアイス注文しようか嬉しそうな顔をして迷っていた。

うーん。やっぱり小さくてかわいい。なんだか性癖が変わりそうだ。

「えーっと、これもおいしそうだしなあ……これもなかなか……って、ほらっ！」

ユウマ！ 早く来いって！ もうすぐ、あたし達の番だぞ！」

「あゝ、はいはい。わかりましたから、そんな大声で喋らないで下さいよ」

周りから生暖かい目で見られながら、アイスクリーム屋へと入っていく。

「遅い！ おい、舎弟なんだし、男だし、今日はおめーがあたしにおごれよな！」

「まあ、アイスクリームくらいならいいですけどね」

「ふふふっ！ 少しは男らしいじゃねーか！ ……これなら、あたしの……」

「えっ？ なんか言いましたか？」

「っ！？ なんでもねーよ！ ……ほら、あたしらの番だぞ」

『いらつしやいませ！ ご注文はいかがなされますか？』

「あたしはストロベリー＆パインアップルで」

「じゃあ、ぼくは……オススメの、マールブルプリン＆キャラメルにしようかな」

『はい、ストパンが1、プリキャラが1ですね？』

ギロツ!!

「……おめー、あたしに当てつけてんのか？」

「えっ？　なんで……って、ああ！　真由さん、プリキャラだった

……ふぐっ!？」

慌てて口を塞がれてしまう。

（バカッ！　だから、それは秘密だって言ってるんだろーがよ!）

（す、すいません！　つい、てっきり、すっかり……）

（てっきりはわかるけどよ、すっかりってなんだよ……はあ）

ため息と共に、口を押さえつけていた手を離してくれる。

「まったく、おめーはうかうかしてるから、今みたいに口が滑らないか心配だぜ！」

これじゃ、あたしがちゃんと見張ってないといけねーな！　……

センコーとの事もあるし」

「えっ？　最後、何か言いましたか？」

「何も言ってるねーよ、この鈍感バカ！　いつも都合よく耳が聞こえなくなりやがって!」

バキィ！　いてえ!？　なんで殴られるんだ？　理不尽極まりないよ……。

天然小悪魔（主人公が）

ほどなく山盛りの2段重ねのアイスクリームがぼくと真由さんの手に渡り、

天気もよかったので外の白いデッキでアイスクリームを頬張る事にした。

「あつ、ほへーのも、おひひほうだな？　ひとくちくりゃれ？」

座るまでに、既に上段のストロベリーを半分食べ終わっている真由さんがぼくのアイスにも手を伸ばしてきた。

「いいですけど、まず先に口の中の……ってああ！？　一口って、そんなに食べて！？」

なんてこつたい！　一気に半分以上食べられてしまった！

小さな口をハムスターのように膨らませて舌鼓をうっている真由さん。

少しは文句も言いたいところだったんだけど、

「ふふふー！　おーいひー」

あんな顔されちゃ何も言えないか。

それにしてもホントに幸せそうだなあ……こんな風にいつも可愛い顔をしていたら、どんなわがままも全部許せちゃうよ。

なんだか妹を見ているみたいだ。

そんな真由さんはアイスを食べるのに夢中でほっぺが汚れている事に気づいていないようだった。

「ああ、ほら。口の端がアイスクリームで汚れてますよ……ちよつと、こつち向いて」

ふきふき。

「ん……ありがとう。……お礼にあたしのも少しあげるからさ……ほらっ」

「あ、ありがとうございます……あーん」

ぼくはいつも妹とする感じで、無意識に目を閉じ、小鳥のように口を開けた。

「!? なにバカな事……しょ、しょうがねえな……あ、あーん」

「……あーん……むぐむぐ……うん！ 真由さんの美味しいですね！」

「そ、そうか……そりゃ、よかった……」

「あれ？ なんで、そっぽ向いちゃうんですか？」

「うるせー！ この……このっ！ うっ、あたしばつか恥ずかしがつて不公平だっつーの」

？ なんか怒っているようだけど、触らぬ神に祟りなしだから、そっとしておこう。

……パクパク……モグモグ……って、あれ？ これって、普通にデートなんじゃない？

そういえばそうだ。

恋人ではないけれど女の子と遊んでいる。

隣には、口元を汚しながらも美味しそうにアイスを食べる小さな同級生。

そのヤンキー口調の口を開けなければ愛玩動物のように小さくてとてもかわいらしい。

傍から見たら、上機嫌な真由さんと下校デートを楽しんでいるイチヤイチヤカップルなんじゃ？

事実、道を歩いている男性諸君らに嫉妬の目で睨まれている。ま、実態は全然違うけど。

（うっ。でもじろじろと見られるのは、ちょっと恥ずかしいなあっ、けど、ぼくは高校になったらこういう事をしたかったんだっ

しかもしゃべるだけじゃなくて、下校中に女の子と2人きりでデザートなんて……いっきにレベルが3つくらい上がった感じ」

そう思うと少し感慨深くなる。

真由さんに振り回されたのも案外悪いものではなかったのかもなあ……と思ってしまう。現金だな、ぼくは。

上段のアイスを食べ終わった頃、ふと思いついた事を真由さんに聞く事にした。

「そういえば、真由さんは、なんで魔法少女がイヤなんですか？」

「ああん？　なんでそんな事、聞くんだよ？」

「だって……まあ、研究所みたいな事をされるのはイヤだと思いませんけど、基本的には正義の味方じゃないですか？」

別に嫌がる理由もないと思うんですけど」

「それは……はぐはぐ……イヤなもんはイヤだからだよ」

けんもほろろに突っぱねられた。

嬉しそうな顔で食べていたのに急にアイスがマズくなったかのような表情をしている真由さん。

「うーん、でもカワイイじゃないですか？」

「その可愛いのがイヤなんだよ！　あたしはカッコいいのがいいんだよ！」

怒って机を、バンバン叩く真由さんだが、口にアイスをつけた状態じゃ説得力もない。

だって、その姿がめっちゃくちゃ反則的にかわいいんだもの。

「そうなんですか……真由さん、小さくて可愛いから、お似合いだと思うんですけど」

まだ説得するべくにちよつとムツ、としたのか小さい透明なスプーンを突きつけてきた。

「ああ、それと、あたしは小さいって言われるのもイヤなんだよ。人をいちいち見上げなきゃいけないのがムカつくしさ」

「あー、わかります。ぼくも身長が低いですから」

「そーだな。おまえも男にしてはちよつと背が小さいかな」

「むう……それは、ぼくも気にしてるんですけど……」

「なっ？ イヤだろ？ だから、あたしにも小さいとか可愛いとかは言っなよ？」

「確かにそうですね。わかりました……あつ、でも」

「んー？ ……もきゅもきゅ……なんだよ？」

「それだつたら真由さんは、ぼくという時は見上げなくてもいいですな！」

ニコッ

「！ー！？」ドッキーーン！

（な、なんだ！？ こいつの笑顔は！

さっきの時も、ちよつとは男らしかったし……しかも今は、爽やかな笑顔を無防備にあたしに向けてきて……

もしや……いやいや！ あたしは父さんのように、年上で男らしくて格好いい人が理想のタイプなんだから！

その点、こいつは笑顔が可愛いやつで、全然父さんと違って……でも、あたしをかばってくれたり、気配りもちゃんと出来て……いつかこいつとキスする時、おんなじ位の身長だから無理せずに……

……い、いや！ まだキスとかそんな関係じゃねーし！

あつ、『まだ』とか、そんなんじゃないで！

「？ あの、どうしたんですか？ 真由さん？」

「……エヘヘ……へっ！？ い、いや、なんでもにやい！ なんでもにやーから！」

「でも、急に考え込んだと思ったら、赤くなったり、ニヤけたような顔になったり……」

「う、うっせー！ ……ハグハグ……ごっくん……ごちそうさま！

あたし帰るから！」

「えっ？ あ、あれ？ もう帰っちゃうんですか、真由さん？」

真由さんっ！」

真由さんはなぜか突然ぷんぷんと不機嫌になり、肩をいからせて帰ってしまいました。

ぼく、何か怒らせる事をしちゃったのかな？

（エリュエちゃん。なんで真由さんが怒ったのかわかった？）

（うーん。わたくしにもわかりません）

仲良く頭をかしげる鈍感な2人。

しかし、理由はどうあれ、ぼくと真由さんの初デートは残念ながらここで終わってしまった。

いや、これはこれでパーフェクトコミュニケーションだったのかな？

そんな事を考えているともうずいぶんと遠くの方にいる、豆粒程になった真由さんが、大きな声をあげてきた。

「ユウマーーッ！ あたし、おめーの事、気に入ったから、また色んなところへ連れて行くぞ！」

それに、もうちつと頼りがいがあれば、舎弟から弟分に昇格してやるからなーーっ！ わかったかーーー！」

「あ、あはは……」

悪の道に行きたくないし、それに出来れば舎弟や弟分じゃなくて、友達とかがいいんだけどなあ……

そんな、ぼくの気持ちを全く知らずに、

「あとー！ これから、あたしに敬語を使っくんじゃねーぞー！ それじゃーなー！」

真由さんはそんな事を言い終わるや否や、ピュウー！ と角を曲がっていった。

……やれやれ、なんだか嵐みたいにパワフルな人だったな。でも
……楽しかったよ。

モンスターがあらわれた！

ぼくは1人寂しく残ったアイスを食べ終え、帰途へとつく。

（うつ、あの食べ物はともおいしそうだったのですが……）

実体がないので、アイスを食べれずに指をくわえていて、すねているエリュエちゃん。

食べている間、ずっと恨めしそうにされていて、申し訳なかったのだけれど、どうしたって食べさせる事は出来ないのじゃない。

（ごめんよ、エリュエちゃん……エリュエちゃんの体が戻ったら、アイスをご馳走するからね）

（本当ですか？ うわーい！ やったーです）

空中でピョンピョンと跳ねて喜ぶエリュエちゃん。それ、一体どうやってるのかな？

（そんな喜ばなくてもいいのに。エリュエちゃんには色々お世話になってるし、ホント、これ位は全然いいからね。なんといっても命の恩人だし）

（そういった事をしているつもりはないのですが……あ、でも、わたくしもさつきみたいにな、ユーマさんとアイスという食べ物を一緒に食べたいです）

（うん。だからおごるって、）

（いえ！ 一緒にああして仲良く食べたいのです！ わたくし、あんな風に人と食べた事がないのです。見ていてすごくうらやましかつたです……）

（そんな悲しい顔をしないで。エリュエちゃんがちゃんと元に戻ることが出来たら、その時はまたあそこで一緒に食べてあげるからさ！ ほら、約束！）

（ホントにですか？ ありがとうございます！ ……はて？ どうしたのですか？）

小指を立てているぼくを不思議そうに見てくるエリュエちゃん。

あ、そうか。知らないよね。

（これはね、ぼくらの世界では約束をする時に、お互いの指を絡めて誓うんだよ）

（そうなのですか……興味深いです。それなら早速、その儀式をしましょうか）

ぼくとエリュエちゃんは触れ合う事は出来ないけれど、お互いの小指を絡ませあう。

（ユーマさん。なんだか恥ずかしいです……けれど、暖かい気持ちにもなれます）

（そうなんだ。よかった。じゃあ、約束するよ！ ぼくの言葉を続けて言ってね）

（（指きりげんまん、ウソついたらハリセンボン、飲ーます！ ゆびきった！））

小さい頃によくやった、おなじみのゆびきりをしたのだけでも、（拳万？ 針を千本飲ませる！？ 指を切断する！？ あ、あなたたちの星はずいぶんと残酷な事をなさるのですね！

こんな誓いを立ててしまったら、何が何でも約束を果たさなければいけません……ああ！ 恐ろしい！）

（えええええ！？ い、いや！ そんな事ないよ！ ただの言葉のあやだからさ！ ホントにするわけじゃないから！ そんな深く考えなくてもいいよ！）

確かに額面どおりに受け取ったら、そんな怖い事になるな……恐ろしや、昔の人達。

（そ、そうでしたか……でも、約束を果たそうとしてくれる気持ちが伝わりました）

（そう。じゃあ、早く元の体を戻さないかね）

（はい。そうですね）

実はないけれど、和気藹々とエリュエちゃんと仲良く（テレパシーで）しゃべる。

が、その和気藹々とした雰囲気は、次の曲がり角を曲がった瞬間に消えてしまった。

なぜならエンカウント音と共に見た事もない、いや、見た事もないというと語弊があるけれど、

仮想空間、いや、仮想空間というのもおかしいな、空想世界あたりかな？

その空想世界なら見た事はあるけれど、こちらの実世界というか実際の世界にはあまりにおかしい物体がいたからだ。

まものたのむれがあらわれた！

「ぴぎーっ！」「ウガーッ！！」

なんと、そこには、スライムとゴーレムの姿が！！

「……………えっ？」

なんかおかしくない？ 組み合わせ的に。

だってスライムは最初の村近辺に出るし、ゴーレムは結構ストーリーが進んだ中盤あたりとか、

千回遊べるダンジョンだったら地下18階クラスだよな？ しかも見た目のバランス的にも肉まんくらいの大きさと、3mくらいの大きさだよ？

つか、ゴーレムがいたら、ぶっちゃけスライムいらないよね！？ それ以前にこんな町で見かける事ないよね！？

というか町の中はモンスターが出ないって暗黙の了解があったんじゃないの！？ だから、これもホログラムとか夢でしょ！？

最新技術で驚かせる新手の映画宣伝とか？ 頼むよ！ 早くネタばらしをしてよ！ 夢なら覚めてよ！

そんな風に、頭は現実逃避をしているけれど、向こうにいる架空の生き物達は、

ちゃんと現実が存在していて、1歩1歩ばくらの方に向かってきていた。

あわわわ、どうすればいいんだ！？ はがねのつるぎはおるか、ひのきのぼうも持ってないよ！ 目を閉じて死んだふりとかすればいいの！？

（ユーマさん。戦わないといけませんよ、現実と）

（……はっ、メダパニってた！ 危ない所だったよ……）

エリュエちゃんのひと言で、少しは冷静になる……けれど、それでもどうすればいいのかわからない。

だって、どう考えたって勝てる見込みが1%もないからだ。

漫画では成功する可能性が1%以下でも必ず成功するのだけれど、現実的に考えると無謀極まりない。

（これはやつぱり逃げるべきだよな？ だって無理だよな？）

エリュエちゃんに意見を求めるけれど、

（ユーマさんが何をそこまで慌てているのかわかりませんが……と

りあえず、未知の生物と接触した場合は、平和的に接触をせよ、とわたくし達の星では習いましたよ?」

とエリュエちゃんが正論を述べる。

確かに正論だけれども、そんな悠長な事をしてる内に、ステータスバーが赤くなるよ。

……って、ああ、そうか。エリュエちゃんは、あのゲームを知らないのか。

（一応、ぼくはこの未知の生物を見た事あるんだ。いや、実際に接した事はないし、

実世界で遭遇した時の対処法なんて知らないし、ゲームでも倒す以外見た事はないから、

わからないけども、つまり何が言いたいかというと、話が通じるような気がしないんだよ）

そうエリュエちゃんに言ってみるものの、

（でも、何事も話し合う事が先決だと思います。対話をしない内に攻撃をする、というのは、わたくし達の間ではもっとも恥ずべき行為だと教えられています）

自信満々にそう言い切るエリュエちゃん。

さっきから言っている事はとても正しいのだけれども……でも今は命がかかっているんだから、そうも言ってられないよ。

（でもまずは、はじめの一步からですよ！ ふぁいと、だよ！）

うう、やってみるしかないか。山みたいな大きなゴーレムに向かって愛想笑いをする。

「あ、あの……ゴーレムさん、ぼくと仲良く踊りません、かあ!？」

ぶん!!

「ひええ!!!？」

話してる最中に、いきなり先制攻撃を仕掛けられてきた！ とつさに頭を下げる！

ミス！ ユーマはゴーレムの攻撃をかわした！

ガッンツ！！ がしゃあっ……

ゴーレムの大きな腕は、さっきまでぼくの頭があつた壁を壊していた。

とつさに避ける事が出来て助かったけれど、もしあのままだったらと思うと……死！？

（むっ。失礼な人ですね。この方は、人の話は聞くものと習わなかったのでしょうか？）

（いやいや！ そんなのん気な事言つてないで！ もう少し反応が遅れたらぼく、亡き者にされてたから！

「何もしゃべらない ただの屍のようだ」になっちゃうから！）

（むうー、確かにそうでしたね。話し合いで解決がつかないとなると……何か友好の証のようなものでも、いや、遺憾の意を表明しましょうか？）

（この期に及んで、まだそう言つた段階の話なの……！？）

絶体絶命大ピンチ

エリユエちゃんはまだ事態の緊急性がわかっていなさそうだ。

（ここは一刻も早く逃げるべきだよ！　ぐずぐずしてたら本当にゲームオーバーになっちゃう！　めいれいさせてよ！）

（うゝん。確かに話が通じそうにない相手ですね……わかりました。それじゃ、ユーマさんに任せます。めいれいしてください）
よし！　すぐさまコマンド、にげる！

ユーマは逃げ出した！　しかし、まわりこまれてしまった！

（ぎゃー！　確かにレベル的にはそうだけでも！）

ダメだ！　このまま何かの法則に縛られたままじゃ、王様に罵られるよりも早く天国に旅立ってしまう！　いったい、どうすればいいんだ！？

（あの……回り込まれた、とありましたが、あそこを抜ければいいのでは？）

（……ん？）

エリユエちゃんの指差す方向に目を向けると、

「ぴぎーーーー！」

そこには、必死でぴよんぴよんと跳ねているスライムの姿が。

あ、そうか。回りこまれてもスライムを無視して突っ切れればいいのか。

スライムの攻撃だったら喰らっても大丈夫そうだし。

「ぴーーーーっ！？」

大人しく攻撃が出来る、と甘んじていたスライムを無視して突っ

切った。

ユーマたちは逃げ出した！

やった！　なんとなく宇宙の法則をみだすことが出来た！

そうか、ここは現実だからルールなんて無視しても……

「ぐおおおおおおー！」

けれど、法則を無視したぼくたちに怒り狂ったゴーレムが見かけによらず、すばやい動きでぼくたちを追いかけてきた！

なんでだ！　あのゲームはエンカウント制なはずでしょ！

歩いてないのにまた遭遇しちゃったよ！？　シンボルエンカウントの方に変わっちゃったの！？

（それも法則を無視したから、臨機応変に変化したのではないでしようか？）

（そんなんだったら、確実にあっちが有利になるじゃないかー！ー！ー！）

だが、文句ばかり言ってもしょうがない。

地の利を生かして、狭い道を選んで走る。これならゴーレムも追いかけていくはずだ！

どしん！　どしん！

けれど、みのこなしもいいのか、なかなか振り切る事が出来ない！

ゴーレムが1歩、足を動かすたびに、まるで重機が動いているかのように振動が走る。

いや、まさに重機そのものだろう。すさまじい重圧だ。

くっ！　勇者たちは、よくあんなのを倒したり仲間に出てたりするなっ！

（危ないです！ー！）

ばやつ、としていた所にエリユエちゃんの声が響いてきた。

（ユーマさん！ 後ろ、後ろっ！）

言われた通り振り向くと、ゴーレムが組んだ両手を振り降ろそうとしていた所だった！

ブオーンッ！

「うひゃあっ！？」

とっさに横っ飛びで避ける。

またもや、間一髪、避ける事が出来た。

ゴーレムは茶色いドラム缶を派手に壊していた。

壊されたドラム缶の中から色んな物が辺りに飛び散り、鉄パイプや角材が転がった。

……ん？

なぜか、他にもドラム缶から焼きたてのローストチキンが出てきたぞ？

（美味しそうですね……食べる体力が全快しそう……あ、あのガムもそんな気がします）

いやいやいや！ ローストチキンとか、落ちてるガムなんて食べたらいけないでしょ！

普通ありえないから！ 絶対にお腹を壊しちゃうよ！ しかも食べるのに時間かかるから無理に決まってるよ！

そんな意地汚い事をしたら、半裸マツチヨの市長も怒るよ！

謎のローストチキンを無視して、ぼくらは路地裏の奥へと逃避行を続けていく。

くそ！ やっぱり避ける事しか出来ないのか！ 自分の弱さが歯がゆい！

けれど、一体どうやって倒せばいいんだ！？

石で出来た大岩を砕くなんて、人の手じゃできっこないよ！ ず

つと逃げ回るしかないのかな。

あっ！？ ツルリンッ！ どてんっ！

なぜかバナナの皮が落ちており、でも普通だったらバナナの皮を踏んだくらいじゃ滑るはずなのに、

運が悪い事に今回は豪快に180度回転して転倒してしまった。

（ユーマさん、大丈夫ですか？ ああ！ ゴーレムが！？ キャアアア！！）

エリュエちゃんが、ぼくにしか聞こえない声で悲鳴を上げた。

追いついたゴーレムがぼくを踏み潰そうとしていたからだ。

逃げようとしたけれども、あまりの恐怖で腰が抜けて起き上がれない。

（あつ、これはもうダメだ……自分は無傷なのにお供のモンスターが負けたトレーナーと同じように、なぜか目の前が急に暗くなるもん）

諦観し、薄暗い路地裏でぼくが絶望に打ちひしがれたその時！

空から華麗に、3回転半ひねりをして登場した人物がぼくの前に降り立った！

勝利？

クルクルクル……シュタツ！

芸術点で満点が取れそうな位の綺麗な着地。

逆行でシルエットしか見えない演出が、またニクイ。

ガシッ！

未だに逆光で顔が見えない人物はぼくを踏み潰そうとしたゴーレムの足を片手で……なに、受け止めたあ！？ そんな芸当可能なの！？

「大丈夫か？ 私が来たからには、もう安心だ」

そんな頼もしい言葉をぼくに言ってくれた人物は……なんと、花も恥らう、うら若き女性だったのだ！ しかも、モデルみたいに格好良くて美しい！

「ふん！」

ドーーーーンッ！

シャギーがかった黒髪をなびかせて、そんな細い体のどこに力があるのだろうか、ゴーレムを純粋な力だけで向かいの壁へと吹き飛ばした。

そして、ぼくを背中を守りつつも戦闘体勢を整える。

か、かつこいい！ 痺れるし、憧れる！ ぼくが女だったら惚れちゃうよ！

（とても勇ましい方ですね。わたくしの部下と……ああ何か思い出せそうな……）

エリュエちゃんは何やら頭を悩ませていたけれど、今はこの女性の動向に目が行ってしまう。

「さあ、どうした！ どこからでも、かかってこい！」

「ぴぎーーっ!？」

その女性の威圧に圧倒されたのか、ようやく今ここへたどり着いたスライムは、またすぐに一目散に逃げ出してどこかへ行ってしまった。

やはり、自分と圧倒的強さを見せ付けられると、モンスターでも怖気づくものなのだろうか。

……まあ、スライムはぼくでも倒せそうだけど。

となると、残すは、倒れていた体を立て直している怒り心頭のゴーレムだけである。

「オラオラッ! どうした、どうした? こっち、こっち! かかってらしゃい!」

女性はゴーレムを前にしても全く恐れておらず、挑発を繰り返している。

なんというか取るに足らない相手だという風な態度だ。

すでに挑発によって怒りゲージがMaxまでたまった状態のゴーレムが、

さつきからずっと挑発を繰り返して無防備になっている女性に向けて、会心の一撃を放った!

グオオオオオオオ!!

こ、これは……避けられないんじゃないか!? 果たして彼女はガッツが足りているんだろうか!?

だが、既に戦闘態勢に戻っていた女性はゴーレムの超必殺を待っていたかのように、ブロッキングで相手の攻撃をいなし、

「もらったあ! 発散っ!」

と、彼女はクロスカウンター気味に、深く腰を落とし、まっすぐ

に正拳突きを放った。

ばーん！

「ごーれむー！」

なんと！ ゴーレムは一突きで粉々に砕け散った！

てか、ゴーレムはそんな風に悲鳴を上げないような気もするけど…… おおっと、そんな事はどうでもいいや。

やられたまものは消滅して、代わりに宝石や金貨となった。そういうシステムなのね。

女性は、えいえいおー！ みたいなポーズを取りながら勝利の余韻に浸っているのだけれども……それは違うゲームなんじゃない？ あ、ぼくにも経験値がもらえた。じゃあ、いっか。

そして、ファンファーレも鳴り止み、倒れていたぼくに手を差し伸べてくれた。

「やあ、大丈夫かい？ 危なかったな。怪我はしていないようだったけれど」

「あ……ええ、大丈夫です。ありがとうございます」

女性の手に引かれて立ち上がってみると……うわ、彼女の方が背が高い。ちよつと凹む。

「パトロール中で良かったよ……しかし、なぜこの世界に私たちのモンスターが……」

「えっ？ 私たちの？」

「あ、いや、なんでもない……おおっと、自己紹介がまだだったな。私は斑鳩^{いかるが}だ」

「斑鳩さんですか。ぼくはユウマです。危ない所、助けてくださってありがとうございました」

「いやいや、それがパトロールの役目だからな。ま、今までに、このせか……この地区で、ゴーレムを相手する事はなかったんだが……とにかく、怪我してなくて何よりだ」

「でも、よくゴーレムなんて倒せましたね」

「いや、ゴーレムなんて指先1つでも充分だ。なんたって、全てのバトルをマスターしているからな」

「はあ……」

「だが、おかしいな。これまでこういったモンスターは出てこなかったのだが……」

斑鳩さんが首をかしげながら、なにやらブツブツと呟いている。

「……何かが起こる前ぶれか……ああと、ゆうま君。君はもう帰った方がいい。ここは危険だ」

「そうですけど……でも、やっぱり女性を、斑鳩さんを置いて逃げるなんて出来ません。ぼくも何か手伝わせて下さい」

「そうは言うが、さっき君は腰を抜かしていただろう？ そうなると、君を毎回助けないといけなくなる」

「でも！」

「……言いたくはないが、足手まといになるんだ。助けてくれる気持ちはありがたいが、君はもうお家に帰りなさい」

「そんな……助けてもらったお礼もまだしてないし」

「そんなのはどうでもいい。礼を言われる為に助けている訳じゃないんだからな」

「でも……」

くつ。続く言葉が見つからない。力のないのが悔しい。

守られているだけの人生なんて男の子として情けないよ！

（あの……ユーマさん。お2人で話し込んでいる所すいませんが、）
ぼくが失意のうちに打ちひしがれていると、背後からぼくの肩を叩く素振りをしてくる人物が。

(……ん？ エリユエちゃん、どうしたの？)

(はい。そこにまだ、モンスターらしき人物がいらっしやるのですけど……)

そう言つてエリユエちゃんが指をさす。

んん？ 何を言っているんだ？ もうモンスターはいないよ？

そんな所には、なんにも見あたらないけど……あつ！？

姿かたちはわからないが、なにかユラユラと蜃気楼のように揺れている物体が近づいてきている！

「……？ どうした？ ゆうま君？ おとなしく帰る気になったのか？」

斑鳩さんは気付いていない！ モンスターが斑鳩さんの背中に向けて手を振り上げた！

「あぶないっ！」

おもわず斑鳩さんに体当たりをしてしまった！

「なっ！？ いきなり、何をする！？ というか、どこに顔をうつめて！？ きゃー！？」

斑鳩さんがなにやら文句を言おうとしたが、

ザシュッ！！

「ぐはっ！！」

その前に、背中へとても強い衝撃を受けショックで意識が遠くなり、斑鳩さんの言う事を最後まで聞く事が出来なかった。

目覚めた先は……？

「……うー、ん………」

こめかみがずきずきと割れるようなくらい痛い……何が起こって
いたんだっけ？

意識が戻ったけれど、半分眠っている感じで頭がはつきりしない。
……あれ？　すごい事があったような気もするんだけど……思い
出せない。ええと。

記憶を辿って何があったのか思い出そうとした時、誰かから優しく
頭を撫でられた。

ああ、やさしい撫で方だ。落ち着くなあ……

そういえば、後頭部のやわらかいクッションのようなものが敷か
れているのに気がついた。

これは女性特有のやわらかいひざの感触だ。

じゃあ、今ぼくはひざまくらをされていて、頭を撫でられている
のかあ……

こんな事をしてくれるのは……母さんしかない。

そういえば、小さい頃、よく頭を撫でられながらひざまくらをし
てもらったな。

「……ママ……？」

夢うつつのぼくは、思わず小さい頃の呼び名で母さんと呼んでい
た。

「気がついたみたいね？　大丈夫？」

優しい声がぼくを安心させる。うつらうつらしたままママに向か
って喋る。

「ママ、ぼく、怖い夢を見たんだ……モンスターに襲われる夢に」

「まあ、それは大変だったのね。でも、安心して。何があっても守

ってあげるから……この孤児院は安全だからな」

そう、ママがいれば安全………って、

「ええっ！？ 孤児院！？」

絶叫と共に、バツ、と目を開け辺りを見回す。

目の前には斑鳩さんの顔が……ああ！ やはり、あれは夢じゃなかったんだ！

「あいてて……」

「あ、ほら。そんな急に頭を起こしたらダメだ。なにせ気絶していたのだからな」

そういつて無理やり体を横に倒される。そして、またひざまくらの態勢に戻る。

「わざわざありがとう。私をかばってくれて……」

頭と頬を撫でながら、優しい顔をしている斑鳩さんが感謝の言葉を述べてくれた。

「いえ、咄嗟の事だったんで、別に」

「本当は私が気付いてないといけないのに……くっ、ケガをさせるなんて」

「でも、まあ結局は気絶したんだから、ぼくがかばった意味はないような気も……」

「そんな事はない。私は今まで常に先頭に立って戦っていたから、守ってもらふなどという事はなくてな……」

だから、助けてくれた事自体がうれしいんだ。足手まといとか、そんな事を言っていたのに……すまない」

「そんな……謝らないで下さい。結局、ここまで運んでもらったから、足手まといなのは変わりありませんし」

「いいや。人を助けようとするのは、とても難しい事なんだ。だから

「私も嬉しくて」

「斑鳩さん……」

「ゆうま……って、ぷっ、あははは。そんな見つめられると照れてしまうじゃないか！」

「そんな！ 笑うなんて非道いですよ！」

「ははは、ごめんな……でも……ありがとう。ゆうまの気持ちが嬉しかったのは本当だ」

「いえいえ、どういたしまして。斑鳩さん」

「ゆうま……」

「斑鳩さん……」

「……ゴホン！ お2人ともイチャイチャしている中、すいませんが……」

「……!?!?」

いきなり声をかけられて驚き、ぼつ、と離れるぼくと斑鳩さん。ぼくらのすぐ横には、ぼくと年が同じくらいの女の子がいた。全く気づかなかった。それだけ斑鳩さんを見つめていたという事か。

「ど、どうした？ 今日香？ な、なにか用か？」

「あー、その前に、るーかお姉ちゃん。ベタベタするのはいいんだけれどももう少し人目のつかない所でお願いね。ほらっ、あの子たちもいるんだから」

と、今日香、という女の子が斑鳩さんに説教をする。

彼女が指をさした扉の影から、10数人くらいの小さな子供たちがこつちを、ぼくたちの方をニヤニヤと覗き込んでいた。

「い、い、いや！ これは別にそういった事ではなくてな……つまり、そのう……」

斑鳩さんが言い訳してるが、そんな事はお構いなしに女の子がぼくに話しかけてきた。

「あなたがゆうまさんですね？ パトロールをしていた、るーかお姉ちゃんを悪漢から助けていただいて、どうもありがとうございます」

ペコリと行儀よく頭を下げた女の子。

「ああ、いや。ぼくは別に庇っただけで……」

「それでも勇気のいる事じゃないですか。普通の人は出来ませんよ」

「いやあ、まあ……」

「まっ、るーかお姉ちゃんみたいに綺麗な女性の前でいい所を見せよう、って気持ちもわからなくはないですけどね！ やるね、盛るね、ニクいね！ このっ！ このっ！」

「い、いや、そんな事ないんだけどね……」

照れているぼくをいやらしく追及していた子が、あっ！ と小さく叫び、

「自己紹介がまだでしたね。私はここの孤児院のシスターをやっている今日香と言います」

そう言っただけを切り、手を組んでお祈りしてくれた。

「ああ、ユウマです。今日香ちゃんだね？ よろしく」

「はい。こちらこそよろしくです。神のご加護があらん事を……ところで、何か困っている事はありませんか？」

「いや、特に今はないんですけど……あ、でもここは孤児院なんですか？」

「なんだ。せっかくセーブしてくれると思ったのに……じゃなくて、そうです！ ここは困っている人や、みよりのない子供を育てているんですよ！」

「ああ、私もこの今日香に助けてもらった1人なんだ」

「へえー。斑鳩さんですか」

「ああ、私は2ヶ月前くらいに橋の下で住んでいた所を拾ってもらった」

「は、橋の下ですか……」

「そう、金星人や、かっぱたちと暮らしていたんだが、シスターからボランティアの仕事をもらってな。それで今日香の手伝いをしていたんだが、

『ずっと、ここにいて欲しい！』と子供たちに頼み込まれて……結局、住み込みで働くことにして、今に至るわけだ」

「……結構、アグレッシブな波乱万丈な人生を送っていますね……」
色々突っ込みどころがあったけど、ぼくはその言葉しか言えなかった。

意外な真相？

「いや、何。旅をするのは慣れているからな。野宿生活はお手の物だ」

誇らしげに胸を張る斑鳩さん。

なので、胸も強調される。健康的ないい体だなあ……。

「ヒューヒュー、るーかお姉ちゃん、このお兄ちゃんと結婚するんだ」

「ねーねー、るー姉ちゃん、キスしてよー。キスー」

「ほらー。夫婦になるんだったら、チューー！ チューー！」

ぼくが恍惚の表情を浮かべていると、扉の影ですつと覗いていた子供たちがやんややんやとぼくたちを冷やかしてきた。

そしてその中の1人、小学校高学年くらいの男の子が部屋に入ってくるなり、

「おめーなんかに、俺らのるーか姉ちゃんをやらないからなー」
バキッ！

いてえ！？ 思いつき殴られたよ！ 子供は手加減しないからなあ。

ととと、この調子で殴られたらいけない。どうにかこうにかしないといー！ と考えていると、

「こら！ ケン坊！ 暴力はいけないうて、いつも言ってるだろ！」
ごちん！

斑鳩さんがケン坊と呼ばれる男の子に、容赦なくげんこつをくらわしてくれた。

（暴力はいけない、と言っている人が暴力を振るっていますが……不思議ですね）

（いや、でもこれは教育だから仕方ない事で……）

鉄拳教育受けたケン坊君は、涙目になりながらもぼくに向かって、
「おいその！　るーか姉ちゃんが欲しかったら、俺と決闘しろよな！　絶対だぞ！」と宣言してきた。

別にまだそんな事、思っていないのにさ。

「こら！　ケン坊！　いつになったら人をいじめる癖を治すんだ！
お兄ちゃんだろ？」

「うう……でもるーか姉ちゃんがこいつと結婚したら、ここからいなくなるから……グズッ」

「大丈夫だ。結婚したとしても、いなくなるなんてないから。

ほらっ、男の子が泣くな！　シャキツとする！　そんなんじゃ、
女の子にモテないぞ？」

「……うう……うん！　俺、泣かない！」

「ふふっ！　それでこそ男の子だ！」

どうやら、みんな仲良くやっているようだ。

「ルーカさんは、みんなと打ち解けていますね。こういうの得意なんですか？」

「いや、得意というか、私も孤児院の生まれなのでな。小さい頃からこうやって暮らしてきたから自然と身についたんだ」

「あっ……すいません。余計な事を聞いちゃって」

「いい、気にするな」

そういつてケン坊にしたみたいに、ぼくの頭もぐじぐじと乱暴に撫でてくれる。

……うん。なんだか、斑鳩さんがみんなに好かれる理由がわかる気がする。

「そつだ！　ゆうまに頼みたい事があるんだ！　少し時間をくれな
いか？」

「ええ、いいですけど?」

「教子。もう少しだけ、こいつと話をしてもいいか?」

「はい。いいですよ。この子達の前でイチヤイチャしなければ、ですけどね」

「もう! そういった事はしないから!」

そんなこんなで、ぼくたちは孤児院の裏にいる。

なんだか今日は暗い所に行く事が多いような……

手を引つ張つて連れてきた斑鳩さんが、ぼくの方へと振り返る。

「斑鳩さん。それで、話というのはなんですか?」

「ああ……それなんだがな……」

なにやら言いにくそうに、もじもじとしている斑鳩さん。なんだか可愛らしい。

「その……」

「その?」

「あの……」

「あの?」

「……………ええい!」

ぱん! と手を合わせて、勢い良く頭を下げると、

「すまない! 私の魔法の練習に付き合ってもらえないか!」

斑鳩さんが重大な告白をするかのように声を振り絞ってこんな頼みごとをしてきた。

魔法……つて、ほうきで空を飛んだり、指から火を出したりする

魔法の事かな?

でも、なんでそんなに恥ずかしそうなんだろう?

「は、はあ。よくわかりませんが……まあいいですけど」

「ホントか!」

「ばあ! と顔をほころばせる斑鳩さん。

しかし、またすぐに顔を沈ませて、

「あと、その前に、ここで重大な秘密を、先に打ち明けないといけないんだ」

と、深刻そうな顔をして話してきた。

「え……なんですか？」

何？　もしかして、魔法少女、幽霊と続いて、また何かあるのかな！？

そこまで深刻そうにするって事は、例えば、斑鳩さんが生き別れの姉だったとか！？

それとも、右手の中に獣が寄生していて人間じゃないとか！？

それともそれとも、名前を書いたら死ぬというノートの保持者とか！？

どんな驚愕の事実を打ち明けられるのかと、息巻いて告白を待ち構える。

「実は………私は別の世界から、異世界から来た人間なんだ」

「……あつ、そうですか。わかりました」

斑鳩さんの過去

なあんだ。それ位なら別にどうって事ないな。それだけか。だが、驚かないばくの反応を見て、逆に斑鳩さんが驚いた。

「ええっ！？ ゆうま、君はなんで驚かないんだ！？ 異世界から来たんだぞ！？ この世界じゃありえない事だろ！？

異世界人の到来を渴望している女子高生もいる位と聞いているのに！

というか普通驚くだろ！？ この世界に来て、ずっと秘密にしていたのに！」

「えっ、いや、今日だけで色々ありすぎて、もう麻痺してるからというか、

別にそれくらいだったら、わかりやすいし、設定的にも普通かなって」

ばくのその発言に呆気にとられている斑鳩さん。

「そ、そうなのか……告白しようか悩んでいた私の方がバカらしくなってきたぞ……」

うな垂れそうな頭を右手で支える斑鳩さん。深くため息を吐いていた。

「まあまあ、いいじゃないですか。……あ、それで、魔法の練習とというのは？」

「ああ……その、本当に簡単な事なんだ。なに、君を丸焦げにしたりはしないさ」

「……………」

そんな事を言う時点で、その可能性がある、という事を意味しているようなものだ。

ちよっときな臭くなってきたぞ。詳しく知っておかないと、後で痛い目に遭いそうだ。

「あの、出来れば、具体的な事を先に、お聞きしたいんですが……」
「いや、な……私のいた世界では、魔法というものは誰にでも使えるものだった。」

ただ、私には魔法の才がなくてな。そのハンデを力だけで乗り越えてきたんだ」

「はあ……すごいですねー。魔法を使える世界で、体一つで立ち向かっていくのは大変な苦労だったでしょうに」

素直に思った通りの感想を述べると、斑鳩さんは少し照れた。

「そんなおべつかはいいい。……それで、だな。1人山奥で修行を繰り返し、魔法に頼らなくても充分に強くなった頃、私は女勇者と出会った」

「勇者にですか？　すごい偶然ですねー」

「いや、勇者というのは後付けなんだ。なにせ魔王を倒そうとする者は、みな勇者なのだから。私の世界では、自称勇者がごまんといた」

「はあ………」

「それで途中に出会った、女僧侶や女賢者らと共に旅をして、道中さまざまな敵たちと戦いながらも、1年前に見事、魔王を倒したのだ」

「はあー……魔王を……ですか……」

あまりに凄過ぎて、嘆息する。ぼくには全く想像がつかない。

だが、そんな荒唐無稽の話も、斑鳩さんの強さを見た今なら信用出来てしまう。

「無事、世界は平和になったけれども、私は更なる強さや、私より強いやつを求めて旅に出たのだ」

なにやら求道者っぽいな。ストイックなのだろう。そういう所も含めて格好いい。

「だが、隠しダンジョンの裏ボスも倒して、やる事がなくなっ

まってな。そんな時、ふと、小さい頃からの夢を思い出したんだ」

「それが魔法を使う、という事ですか？」

「その通りだ。早速、その目的を達成しようと、すぐに大魔法使いの門を叩いたんだ」

なんか斑鳩さんらしいというか、決めたら即実行！

でアポイントメントなしだったんだろう。大体、想像がつく。

「3日3晩、門の前に座り込んで、無理やり、弟子にしてもらったまではよかったんだが、如何せん初級の魔法も使えずに……破門の危機に立たされたんだ。」

いや、その前にも1度、師匠の大事にしている蔵を派手に壊してしまい、破門にされそうになったけれど、強引に……実力行使で……そして、今回もなんとか条件付きで破門は免れたんだが……」

「……………」

（エリュエちゃん。今、小さな声で、『実力行使』って言わなかった？）

（はい。聞こえない位、小さかったですけど、確かに言いましたね）

（というか、素手で魔王と渡りあえる位なんだから、魔法が使えなくても、その大魔法使いの師匠より強いんじゃないのかな？）

（確かに、魔法を使わなくても、充分に実力のあるお方ですからね）
そんなばくと、エリュエちゃんのやり取りに気づく事もなく、斑鳩さんは喋り続けている。

「……なんだがな。本当に参ったよ……ん？ ゆうま、聞いているか？」

「あつ、はい！ 聞いています！ それで、どうしたんですか？」

「ああ、それでな、半年前に条件を出されたんだが……まだ、1つもクリアしていない」

「はあ、魔法を使うのって、そんなに難しいんですか……で、そ

の内容とは？」

「1つずつ言うとなくなるから、端的に言うが、君の使える、君と
いうのは私だな、

その私の使える『異世界を飛ぶ魔法』を使って様々な課題をクリ
アしなさい、と言われた」

（ああ、それでこちらの女性はこの世界に来たようですね。異世界
を飛ぶ魔法というのは、わたくし達という所のワープといった所で
すか）

（ぼくの世界じゃ、どっちも使えないけど、言葉くらいは知ってる
な……って、あれ？）

「異世界を飛ぶ魔法、って斑鳩さん、魔法使えてるじゃないですか」

「い、いや、それは魔法と言つか体質なんだ」

「体質？」

「私には自分が必要としている物や場所、条件が揃えば、違う世界
に飛ぶ能力があるんだ。確かに他の誰も使えないが……残念だが、
これは魔法ではない」

「でも、みんな使えないのなら、定義的には充分、魔法なんじゃ、」

「いや、私はみんなが使っている『普通』の魔法が使いたいんだ！」

そう熱演する斑鳩さん。

普通の魔法って……特殊な魔法の方が絶対にいいと思うんだけど

……

「そんなに魔法が使いたいですか？ 別に魔法が使えなくたって、
斑鳩さんは魔王を倒せる程、強いんだから、別にいいんじゃないで
すか？」

そう言う斑鳩さんは、なにやらまたモジモジし始めて、

「うつ……だから……その」

「？ なんですか？」

「……その、魔法使って可愛いだろ……？」

小さくなり、俯きながら上目づかいでこちらに同意してくる。

うつ！？ これは可愛い！！ これは納得せざるおえない！

「そ、そうです。かわいいですよ……って」

…… あっ、今は斑鳩さんの仕草が可愛いのであって、別に魔法使いが可愛い、って言ったわけじゃないです！

と言いたかったのだけれども、斑鳩さんはぼくの同意を聞いて、水を得た魚のようにイキイキとし始めた。

「そうだろ！ 私もあの黒いローブを羽織って魔法を使いたいんだ！ 部屋に籠って難しい魔導書を知的に読みたいんだ！

しかし、誰もみんな私のいう事に同意してくれない。勇者も僧侶も苦笑いをするばかりだし、賢者に至ってはバカにしてくるんだぞ！

魔法使いになりたい、というのは私の目標であって、どんなささいな事でも個人の考えは誰にもバカにする事は出来ないんだ！ だから、私は決して諦めはしない！」

元気にブンブンと腕を振り上げて演説する斑鳩さん。

その姿は軍を鼓舞し、士気を高める精悍な騎士とダブって見てしまう位に勇ましい。

決して、薄暗い部屋の中で1日中、本を読んだり、怪しい液体をぐつぐつ煮ているような魔法使いの姿には似合っていない。

…… けど本人がしたいって言ってるんだし、いいか。

異世界の軌跡

「わかりましたよ、手伝います。でも、危ない真似はしないで下さいね?」

そうして助手として手伝う事となった。

助手ならばくに被害が及ぶ事もないだろうし。

まあ、斑鳩さんの人格をみても竹を割ったようなわかりやすい性格なので、無理やりイヤな事をしてくる事はない……と信じたい。

「そうか! ようやくわかってくれたか! ありがとう! ゆうま!」

斑鳩さんはいきなり目的達成! とばかりに抱きついてきた!

「うわっぶ! まだ何にもしてないですから! これで喜んでたら終わりませんよ!」

「……ああと、すまない。つい興奮してしまっただけ」

えへへ、失敗した……とつぶやく斑鳩さん。

うう、失敗のリアクションが可愛いぞ!

これなら何回でも失敗したくなっちゃうよ。

色んなバリエーションを見てみたいもん!

「気持ちはわからなくはないですけど……それで、どんな事をすればいいんですか?」

「ええと……目下、今の課題は……メラを唱えて敵を倒す事だ」

「ほうほう……メラをね……って、えっ?」

「えっ?」

「メラ?」

「そうだ。もしかして知っているのか? メラを?」

「知っているも何も……というか、まさか、まだ1番最初の課題とか……だった?」

「……そうだ。1番最初の課題でつまづいている」

「いつからですか？」

「……………かれこれ半年ほど前、だな」

ヒューー……………

ぼくと斑鳩さんの間に冷たい風が通り過ぎていった。

「ええつと、それでは今日はこの位で……………それではまた来週」

「お、おい！ 待て！ 帰ろうとするな！」

「だって、メラレベルで挫折していたら、メラゾーマとかの魔法は一生使えませんよ！」

「だ、だが、それでも半年間は頑張っていたんだから！」

「一体、何してたんですか！？ 半年間も！」

ぼくの言葉に声を詰まらせながらも、

「うっ、それはだな……………違う世界を回っていたんだ」

あ、この世界に半年いたわけじゃないんだ。

「この世界以外でも、魔法の修行をしていたんですか？」

「ああ、そうだ。まず最初に跳んだ世界は、確か……………」

最初という事は、この少女は何度か、時ならぬ、別世界をかけているようだった。

「確か……………そう。森やジャングルに覆われた世界だったな」

ふーん。まあ、なんとなく想像出来る。

「それで、何人かと一緒になって巨大な敵と戦って過ごしていたな。マンガ肉を焼いたり、お供のネコと様々な種類の任務をこなしていった感じだったな……………ふふっ、懐かしい」

「……………」

「それで旅の途中で出会った、頭がねじの形をした変な連中や宇宙人っぽいマヨラー達と協力して、

一番強い敵を倒して……それから、やる事もなくなったのでその世界から次の世界に跳んだんだっただな」

昔の武勇伝を思い出しながら、自分の冒険譚を話している斑鳩さん。

（壮絶な戦いを繰り広げていたんですね……わたくしには想像がつかません）

（うう。残念ながら、ぼくには想像がつくよ……）

（ユーマさん？ どうして泣いているんですか？）

（いや、著作権的にギリギリレベルで、胃が痛くなってきたんだよ）
（はぁ……でも、それはユーマさんが気にしなくていい事ではないのですか？）

（まあ、そうなんだけれど）

ぼくがいらさない心配をしている間に斑鳩さんが、次の世界の事を思い出したようだ。

「次に訪れた世界は……ああ、魔法学園がある世界だったな」

「えっ！ それはちょうどいいじゃないですか！」

今度は前の世界と違って、断然期待できそうな世界だ。

「それじゃ、魔法は……！ あっ……」

そうだ、ここにいるという時点でムリだった、って言っているよなものなんだ。

ぼくの顔色を察してか、トーンが低くなりつつも、律儀に答えてくれる斑鳩さん。

「ああ、そう……察しの通り、無理だった」

「でも、それじゃ、魔法学園に通ってもダメだったら、魔法に関して全く知識のないぼくが立ち会ってもムリなんじゃ……」

「いや、それは問題ない。というか、その魔法学園は全く魔法を教

えずに、クイズばかり出題してきたんだ」

「……………はい？ クイズ？」

「そうだ。おかげで、昔のスポーツ選手やマニアックな地名など、どうでもいい知識は覚えられたんだが……」

結局、賢者になっても、全国1位になっても、ただの1つも魔法が覚えられなかった。サギだとしか思えない」

「……………」

「それに、上位になる頃にはいい加減、いかに早く問題を解くかの熾烈な競争にも飽きてしまっただけも諦めたんだ。

それで、次の世界は……………」

「も、もういいです！ アブない橋を渡っていった、っていうのはわかりましたから！」

「むっ。そうか。ユーマがそう言うんならいいんだが……………」

どうも、著作権的にどうか？ という世界ばかりを渡り歩いている気がしてならない。

今ごろ担当の人とかが必死に頭を下げ回っているに違いない。苦勞がしのばれます。

斑鳩さんはすごい事を成し遂げてはいたようだけれど、話を聞いている限りじゃ肝心の魔法関係は全くといっていいほど、鍛錬をしていなかったようだ。

「とどのつまり、斑鳩さんの話をまとめると……………」

「まとめると……………」

「半年間、何もしていなかったという事でいいんですね？」

「そんな事！ ……あるのかもしれない。最終クエストをクリアしたり、1位になったりしたが、今考えると魔法とやら関係なかったな……………くっ、悩ましい！」

「はあ……………熱くなる性格なのは見ていたらわかりますけれど……………そ

れで、今はどこまで魔法を唱えられるようになったんですか？」

「そうだ！　今が大事なんだ！　ふふふっ！　聞いて驚くなよ！
ここの世界は平和だったから、修練がはかどったんだ！　ほら、見る！」

そういつて、斑鳩さんは目をつぶり、なにやら唱えると、

「メラッ！」

ボツ！　ちゃんと手の平から火の玉が飛んだ！

「おおっ！？　予想に反して、ちゃんと使えている！？」

（すごいですね！　体から炎が出るなんて！　信じられません！

これが、メラというものなんです……これは一体……マジック
か何かでしょうか？）

（いや、だから魔法でしょ……って、まあ、ぼくも原理はわからないけど）

エリュエちゃんにそんな突っ込みをしつつも、

「いやあ、話を聞く限りじゃ、魔法が唱えられるなんて思ってた
んですけど……すごいじゃないですか！　これであとは敵を倒す
だけですよ！」

「そう、なんだが……」

また歯切れが悪くなる斑鳩さん。

何？　他にもあるの？

このお嬢さんは、どれだけ問題を抱えていらっしやるんだ。

「他にも何か問題があるんですか？」

「ああ。この世界に来て魔法が使えるようになって、さっそく何
度も挑戦しようとしたんだが、

やはり戦闘中に目をつむる、というのは戦士だった私には向いて
なくて……結局、今の所、この世界に現れた悪漢は全て体術で倒
しているんだ。

……くっ！　普通に戦うのなら、小足で拳竜昇くらい余裕なのだ
が……」

情けない……と、ほぞを噛むような表情をする過去さん。

そういえば、さっきのゴーレムも魔法を使う素振りすらせずに、素手で倒していたな。

確かに、敵を目の前にして目をつむるのは自殺行為だ。ゲームでも、魔法使いは基本的に後衛で、前衛の戦士とかに守られて戦っているから安心して魔法を唱えられるんだよね。

でも今、パーティーを組んでおらず、斑鳩さん1人しかない。それじゃ、前衛も後衛も関係がないもんな。

どうすればいいんだろう……？

……そうか！ 簡単じゃないか！ ぼくが前衛になって盾になればいいんだよ！

「斑鳩さん！ 任せて下さい！」

「ん？ 何がだ？」

「もし今度、敵が来たら全力で斑鳩さんを守ります！ だから、安心して目をつむってバンバン魔法を使って下さい！」

はつきりと斑鳩さんの目を見て、ぼくはそう宣言する。

「そんな……悪い。私のわがままに、そこまで付き合わせるなんて……」

「いいえ！ 全然悪くないです！ これ位、へっちゃらだし、へののかっぱです！」

斑鳩さんに助けてもらった恩をここで返さないと、男がすたるつてもндыすよ！」

「ゆづま……」

「斑鳩さん……」

「それじゃ……お前に守ってもらっても……いいのか？」

「ええ……ぼくを頼って下さい。いや、ぼくにまかせて！」

「！！ その言葉、女勇者もよく言っていたな。ふふっ。あいつと似ている」

「そんな……ぼくなんか勇者さんと似てるなんて……そんな、ありえないですよ」

「謙遜するな。自分の危険を省みずに、人を助ける所なんてのは、主人公の証だからな。」

誇ってもいい事だ……だから、安心してお前に前を任せられる」

「わかりました。それじゃ、勇者さんの顔に泥を塗らないように精一杯頑張ります！」

ニコッ！ ……キュン……

（！？ なんだ、この胸を締め付ける痛みは！ これは……もしかして、賢者が言っていた『恋の魔法』なのか！？

なんと言う事だ！ 私は主の魔法にかかってしまった！ 不甲斐ない。

あいつが言っていた通りなら、この状態異常は治せないはずだ。顔が火照って、ヤル気も半減すると言っていたな。

しかし治す必要はないとも言っていた……しばらく様子を見るだけでいいらしいのだが……くっ、あの時、詳しく聞いておけば良かった！）

「？ どうしたんですか？ 斑鳩さん？」

「ひゃっ！？ い、いやなんでもない！ 本当にいいのか？ 後悔しても知らないぞ？」

「大丈夫！ 斑鳩さんは魔法が使えるんですから、後はぼくが頑張ればいいだけです！」

「主……」

「斑鳩さん……」

魔法使いへの小さな1歩

「…………… ウオッホン！ あの一、お2人ともいいかな？」

「「！！？」」

慌てて、ばつ、と離れる2人。さつきもあつたな、この展開。

「な、なんだ今日香？」

冷静に斑鳩さんは答えるけれど、多少、声が上がっていた。

「いや、そろそろ夕食の支度をしないと。斑鳩お姉ちゃんの手伝い
がなくなちゃ……………」

今日香ちゃんが、そんな事をぼくたちに話していると、

「きゃー！ー！」

向こうの方から子供たちの悲鳴が聞こえた！

「！？ 何が起こったんだ！？ くつ、間に合え！」

事態をいち早く理解した斑鳩さんが、すぐさま声のする方へと駆け出した。

遅れて、ぼくと今日香ちゃんも斑鳩さんに続く。

今、子供たちの近くには保護者がいないんだった！ こんな世の中じゃ何が起きてもおかしくない！

もしかして、新聞に載るような悲惨な事件が起きてたとしたら…

…！

「うわーん！」「こわいよー！」「えーん、えーん！」

子供たちは部屋に逃げ込んでいた。どうやら、玄関から何者かが侵入してきたらしい！

「みんな！ 大丈夫か！ 私が来たから、もう安心し……………」

ん？ 斑鳩さんの声が止まった。何があつたんだ？

（多分、絶句しているのだと思います。ほら、あれがここに来たよ
うです）

そこにいた人物は…………

「ぴー！ー！ ぴぎー！ー！」

「きゃー！ 吠えてきたー！」 「助けてー！」 「プルプルしてるー！」

「ぴー♪ ぴぎぎー♪」

子供達をびよんぴよんと追い掛け回していたのは、さっき逃げ出したスライムだった。

「ス、スライムか……なんだ、びつくりしたよ……」

「危害はないと思うのだが……な」

斑鳩さんの言う通り、放っておいても大丈夫そうだけれども……しかし、スライムは今までの人生の中でこんなに人々が恐怖に陥っている事がなかったのか、

非常に調子に乗っている顔をしていた。なんとなくムカつく。

「これは……はあ……」

驚き損をしたので疲れたのか、ため息をする斑鳩さん。まあそこまで脅威はないよね。

「！！ あつ、そうだ！」

「斑鳩さん！ これはチャンスです！ 今、魔法を使ってスライムを倒せば！」

「ああ！ そうか！ これならノルマを達成出来そうだ！」

「ぱあ！ と明るくなる斑鳩さん。

そうなのだ。ノルマは『メラで敵を倒せ』なのだ。

だから、文字通り、魔法で敵を倒さなければならない。

しかし、いくら悪漢であろうとも倒してしまうのはマズいし、メラレベルで敵を倒すのも逆に難しい。

その点、スライムは非常に簡単なチュートリアル的な存在だった。

「それじゃ、ぼくが斑鳩さんを守りますから、安心して詠唱に集中して下さいね！」

「う、うん……」

緊張しているのだろうか、やや顔を赤らめながら、目をつむる斑鳩さん。

それを見届けると、未だに子供たちを追い掛け回しているスライ

ム（スピードが遅いので子供にも追いつけていない）に向けて声をかける。

「おい！ スライム！ ぼくが相手だ！！」

そう威勢良く声を放つと、顔をこちらに向けた。

口がにやけている。完全に調子に乗っているな。

あ、もともとこんな口元だっけ？

そんな調子で、調子に乗っているスライムがぼく目掛けて飛んできた。

スライムのこうげき！ ミス！ ゆうまにダメージを与えられない！

スライムのこうげき！ ゆうまに1のダメージ！

スライムのこうげき！ ミス！ ゆうまはこうげきをかわした！

スライムのこうげき！ ミス！ ゆうまにダメージを与えられない！

ヒラリ、それを簡単にかわす。

うーん、なんかぼく1人でも倒せそうだな。

けれど今回は斑鳩さんの魔法使いへの道の1歩のために、防御を選択し続けて攻撃を避けまくる。

……しかし、遅いぞ斑鳩さん。

ターン制なら、もう魔法を放つてもいい頃なのに。

そう思っ、斑鳩さんの方を見ると……あ、体がかなりギチギチになっている。

足も震えているし、詠唱の言葉も噛み噛みだ。

これは、絶対失敗するパターンだ。このままじゃ、ぼくも爆発に

巻き込まれそう。

（実践は一度もした事がないので、緊張しているんですね）

エリュエちゃんか冷静に状況を分析をしている。

ああ、もう！ このままじゃラチがあかない。斑鳩さんを後押ししなければ！

「斑鳩さん！」

ビクッ！ と目をつぶっているからか、ぼくの呼びかけに過敏に反応する斑鳩さん。

やはり、かなり緊張しているのだろう。スライム相手なのに。

「斑鳩さん。まずはリラックスしましょう！ もっと体の力を抜いて」

「し、しかし緊張してしまって、詠唱する言葉が頭に出てこなくて……」

詠唱を中断し、目を開けて、こちらに向かって弱音を吐く斑鳩さん。

さっきの凛々しい姿の面影がない。そんなの……斑鳩さんじゃない！

「大丈夫です！ ほら、ぼくが守っているんですから！ 安心して下さい（ニコッ）」

そう言って最高の笑顔を斑鳩さんに向ける。

「！ あ、ああ……！」

斑鳩さんもぼくの笑顔で緊張が取れたのか、今度は瞑想をしているような集中力を見せた。

よし、このパターンはいけそうだ！ パターン入った！

「岩砕き、骸崩す、地に潜む者たち。集まいて赤き炎となれ！ フアイ……メラ……！」

「ピギー……！」

さっき見せた手のひら大の火の玉がスライムに直撃したのだ。

スライムAに15のダメージ！！

トゥリルリルリー♪ スライムをたおした！！

「やった！ 出来た！！」

興奮した斑鳩さんが、ぼくに思いつきり抱きついてきた！

「ふふふっ！ やっぱり私にも出来るんだ！ 任務、完了！」

「うわっ！ むぐぐ、ふはっ、斑鳩さん！ むねっ、むねが……むぎゅー！？」

「わー。るーか姉ちゃん。だいたーん！ ロマンチックー！」

「るかお姉ちゃん、やっぱりあのお兄ちゃんと結婚するんだー。いいなー。いいなー」

「くそう……！ 悔しいけど、るーか姉ちゃんとお似合いなのかもしれないよ」

一部始終を見ていた子供達がぼく達を囃し立てる。

「そ、そんなんじゃないから！ ほら、斑鳩さんもいい加減に離してよー！」

「ふふふ♪ 魔法が使えたし、ちゃんと当てる事も出来た♪ 賢者のやつ、ざまーみる」

「ああ、まったく話を聞いてない！ この感触は幸せだけど、みんなの前だし……って、今日香ちゃんも見てるなら、止めてよー？」

「はい。それでは……お2人は病める時も健やかな時も、愛する事を誓いますか？」

今日香ちゃんも茶化しながら、そんな事をぼくたちに言ってくる。

……茶化してるんだよね？ それ？

「うふふ………はっ、ゆうま！？ ああ、すまない！ 舞い上がってしまったっていたようだ」

「はあはあ、もう少して、誰にも言えない情けない死因になる所だった」

「とにかく、私の課題も1つクリアしたし、子供たちの危機も去った。万々歳だな」

「ふう……ま、そうですね。よかったよかった。めでたしめでたし」

……って、あれ？ 戦闘画面が解除されていないぞ？

（ユーマさん。あそこでなにやら特殊イベントが起きていますよ？）
エリュエちゃんが、さつき戦闘があつた場所を指し示す。

ん？ なになに？

「ピ、ピギー……」

なんと、スライムが起き上がり、なかまになりたそうな顔をしていた！

ああ！ そういえば、そんなイベントもあつたなあ。

「ほう……まものが起き上がるなんて、珍しい。もしかして、君はまものに好かれるくらいがあるのかもしれない」

「えっ？ ぼくが？」

信じられないけれど、確かにスライムはプルプルと震えながらも、ぼくの方をじいつと見ている。……どうしよう。

（かわいいですし、ペットにしてあげてもいいんじゃないでしょう
か？）

（うーん。でも、母さん、ペット嫌いなんだよね……）

まあ、これがペットになるのかどうかは疑問だけれども……

『ぶるぶる。ぼく、わるいスライムじゃないよ……？』

つぶらな目をして、そんな事を言っているような錯覚に陥ってしまつた。

そして、なおも先ほどの選択肢がぼくの目の前に立ちふさがっている。

なかまにしますか？ はい いいえ

……うーん。どうしたものか。

やつとこさ帰宅

結局、スライムを仲間にし、そのまま孤児院に預ける事にした。斑鳩さんがいるし、サスケ（スライムの名前ね）はすでに子供達にかなりの人気者だったので、その方がいいと判断したのだ。

勝手に連れて帰ると母さんが怒るし……というよりか、スライムって、なに扱い？

そして、斑鳩さんと別れ、夕闇に染まる空の下、ようやくぼくは帰宅したのだった。

「ただいまー」

玄関を開けると、案の定、すぐ目の前に妹が腕を組んで立っておりぐちぐちと説教してきた。

妹はいつもぼくが遅くなるとずっと玄関の前で待っているのだ。

「もう！ お兄ちゃん！ 今日学校午前中だったはずじゃない！ それに学校が終わった瞬間に教室出て行ったはずなのに、こんな遅くまでどこに行ってたの！」

「ごめんごめん。お兄ちゃん、ちょっと事件に巻き込まれちゃってさ……」

って、あれ？ なんで妹がぼくが教室をすぐ出た事を知っているんだ？

正確には、『無理やり連れ出された』んだけれども。

「それはね、お兄ちゃん、」

理由を言おうとする妹の声と重なって、別の声が奥のリビングからした。

「うふふふ」それは、私がいるからなのよ」

「ええっ、冬音姉！？ どうして冬音姉がぼくの家にいるのさ！？」

「あれっ？ お兄ちゃん、知らなかったの？ 今日から冬音姉ちゃ

んが家に泊まるって」

「ホントに！？ そんな事、聞いてないよ！？」

「お母さーん。ユウちゃん、なんにも知らなかったようですけど」

「おかえり、ユウマ！ って、あれ？ 私、言っただけ？」

冬音姉の後ろから、顔を出してきた母さんがペロリ、と舌を出す。

「聞いてなかったよ？ 冬音姉が家に来るなんて」

「ごめんごめん。でも良いでしょ？ 一応、言っておくけど、今日から冬音ちゃん、うちの家に居候する事になったから」

「ええー！！？ 泊まるんじゃないくて、居候！？ そんな、突然！？」

「あんたに言うのを忘れてただけ……ま、いいじゃない！ 昔よく遊んでいた仲でしょ？」

「それは、そうだけどさー……」

「えっ……もしかして、迷惑？ それともユウちゃん、私の事、嫌いになっちゃったの？」

引っ越してからずっとユウちゃんの事を思ってたのに、そんな……
「うっう」

途端に泣き崩れてしまう冬音姉。

「ちよ、ちよつと、泣かないでよ！ そんな、冬音姉を嫌いになる訳ないじゃないさ！」

悲劇のヒロインみたく、よよよ、とフローリングに伏してしまっていた冬音姉を起こす。

「……………ホントに？」

「ホントだよ」

「ホントにホント？」

「ホントにホントだから」

「ホントにホントにホント？」

「ホントにホントにホントだってば」

「ホントに……」

「だーっ！ ウソじゃないから！ いい加減、機嫌直してよ！」
今まで接してきた法則で行くと、あの掛け合いは絶対に終わらないからだ。

「……じゃあ、あの約束覚えてる？」

あの約束というと……

「うん。覚えているよ。冬音姉の学校……って、今はぼくの高校でもあるか、

そこにある大きな樹の下でした約束でしょ？ 忘れるはずがないじゃないか」

「良かった……忘れられたかと思った。やっぱりユウちゃんはユウちゃんだね！ あの頃と全然変わってないの」

昔のように満面の笑みで、ギュッ！ と抱きついてくる。

いや、昔とはちよつと違うな。

おもに胸にのしかかって来る圧力が増しているような……って、違う違う。

「もう、全然変わってないって、ぼくだってちゃんと大きくなったさ」

「ううん。そうじゃなくて、優しいところは変わってないもの」

「そう？」

「うん。学校では教師と生徒だから昔のように喋れないし、

今日もあんまり喋れなかったから、もしかしたら変わっちゃったのかも、って心配だったんだから」

ううん。確かに教師だから、ぼくだけに昔みたいな接し方は出来ないと思うけど……

というか、HRの時、めちゃくちゃ喋ってたんだけど、あれでも、あんまり喋れなかったという認識なの？

それなら冬音姉を満足させるには、どんだけ喋ればいいんだよ。

「教師と生徒だけど、一緒だからいいじゃないか。心配しないで冬

音姉。

「ぼくは昔と全然変わってないからね……あ、でも、変わってるとしたらどんな風になってると思った？」

その質問に、冬音姉が目線を上にして考え始めた。

「うーんとね……まず前髪が、目が見えなくなる位に伸びてて、やれば出来るのに力を出してなくていつもヤル気なさそうにしてて、普通の人生が一番だと思ってて、やれやれが口癖になってて、それで昔、女の子とした大切な約束を忘れてる感じがな？」

……なんか、やたらと具体的なのは気のせいなのかな？

「でも、そんな悪い子に育ってなくて、想像していた通りのユウちゃんで良かった。」

そう言つて、また強く抱きつかれる。

「ぐっ！ く、苦しい！ 力は強くないけど、胸に圧迫されて、ぱふぱふで、息が……」

「うーん！ この抱き心地、何回抱いても飽きないわ」 すりすり」

ああ……なんだか、眠くなってきた……気持ちいいな……あ、空から天使がやって……

そんな心地いい空間は、横にいた妹の大声で破られる事となった。

「あーん、もう！ お兄ちゃんも冬音姉ちゃんも、こんな玄関で、いつまでもいちやいちゃしてないで、早くご飯を食べよう！」

「そうよ。母さんもお腹すかせても食べずに、ユウマが帰ってくるのを待っていたんだから！ ほら、早く手を洗ってうがいをしきなさい」

「……ぷはっ、ごめんごめん。妹にお母さん……ほら、冬音姉も早く立ってさ！」

そうして、なおも抱きつき足りないのか、未だ渋る冬音姉を先に

リビングに行かせて、ぼくは手を洗うため洗面所に向かった。

「ふう。すごい疲れたよ……家にまで騒動がやってきたとは……」

（でも、楽しそうなのが羨ましいです……わたくしもこの団欒の中に入ってみたいです）

（そうか、エリュエちゃんは、みんなと話せないもんね）

（そうです。聞いているだけなのが、少し寂しいです）

（あれ？　そういえば、エリュエちゃんがそんな体になった理由って何だっけ？）

（はい。その事なんです……）

その時、廊下から急に誰かが、にゅっ！　と首を伸ばしてきた。「うわっ！？」　って、お母さんか。びっくりした……で、どうしたの？」

「聞き忘れたんだけど、あんたがさっき言っていた、冬音ちゃんと伝説の樹の下でした約束って、何？」

やってきましたお色気イベント？

そうして、先ほどの約束は何なのか散々、母さんに茶化されもみくちやにされながらも夕食を食べ終わった。

まったく！ 母さん、お酒が入るとタチが悪くなるんだから！

しかも、冬音姉も、ザルか、お酒の神様のバツカスのようにお酒を飲んで……いちいち、お酌をするのも大変だよ。

いつもは母さん1人なのに、面倒なのが増えてしまった。

2人とも、面白半分にぼくをつまみにするし、しかもベタベタとくっついてくるし、

それを見ていた妹も混ざってくるし、そうして3人でしっこく絡んでくるし、ホントにもう！

大人は！ まったく大人は！ あ、妹はいいんだよ。オールグリーンだよ。

そうして、これ以上撫で回されないよう2人に気付かれる前に部屋を抜け出して、こっそりとお風呂に入る。

流石にお風呂にまでは、ちよっかいをかけてこないだろう。

チャプチャプ……

「はあく。あつたかい。やっと落ち着けるよ。やっぱりお風呂は心が休まるな」

（へえー。ここの星の人たちは、温めた水の中に入って体を清めるのですね）

（そうなんだよ。日本人は1日1回お風呂に入らないとね……って）

ああ！ エリュエちゃんを忘れていた！

わたわたと、慌てて体（特に前の方）を隠す。

（……あの、エリュエちゃん。も、もしかして……見た？）

（はい？ 見た、とは……何をですか？）

きよとん、としているエリュエちゃん。

（それは、その、ぼくの……い、いや、見てないならいいんだよ！）
口に出しそうになった単語を慌てて引っ込める。

見てないならそれでいいのだし。

（あつ、わかりました！ 以前習った、生物学上、違った個体を持つ場合にオスの……）

「わー！ わー！ わー！ わー！」

大声でエリュエちゃんの話を打ち切る。

これ以上この子をしゃべらすと、とんでもない事を言い出しそう
だ。

（お願いだから、お風呂に入る前後の事は忘れて！）

エリュエちゃんに精一杯お願いする。

（ええー！ ……まあユーマさんがどうしても、とおっしゃるのなら、いいですけど……）

つまんなさそうにするエリュエちゃん。

だが、こういった事はやはり男の沽券に関わる問題なので、
多感な青年期を過ごすぼくには「女の子に。〇を見られた」とい
う事実さえ、

エネルギーに変えてしまう程のポテンシャルを秘めている訳であ
って……いかん。

なんだかこの話の流れはイヤな予感がする！

こんな時は、ベタな漫画みたく素数を数えよう！

ええと……あれ、1は素数だっけ？

（1は素数じゃないですよ）

（ああ、ありがとう……えーつと、3・5・7・11・13……次
は）

（17です……あの、なんで素数を数えているんですか？）

（それはね、男の沽券にかかわる問題……って、説明させないで！）

（はあ）。素数は、男の沽券にかかわる問題、なのですね……深い

です)

(いや！ そういった事じゃなくてー！ ああ、もうなんて説明すれば！)

お風呂の中で、エリュエちゃんと、そんなやり取りをしていると、
「ちよつと、ユウちゃーん。お風呂でなにを騒いでいるの？」

洗面所で、ベロンベロンに酔っ払ってヘラヘラしている冬音姉の
声がした。

「ううん！ なんでもない！ なんでもないよー！」
努めて普通の声を出す。

確かに1人で声を出したりしてたら怪しいもんな。

まあ、早い所、お風呂をあがる……ん？ シュルシュル……？
なにやら外で衣擦れの音がするけれど……って、ま、まさか！！？

がちやつ。

「おっじゃましまゝす！」

ほろ酔い気分の冬音姉が入ってきた！ し、しかも、す、素っ裸
で！ うおおおい！？

多量の湯煙と、謎の光のおかげ(せい?)で、間一髪、見ずに済
んだのだけでも、こ、これはマズいよっ！

「ぶっ！ ちよつと、冬音姉！ 隠して、隠して！！

いや、てかなんで入ってくるの！ まだ、ぼく入っているんだよ
！？」

目を閉じて、必死に冬音姉のスレンダーな、しかし出ている所は
出ているという理想の肢体を見ないようにする。

……え？ なんでわかるかって？ いや、見てないよ！ 想像し
て言っただけで！

って、想像しちゃダメだ！ ああ、鼻血が……！！

そんな1人で勝手に自滅しているばくに構わず、体を洗い流し始

めた冬音姉。

「え〜！ だって引つ越す前は、よく一緒に入ってたじゃない！」
「それは何年も前の話だよ！ その時は、ぼくもまだ小学生だったし」

「でも、私はその頃、ユウちゃんと同じ高校生だったから状況はあんまり変わらないと思うよ〜？」

昔と同じ、裸の付き合いなんだから、いいでしょ」

冬音姉のエコーのかかった、お気楽な声がお風呂に響き渡る。

「いや、昔と全然、状況が違うよ！ 本当に、その、困るからさー！っ！」

「え〜？ 違うとか、困るって言うてるのは、さっきからユウちゃんが必死に隠している〜、コ・コ・の・こ・と・か・な〜？」

耳元で、艶のある、いじわるな声をささやかれる。

目を閉じているから、冬音姉の動きがわからずに余計に、こっぴどい、いや、混乱してしまう。

「うふふ……ユウちゃん、固くなっちゃって、かわいい」 ふ〜
（はあと）」

そうやって耳に息を吹きかけられる。うっ、ゾクゾクしちゃううっ！

……あ、ていうか、固くなってるのは体の事だからね！

決して、それ以外の意味はないんだからね！ 他意はないから！

（？ という事は、それ以外の意味があるんですか？）

（エリュエちゃん、もう勘弁してください！ ぼくも、もういっぱいいいんです！）

（はあ……よくわかりませんが、わかりました）

しかし、いつぱいいつぱいのぼくに更に追い討ちをかけてくる者がいた。

ガチャッ!!

「お兄ちゃん。冬姉ちゃんとも入るなら、わたしとも入ろうよー
ー!」

「えええ!? メイーーーーっ!!!?」

不自然な光と湯けむりがガードしているので安全です

なんという事だ！　今までの騒ぎを聞きつけた妹もお風呂に入ってきた！

春休みにせつかく、一生懸命、誠心誠意に説得し尽くして、

一緒にお風呂に入る事をお兄ちゃんは泣く泣く、メイはしぶしぶ諦めてくれたのに！

「えへへ〜！　やっぱり、お兄ちゃんがいらないとお風呂は楽しくないもんね〜！」

ああああ！　逆戻りになってしまっ！　また一から説得し直さないとイケないの！？

「メイ！　お兄ちゃんはもう上がるから！　それじゃ、冬音姉と2人で楽しんで！」

「ええ〜！　そんな！　お兄ちゃんのケチ！　冬姉ちゃんも何か言ってよ！」

「というか、ユウちゃん、今、湯船から上がれるの〜？」

「……………」

ちやぷん……………

（あれ？　なんで上がらないんですか？　ユーマさん？）

（…………心頭滅却…………無知蒙昧…………臥薪嘗胆…………曖昧模糊…………警邏巡回…………魑魅魍魎…………）

（ねえねえ、少しはわたくしの質問にも、ちゃんと答えてくださいよ）

（ダメだ！　それをしてしまうと、兄の威厳が今、ココで失われてしまうんだ！）

（でも、肝心の妹さんが、楽しくないようですね）

「ぶー！ お兄ちゃん！ 目をつぶってたら、全然、面白くないよ！」

「駄目なの！ ぼくは、不用意なHシーンでは、
『目を開けぬ、見ぬ、覗かぬ！』」

この鉄の掟に従って生きているんだから！」

「あらら、でもそんな事してたら、ここが、がら空きになっちゃうわよ？」

「こちよ、こちよ。」

「ぶっ！？ あひゃひゃひゃ！ ちよ、ちよと、冬音姉っ！？」

「ほらほら、早く目を開けないと、ここも甘いわよ」

「わたしもわたしも！ お兄ちゃん、ここがお留守だよ」

「ちよ、ちよと！ 止めてよ！ うひよひよひよ！ や、やめて！ らめー！！」

ムニユ！ プニツ！

「あんっ♪」「ひゃん！？」

……………今の感触は……………？

（それは、妹さんと冬音さんの、）

（みなまで言わないで！ これ以上は、のぼせる前に頭に血がのぼっちゃうから！）

「ユウちゃん、ちよと見ない内に、こんなにえっちい子になっちゃったのね？」

「お兄ちゃん！ 妹にそんな事したら、メーッ、だよ！ あ、でもちよとと位ならいいかも……もう少し触ってみる？」

（ふふふ、ユーマさんはみんなから好かれていますね？）

「もう限界だ！ ここから出してよーっ！ 生き地獄だー！ 生殺しだー！ー！！」

ガチャ……………またお風呂の扉が開いた。あれ？ 誰か出たの…

…それとも……？

その疑問は、扉を開けた当人の声を聞く事によって解消された。

「なーんか楽しそうね。私も久しぶりに、母子で入るうつかな」

「でええええ！？ そ、その声は、おおおお、お母さんんん！！
！??????」

「何よ、そんな驚いた声出しちゃって。2年前まで一緒に入ってた
じゃない？」

「で、でで、ででも」

「ふーん。少し見ない内に元気に太く、たくましく……じゃなかった、大きくなつて」

「あら？ お母様、見ている場所が少し違うように見えるんです
けれど。」

……でも確かに昔と違って、見違えるほどたくましくなっています
ね」

「うふふ……そうでしょ？」

（ちょ、ちよつと母さんたち、一体どこを見ているのさ！？）

（それはですね、ユーマさんの、）

（エリユエちゃんも毎回、律儀に答えようとしないでいいから！
言ったら目を隠している意味と、ぼくの理性と尊厳がなくなつち
やうから！）

「ねえねえ。お母さんに冬姉ちゃん、なんの話をしているの？」

なんの事かわかつてなさそうな妹が、無邪気に2人に質問をする。

「それはね、ゴニョゴニョ……」

な、何をメイに話しているんだ……メイも、ほえ、とか言つて

……気になるじゃないか。

「つて、はっ！ 今だ！ そ、それじゃ、ぼくはもう出るから！」
バチャッ！

「あん！ 母さんが入ってすぐに出るなんて、そんな放蕩息子に育
てた覚えはないよ！」

「は、離して！ お母さん！ もし本当に息子の事を思ってるんな

ら、今だけは、今だけは、ぼくを自由にしてよー!」

ばたばた!!

(なんか和気藹々としていて楽しそうですね)

(どこがだーっ!? どこを見たらそんな風に見えるんだーっ!?)

「わーい! わたしも! お兄ちゃんと!」(ぷにゅん)

「それじゃあ、私は開いているここにね」(もにゅん)

「あらあら、まあ、ユウマったら恥ずかしがって」(モニュモニュ)

「そんな、ちょっと、冬音姉、お母さん、メイ、やめ、やめ……」

「うふふ、そんな事言っても。あらあら? おいたはダメよ」

「(たゆんたゆん)」

「息子の成長を見るのも母の役目だから、こういうのは仕方がないわ」(むちりむちり)

「お兄ちゃんと久しぶりのお風呂だもん。もっと一緒に入りたいもん」(ペタリペタリ)

(うふふ……この世界の人達はこうやってお風呂に入るんですね)

(エリュエちゃん! 誤った知識を詰めないで! 誤解されるから

! ……って、ああ!?)

「そんな……そこは!? ダ、ダメだよ! あっ、あっ、あっ……

あー……っ!」

ワオ………ワンワンワン!!

ここまでのはほんとは

……………ドサッ。

全ての精魂が尽き果てたかのように自室のベッドに顔を埋めて倒れこむユーマ。

もう起き上がる気力も体力も残ってなさそうだ。

（色々と大変でしたね）

（……………）

エリュエちゃんの慰めにも何も答えない。

シクシクと泣き声がするのは気のせいだろう。

（あの時の皆さんはすごかったですね。ユーマさんを取り合いへし合い、くんずぼぐれず）

（……………）

（ユーマさんも必死に抵抗しましたが、最後には陥落してしまい、ぐったりと…………）

（……………）

（それでも、ユーマさんのピー、がピー、するなんて思いもしなかったですし、それに、）

（ああ！ もうこれ以上、思い出させないでくれよ！ エリュエちゃん！）

ガバツ！ と枕から泣きそうな顔を上げ、宙に浮かんでいる天然幽霊に非難の声をあげる。

どうやらトラウマなみの出来事があったようだ。

そっとしてあげよう。

大体の想像はつくけれども。

（うつ、あんな事されたら、もうお嫁に行けないよ……………エリュエちゃんにも見られたし）

（そうなのですか……でも、大丈夫ですよ。ユーマさんは男の人だから、お嫁に行けなくてもお婿に行けばいいんですし）

（そういった意味じゃないの！ ナチュラルにベタなボケをして！ ああ、星が違つとニユアンスが伝わらないのが、ちよつと齒がゆいよ……）

ま、エリュエちゃんの場合は特別な気もするけれど。

（あつ、そういえばですけど、）

エリュエちゃんが、何かを思い出したような顔をした。

（……なに？ お風呂場の事は、もう話さないでよ）

（いえ、わたくしの体の事です）

体……体かあ……体といえば、さっきの3人の体はとも……じやなかった、ええと。

（そういえば、ずっとバタバタしててエリュエちゃんの話をやつくり聞く暇がなかったね）

（そうです。ユーマさんは朝からノンストップで、女の子とドタバタしてましたからね）

（女の子は余計だけど……まあ、合ってるけど……）

今日の運勢を見ていたら、絶対に女難が出ていたであろう。ぼく限定で。

（それで、話つていうのは？）

（はい。少し曖昧なんですけれど……ええと、どこから話せばいいものやら……）

（何でもいいから話してみよ。そうすれば、思い出すきっかけも掴めると思うし）

（どんな事でもいいのですか？）

（うん。些細な疑問から事件というものは解決する、ってじつちゃんも言ってたから）

ぼく好きな推理漫画の孫がね。

（はい。わかりました！……それでは、男の尊厳というものは、

いたい)

(ああああ！ 何でもっていうのは、エリュエちゃんに関してで、ぼくの事じゃないの！)

(そうですね。うすうすはわかっていましたけれど、何でも、とおっしゃるので)

(ごめんごめん。確かにエリュエちゃんにとってみたら、ぼくらの風習が珍しいのかもしれないから、聞きたくなるんだと思うけど…)

ふう。エリュエちゃんと組めば、天然の漫才が出来るよ。

宇宙人と話すのってやつぱりとっても難しい。宇宙会話教室とかどこかでやってないのかな？

(で、話を戻すと、どんな話をしたいのかな？)

(はい。わたくし、どうやら記憶喪失みたいなのです。何も覚えていないんです)

(ほうほう、何も覚えていないとな……って、ええ！？ エリュエちゃん記憶喪失なの！？)

(はい)

さらりと世話話の延長で話してくれたエリュエちゃん。

そんな、「あ、思い出した」とか言った感じで話すような内容じゃないから！ というか、すごい普通だよね！？

エリュエちゃんが、全然動揺してない事に、ぼくが動揺しちゃうよ！

(自分が記憶喪失だって、いつ気が付いたの！？)

(朝の真由さんと女幹部さんの戦いの後ですが……)

(ええ！？ 結構、最初らへんじゃない！？ なんて、そんな大事な事を……って、ぼくがバタバタしてたからか……)

いやいや！ そうだとしても、そんな事になってたならもっと早くに言うべきじゃないかな！？)

(それでも、ユーマさんが大変そうでしたから)

叱られているような顔で、そんな事を言ってくれるエリュエちゃ

ん。

な、なんて優しいんだ。

理由としては、なんとなく少し違う気もするけれど、でも純粋に嬉しいよ。

（うつ、エリユエちゃん。君ってホントいい子だね……自分の事を後回しにしてぼくを助けてくれるなんて……

ぼく、今、モーレッツに感動してます……あんた、ええ子や）

（いえいえ、わたくしなんて、ただ単に、ぼやんとしているだけですから）

……それはちょっと、そうかもしれない。

でも、エリユエちゃんがいい子である事に変わらない。

やはり、今の状態を治してあげたい。

（記憶喪失って事は、何も覚えていないの？）

（はい。名前は覚えていたのですが、宇宙人というのも忘れていたぐらいですから……）

（そうか。記憶喪失って、そうそう起こる事はないんだけれどなあ）

（そうなんですか？ わたくしは困っていないのでいいのですが。能力も使えていますし）

（そういえば、そうだね。レポートとか、ハッキングとかの、色々な能力は使えていたもんね。あれは忘れていなかったの？）

（ええと、忘れていたのですが、体が覚えていたというか……あ、でも、今は体はないから……うつ、なんて言えばいいんでしょうか？）

（いや、言いたい事はわかるから。でも体がなくちゃ始まらない……って、そうそう！）

大事な事を忘れてたよ！ ていうか、普通は本人が気づくはずなんだけれども。

（はい、なんですか？）

（エリユエちゃん、ぼくに寄り憑いてるけど、『元の体はどこにあるか』とか『なんでそんな体になった』とか心配しないの！？）

（確かに気になりますけど……まあ、大丈夫でしょう。）

仮に体がなくなつたとしても、意識さえあれば、ユーマさんに寄り憑いていればいいんですから）

そう言つて、ぼくの肩に乗つかるようなポーズを取つて笑うエリユエちゃん。

（いや、そんな悠長な事を言つてる場合じゃないと思うけど……）

（ユーマさんは別に、わたくしの事なんてお気になさらなくてもいいんですよ？）

（そうだけども……やっぱり、元に戻つた方がいいと思うんだけどなあ）

（わたくしは、今も充分に楽しいからいいのですけども……ユーマさんが、そう言うのでしたら元に戻りましょうか……）

そういえば、アイスという食べ物も食べてみたいですね）

うん。根本的に考え方がぼくとは違う。

体がなくても意識はあるから別にいい、なんて、普通だつたら考えられないよ。

おおらかというか、エリユエちゃんの事でオロオロしている自分がバカらしくなつてくるよ。

……いや、それが普通なはずだ。

誰だつて、記憶をなくしたら取り戻したいし、体がなくなつたら元に戻りたいはずだ。

（やっぱり体がなくなるのは、色々困ると思うから、今日は遅いけど、明日からでも体を捜していこうよ。ぼくも一緒に探すからさ）

（そうですか。わかりました。わざわざありがとうございます）

（そんなお礼を言わなくても……エリユエちゃんにも、たくさん助けてもらったしお礼を言うのはぼくの方だよ。）

……エリユエちゃん、今日は本当にありがとうね）
ぼくの肩にいるエリユエちゃんにお礼を言う。

それを見たエリユエちゃんは感涙したようだ。

（ああ、なんて心遣い……わたくしの為に頭を下げしてくれるなんて……！）

（何度も言ってるけど、そんな事ないからさ）

（いいえ……ユーマさん。今日1日、ずっと見てきましたが、あなたは本当に心がピュアでお優しい方なのですね……あなたのような方が……あなたのような……？）

そこまで言いかけて、エリユエちゃんはあごに手を当てて、なにやら思案し始めた。

（今、何か言おうとしたのですが……えーっと、何かを思い出せるような……えーっと……ああ、忘れてしまいました）

（そうか……残念だな。でも、その調子ならまた思い出せるはずさ）
（そうですね！ この調子なら死ぬまでには戻れそうです）

多くの励ましに明るい顔を向けてくれる。いや、死ぬ前には戻ろうね。

あ、でも元の体次第では、悠長な事も言ってもらえないんだ。

今の内に少しでも情報を知っておかないと。

（やっぱり、さっきの事って、思い出せないの？）

（うーん。難しいですね……でもさっきの話の中にティン！と来るものがあって、それで何かを思い出せそうな気がしたのです……）

（え？ 今のやり取りに思い出せそうな要素があったの？）

（はい……それを言おうとして、記憶が取り戻せそうだったのですが……）

今の会話の内容って……優しいとかピュアとかだよな………そんなに反応したのかな？

（そうですね。ユーマさんがピュアなのに反応したかもです）

（そんな……ぼくは別に純粋でもないよ）

（いいえ、そんな事あります）

そう言ってくれるのは嬉しいけど、今日の事を省めても、自分がピュアとは言いがたい。

エリュエちゃんは、ぼくの地の文を、心の内を読めるはずだから、あんな事やこんな事を考えているのもわかつているはずだから、全然ピュアじゃないのを知ってるのに……

（いえ、男の子でしたら、それ位、異性に興味を持っているのが自然だと思いますよ。

それでも自分を律して、相手を助ける方を選択する事が素晴らしいのです）

（は、はぁ……ありがとう）

なにやら、エリュエちゃんの独自の考えにぼくも揺らぎそうだ。

この子が宗教を開いたら、ぼくも入信しそうな勢いだよ……って、ぼくの話はいいから、エリュエちゃんの話をしなないと。

毎回、話があっちこっちに飛んで行っちゃうな。

（で、ぼくに取り憑いたのは、やっぱりぼくが爆発に巻き込まれて飛んでいた時なの？）

そう。あの時、初めてエリュエちゃんの声聞いたんだった。

（そうです。わたくしが、ふよふよと小鳥さんと空を漂っていた時に、ユーマさんが空から舞い降りてきたのです……ああ、運命的な出会いでした）

そんな目をキラキラと輝かせなくても……ま、空から人が降りてきたら驚くわな。

（それで、その時に、ぼくに取り憑いたんだよね？）

（はい）

てことは、それでは助かったわけだ。文字通り、エリュエちゃんは命の恩人って訳か。

（それじゃ、その前は？）

（えーっと、小鳥さんと遊んでいて……その前は、ネコさんと遊んでいて……犬さんは、吠えて怖かったですね……その前は、ウサギさんで……もつと前は……）

どうやら、色んな動物と触れ合ってたようだ。なんとなく想像がつく。

しかし、このままのスピードだと、らちが明かない。先に夜が明けそうだ。

ぼくが話をリードする事にする。

(……じゃあさ、記憶を失ってから一番最初に覚えているのは?)

(そうですね……えーっと、あ！ ユーマさんの学校の近くの路地にいました)

(おお！ やつと、具体的になった！ それで?)

(それで……散歩している犬さんがを追いかけて、途中でネコさんを見つけて……)

(オーケー。わかった、わかった。そのままぼくに会ったんだね)
(はい！ よくわかりましたね?)

いや、もうホントになんというか……この子は自分の境遇を悲観していないのがすごい。

記憶喪失になって、自分の体がなくなっても、自分自身を探そうとしなかった人なんて過去の映画とかマンガにあっただろうか？
いや、いまい。いてたまるか。

(とにかく、今の所の手がかりは、ぼくの高校の近くで気が付いたって事でいい?)

(はい！)

(それ以外は?)

(わかりません！)

元気よく答えてくれるエリュエちゃん。はあ……自分の事なのに、ぼくがやるしかないか。

でも体と……記憶かあ……難しいな。記憶が蘇らないと体も元に戻らなそうだし……

まあ、でも早い所、エリュエちゃんの体を見つけないとな……。

勇者よ……

勇者よ……

勇者よ……

目覚めなさい……

私の勇者よ……

勇者？

勇者！ 勇者っ！！

ちょ、起きなさい！

こらー！ おーきーなーさーいー！ ゆーうーしゃー！

えっ？ まだ眠るの？ 全く反応なし？

普通、脳に直接、呼び出されたら起きるでしょ！？

どんだけ眠りが深いのよ！？ ちよつと、早く起きてよ！

私もあんまり時間がないんだから！

ちよつとー！ あんたが寝てたままじゃ、物語が始まらないで
しょ！

ねえ、早く起きて……っで、ああ！？

勇者が起きない内に通信が終わっちゃう！？

こんなの前代未聞よ！ 聞いた事ないわよ！

ていうか、私1人で喋ってるなんて、変な人みたいじゃないの！

うゝ、こんな事、恥ずかしくて他の人に言えないゝ！

屈辱だわゝ！！ もう、こうなったら最終兵器を出すしか……

あ、そうだ。今日はなかった事にしておけばいいんだ！

それで明日また連絡すれば、何も問題は……

（あんなの、誰もお気に召さないよ！ 今度から絶対にやめてね！）

（すいません……明日から違う方法を考えておきます）

（出来れば、その方法を試す前にぼくに教えてね。はあくって、あれ？

なんか、重要な夢を見てたような気がするんだけど……ええと、どんな夢だったかな……？）

（ユーマさんを見ていましたけど、かわいい寝顔でしたよ。夢を見ていたような気配なんて）

（もう、恥ずかしいから寝てる所の顔なんて見ないでよ……）

（そうでしたか。それなら今度から……）

バァン！

SE 扉・突入

「お兄ちゃん、どうしたの!？」

「うおっ!？ ああ、メイか。……いや、なんでもない。少し悪い夢を見ただけだから」

「そうなの……怖くなったら、いつでもわたしの部屋で寝ていいからね?」

「いやいや、兄としてそれをする訳にはいかないよ……てか、久々に1人で起きたな」

「あゝん！ 夢のバカゝゝ！ お兄ちゃんを起こしていいのは、わたしだけなの!」

「はいはい。メイも早く着替えるよ」

「はゝゝい。それじゃ、後でね」

BGM ♪ 爽やかな朝

バタバタ、バタバタ……バシャ、バシャ……ふきふき…… SE

足音・水音・布ずれ

「おはよう、ユウマ。2階で大声出してどうしたの?」

「いや、少し変な夢を見ちゃってさ、おはよう、お母さん。って、なんで玄関にいるの?」

「ユウちゃん、それって、どんな夢だったの？」

「それが、ぼくの大声で忘れちゃってさ……あれ？」

「おはよ、ユウちゃん」

「おはよう、千冬姉。……えっ？ 靴を履いて、もう学校に行っちゃうの？」

「うん。先生は、みんなより、ちょっと、早く学校に行かなくちゃいけないの。」

本当は、ユウちゃんと一緒にごはんを食べたり、いっぱいお話ししたかったんだけどね」

「そうなんだ、残念。それじゃ、明日から早く起きれるように頑張るよ」

じゅん……！

SE 感動の涙

「うっ……朝の弱いユウちゃんが、そんな事を考えてくれるなんて……感激～！」

ぎゅっ……！

SE 背骨折り

「うっ……？ 苦しいけど、気持ちいい……ぐえっ……」

「……ん……！ これで、HRまでのユウちゃん分が補給できたわ。」

それじゃ、改めて行ってきま～す、お母さん、お見送りありがとうございました～」

「はいよ。行ってらっしゃい……んっ？ なに、ここで寝てるの？ ユウマ、起きなさい」

「うっ……がくっ……」

画面演出 暗転

疑問点解決

「「ごちそうさまでした」」

「いや、おいしかった、おいしかった」

(……あの、ユーマさん)

(ん？ なんだい？ デザートはあげたかったけど、その体だったら、やっぱり……)

(いえ……それも欲しかったのですけど……あの、なんだかおかしくないですか？)

(ん？ おかしいって、どういう事だい？ どこか、おかしい所でもあるの？)

(あまり、はつきりとは言えないんですけど……何かが違っているような……)

(ふーん。よくわからないけどさ、気のせいなんじゃないかな？)

(そんな事は……ないと思うんですけど……)

「ほら、ユーマ。そんな所で、ぼさつとしてないで早くお弁当をがんばんに入れておきなさい。忘れるわよ」

「ああ、ごめんごめん、お母さん」

ぱあ！

SE お宝ゲット

『母さんの手作り弁当』を手に入れた！

……………。

あああああ！ 変な効果音が鳴ってる！？ しかも、弁当がアイテムみたいになってるし！

あ、あと、地の文がない！ しかもなんか変な注釈がある！？

（ああ、そうです！ そこです！ 道理でおかしいと思いました！）
危ない、危ない。地の文がなくて会話文とSEだけじゃ、万が一、風景が見えない人がいたら、

全然、状況がわからないじゃないか。

なんておそろしい事を……というか、なんでこんな変な事になったんだ……？

（朝、起きた時には、こうなっていましたね）

（うん。そうだ……このまま気づかなかつたら……危なかった。エリュエちゃん、他におかしい所はないかな？）

（他にですか………あ！）

（なにか見つかった？）

（はい！ ユーマさんは止まっているのに、その場で手足を動かしています！）

テクテク。

（……ああ！？ ホントだ！ 止まっているのに、なんで運動会の行進みたいな事を！？）

すぐさま足踏みを止める。

ふう、危なかった。何かの呪いでもかけられたのかな？

思い起こしてみると、今日、目が覚めた時からこんな風になっていたな。

覚えていないけれど、夢の中の出来事が関係しているような気がする。

うーん。なんか、誰かに呼ばれていたような………なんだっけな
あ………

ダメだ。思い出せない。

どうしてこんな昔のRPGみたいな事になったんだ？

「お兄ちゃん！一緒に学校行こうよー！」
妹が、考え事をしているばくに体当たりみたいな格好で抱きついてきた。

なので、ぼくの頭から考えていた事が全て飛んでしまった……つて、おお、説明文が戻ってきた！

こういった文がないとわかりにくいし、会話文だけじゃ読みにくいもんね。

うんうん。良かった、良かった。

「いててて……メイ、そうは言っても、中学校と高校じゃ、玄関でお別れだぞ？」

「いいの！ちょっとだけでも、一緒に学校に行ってる気分を味わいたいの〜！」

な、なんて、かいがいい妹なんだ！

中学の時のクラスのやつらは、妹となんて話さないし目も合わせたくないとか、汚物あつかいされているとか、

こんなに可愛いわけがないと言っていたけれど、とても信じられないよ。

ウチの妹は、こんなにいい子なのに！あ、こんなに出来た子なのは、ぼくの妹だからか！

「ねえ、一緒に行こうよ……？」

「そんなに頼まなくても、一緒に行つてあげるからさ！潤んだ瞳で見つめるなよ」

「えへへ〜！じゃ、去年みたいに腕を組んで学校に行こうね」
「おーけーおーけー」

（ふふ、仲睦まじい兄妹ですね）

（これくらいどこの家庭の兄妹でも普通にやっている事だよ）

そんなこんなで学校へ行く準備も整い、一緒に玄関を出た。
そして、3秒でお別れ。

「お兄ちゃん……ここで、お別れだね……寂しくない？」

「メイこそ、寂しいんじゃないのか？」

「うん……ちょっと、寂しい……だから、昨日みたいに遅く帰ってきちゃ、いやだよ？」

「ああ、わかった……あつ」

そういえば、昨日の夜にエリュエちゃんの体を捜す、って決めたんだ。うー、どうしよう？

「……？ どうしたの？ お兄ちゃん？」

「えっ……と、なるべく早く帰るようにするけどさ、ちょーつと用があつてね……」

恐る恐る、妹を刺激しないように言ったのだけれども、
じわ……

「うわー！ん！ お兄ちゃんが反抗期になったー！ー！」

ダダダダダ……と物凄い勢いで走り去ってしまった。

「あつ！？ 待ってー！ー！ メイー！っ！」

ダメだ。もう見えない所まで行ってしまった。ちゃんと理由を話せばわかってくれると思ったのに……

まあ、ぼくの背後に取り憑いているエリュエちゃんの体を捜す為に遅れる、って言うてもわかってもらえそうにないけどさ。

（すいません……わたくしのせいで兄妹の仲に亀裂が入ってしまった……）

（いや、大丈夫だよ。メイもすぐに機嫌を直してくれるさ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4832u/>

宇宙人で王女様で記憶喪失な幽霊と、魔法少女にされたヤンキー少女と、世界

2011年7月30日18時59分発行